

ジョジョの奇妙な教室

空条Q太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大きな改変事項

- ・ D I Oの棺桶が引き上げられなかった世界線。
 - ・ 承太郎が高校に上がる前から不良のレツテルを貼られている。
- 他にも改変事項ありますので気にされる方はブラウザバック推奨です！

目次

第一章 入学編く中間試験

空条承太郎 その① 1

空条承太郎 その② 8

鉄拳制裁 15

細マ×ゴリマ×彫刻×事なかれ主義Ⅱ誤算 27

5月1日 その① 38

5月1日 その② 47

中間試験 58

テストのその後 67

買い物にいこう 79

審議会編

7月1日 その① 88

7月1日 その② 95

7月1日 その③ 106

協力者 その① 115

協力者 その② 125

夏休み編

無人島に行こう その① 135

無人島へ行こう その② 143

無人島へ行こう その③ 154

無人島へ行こう その④ 164

無人島へ行こう その⑤ 175

無人島へ行こう その⑥ 183

それぞれの結果 189

第一章 入学編く中間試験

空条承太郎 その①

ようこそジョジョのいる教室へ

「中々設備の整った教室じゃないか。噂に違わぬ作りにはなっているようだねえ」

枝毛など一本も存在しないだろう艶のある金髪をかき上げながら、教室の入り口で立ったままの男子生徒が誰に話しかけるでもなく声にする。

その男子生徒は教室をぐるりと見回す。

「おや？ これも何かの巡り合わせなのだろうねえ」

フハハと高らかに笑うと金髪の男子生徒は目を止めた窓際後方二番目に座る生徒の元へ向かう。

金髪の男子生徒——高円寺六助が向かう先には座っているにもかかわらず体格の異常なまでの大きさが窺える世紀末でも通用しそうな男子生徒。

掌マークのエンブレムや鎖などを付け、他にも制服を一部改造している。

顔立ちも端正で彫りの深い、日本人離れした容姿の持ち主だ。ただ座っているだけのはずなのに、ただならぬ雰囲気纏っている。

そんな男子生徒に高円寺は声をかけた。

「君もこの学校に進学していたのだねえ、ジョジョ。お祖父様はご息災かな？ フハハ、ジョースター不動産の愛孫たる君とのコネクションを持てるとは、わざわざここを選んだ甲斐があったというものだ」
両手をポケットに突っ込んだまま、目を閉じていた男子生徒は呼び掛けに応じて静かに目を開ける。

「……高円寺六助……か。何かにつけて現れる奴……腐れ縁地味でいて気味が悪いぜ。それに、何度も言わせるな、おじいちゃんや会社の事はおれとは関係のねえ話だ」

ジョジョと呼ばれた大男は面倒臭そうに高円寺を見る。幼少期か

ら嫌々参加させられていた大人の付き合いの場で幾度も顔を合わせ
てきた顔だ。

側から見れば睨みつけられているような視線だが高円寺は慣れて
いる為、臆したりはしない。

「生憎だが、君がどう言うまいと血筋は断てないからねえ。今後も将
来を見据えた付き合いをよろしく頼むよ」

「……やれやれだぜ」

高らかに笑い笑みを浮かべる高円寺に反して、承太郎は心底面倒と
いった様子だ。

「ところで承太郎。君は学生服にただならぬ拘りがあると話していた
記憶があるのだが、ブレザーでもよかったのかな？」

「そこところは学ランに学帽の学校を探してはいたんだがな」

「最近では少ないだろう」

「そう言うことだ」

性の多様性について世間的な認知が広がるにつれ男女共用にし辛
い制服は数を減らしている。

承太郎——空条承太郎——としては憧れの形があったものの、己を
溺愛している母の子離れの為にも、高度育成高等学校に進学したの
だった。

「しかし、強情な君があつさり諦めるとは思えない。何かあつたのか
な？」

面倒な会話を好まない承太郎だが、高円寺に対して答えないという
応えがどれほどの確率で通用するか数々経験しているため、諦めて返
答する。

「珍しくじいさんが進学に口を挟んできた。その都合もある」

「ほう、彼のジョースター氏が此処を推したと？ それは興味深い
ねえ。ハハハ、受験期にやさぐれた愛孫を憂いてのことかもしれない
い」

「変わったつもりはない」

「フハハ、確かに君の魂は自由のままだ。とはいえ、法を侵しては不良
のレッテルを貼られても致し方あるまいよ」

「……………」

他でもない、この空条承太郎はいわゆる不良のレッテルを貼られている。

喧嘩相手が必要以上にぶちのめしたり、威張るだけの能無し教師に気合を入れてやったり、料金以下の不味い飯を食わせるレストランには代金を払わない、なんてことは日常茶飯事だ。

警察に厄介になることもしよっちゅうだ。

終いには喧嘩で母が警察に呼ばれることも多く、慣れた母は相手の怪我の具合を心配する始末。

「ふむ。なんにせよ、よろしく頼むよ承太郎」

嵐もとい高円寺が去ると承太郎はふうと重々しく唸る。

高円寺は席に着くと、おもむろにカバンから爪やすりを取り出し、机上に脚を投げて爪を整え始めた。

「まったく……面倒な奴と同じクラスになってしまったようだぜ」

しばらくすると、タイミングでチャイムが鳴り、担任教師らしき人物が入室してきた。

「えー、新入生諸君。私はDクラスを担当することになった茶柱佐枝だ。普段は日本史を担当している。この学校には学年ごとのクラス替えは存在しない。卒業までの3年間、私が担任としてお前たち全員と学ぶことになると思う。よろしく」

高円寺と三年間同じクラスという事実になし憂鬱になる承太郎を他所に茶柱の説明は続く。

「今から一時間後に入学式が体育館で行われるが、その前にこの学校の特異なルールについて書かれた資料を配らせてもらう。以前入学案内と一緒に配布はしてあるがな」

高度育成高等学校。

日本政府が樹立した未来を担う若者の育成を目指した特殊な高校だ。希望する進路を100%叶えるという信じがたい実績を誇る超名門校だ。

「今から配る学生カード。それを使い、敷地内にあるすべての施設を利用したり、売店などで商品を購入できるようになっていく。クレ

ジットカードのようなものだ。ただしポイントを消費するので注意が必要だ。学校内においてこのポイントで買えないものはない。学校の敷地内にあるものならなんでも購入可能だ」

承太郎は祖父がわざわざ推薦してきたこと、学校中にあつた監視カメラのこともあり説明を注意深く聞いている。

いくつか細かいことが気になるが、まずは最後まで聞くことにした。

「それからポイントは毎月1日に自動的に振り込まれることになっている。お前たち全員、平等に10万ポイントが既に支給されているはずだ。なお、1ポイントにつき1円の価値がある。それ以上の説明は不要だろう」

生活費の支給額を聞いて、承太郎も思わず耳を疑う。

沸き立つ生徒たちを他所に、学校に対する警戒心が跳ね上がった。「ポイントの支給額が多いことに驚いたか？ この学校は実力で生徒を測る。入学を果たしたお前たちには、それだけの価値と可能性がある。そのことに対する評価みたいなものだ」

茶柱はその後現金化はできないなどポイントに関する情報を伝達し、質問はないかと生徒たちを見渡す。

承太郎の腕が静かに挙がる。

太い圧倒的な存在感を持った腕にクラス中の視線が集まり、茶柱が発言を促した。

「先生、あんたはさっき入学を果たした俺たちに10万円に値するポイントを支給すると話していたな。そして、毎月1日にポイントを支給するとも話していた」

高校生離れした低く渋い声に聴き入るもの、纏う雰囲気恐怖するもの反応は様々だが、茶柱は正面から承太郎を見据える。

「ということは、だ。何の成果もなく過ごした来月の支給ポイントの額ってのはどうなるんだ？」

少々回りくどく、一部の生徒は理解していないようだが、要は入学のボーナスのない場合のポイント支給額を確かめているのだと聡い者は行き着く。

「先ほど説明した通りだ。来月も1日に滞りなく支給される」

「おいおい、俺はそんな事を聞いているんじゃないぜ。来月の支給額を聞いているんだ。さっさと答えてもらおうか」

元々ドスの効いた低音ボイスに気迫が籠り、周囲の生徒の多くは身を震わせた。

「それについては答えることができない。これが答えだ。これ以上はない」

「そいつはおかしな話じゃあねえか？俺が聞いていることは、例えるなら新入社員が会社に対して月々の給料を確認しているのと同じ事……ようは当たり前前の権利、会社側には説明責任つてもものがある。違うか？あんたら教師はこの場合で言う会社側の立場のはずなんだがな。なあ答えてくれ、子供の頃『刑事コロンボ』が好きだったせいか、こまかいことが気になるって夜もねむれねえ」

確かに……などと10万という支給額を聞いて浮かれていた生徒たちも口々に呟き始め、教室が響めきだした。

「面白い例えだが、第一に此処は企業ではなく学校だ。一緒に論じられては困る。二つ、私は必要な説明責任は果たしている。学校や教育委員会、文部科学省、何処へ訴えようともこれ以上の説明は為されないと覚えておくと良い」

脅迫じみた承太郎の問いにどうじることなく茶柱は堂々と回答だけを行う。

「最後に、空条、目上の人間に対する言葉遣いが成っていないな。言葉に気をつけたまえ」

空条承太郎がどう切り返すのか、一挙手一投足に注目が集まる。

気性が荒そうであることは既に全員が理解したところだ。逆上して殴りかかるのではないかと気が気ではない。――が。

「……なるほどな。あとはやりながら覚えると……次の質問だ」

思いの外冷静に返す空条を見て各々安堵する。

「ポイントで買えない物は無いとは、出席日数も買えるってことでいいんだな？」

「その通りだ」

「額……は聞いただけ無駄か」

「ああ、そうだ」

「そうか。どやした様で悪かったな。以上だ」

他に質問があるものはいるか茶柱が呼びかけると、物凄く気まずそうに挙手する男子生徒が1人。

承太郎の後ろに座していた男子生徒は当てられると立ち上がった。

「あの……すみません。黒板が……その……見づらくて……はい。席替えを……」

表情筋が死に絶えた少年は自信なさげに言葉を紡ぐ。隣に座る美少女がほくそ笑んでいたのはここだけの話だ。

ともかくにも、前に座るのが身長195センチメートルかつ肩幅も常人の倍では効かない巨漢が座っているのだ。

当然視界は遮られていることだろう。

「……そうか。今すぐにはいかんが座席を検討する。明日には決定して連絡する」

クスクスと笑う声が少年の心を抉るが、致し方無かった。

その後茶柱は他に質問等が無い事を確認すると退出した。直ぐにタイミングを見計らって1人の青年——平田洋介が自主参加の自己紹介場を設けた。

平田の容姿に釣られた他に、カーストなど様々な思惑を渦巻かせながら初動を決めにかかる女子たちにより可決され自己紹介が始まる。回り回って承太郎のターン。

ガタリと音を鳴らしながら椅子から立ち上がると周囲の生徒は息を呑んだ。

身長195センチの日本人離れした身体。両手はポケットに突っ込んだまま立つ姿はさながら絵画のようだ。

両耳に付けた丸ピアス、ひと房だけ垂れ下がった前髪。改造された制服に、三角形が連なった二本のベルト。

初日から圧倒的な存在感を態度だけでなく見た目でも放つ承太郎。

彫刻のような端正な顔立ちに頬を染める女子生徒も散見される。

「俺は空条承太郎。血液型はB型。趣味は飛行機や船の本を見るこ

と。相撲も、特に千代の富士の試合をよく観る。以上だ」

e C o n t i n u e d

↑ T o B

空条承太郎 その②

「ようやつと解放されたか……やれやれだぜ」

直立不動を義務付けられる退屈な入学式。教育者は話を短くと意識するらしいが、どうにも校長というひとつの高みに登った者たちは初心を忘れがちなようで、生徒たちの大半は少し聞いて思考を遮断した。

無論、空条承太郎は長時間立ちっぱなしをさせられたところで軸がブレるような柔な身体では無い。

しかし、周りの生徒たちは思考を止めたものから順に姿勢が崩れていった。

担任団の紹介や各教科担当の挨拶を終えると最後に坂柳理事が舞台に立つ。

理事長は手短に『実力を評価することや『クラスで協力』することを話すと式を終わらせたのだった。

人の波が割れて、承太郎は開かれた道を歩み寮に辿り着くと荷解きを始める。

「しかし、じじいが薦めてきた段階で何かあるとは睨んでいたが、随分と胡散臭い学校じゃあねえか」

茶柱は承太郎の質問に回答をしなかった上、何処に出ても結末は変わらないと説明した。

要は現段階では回答しないというのが学校の運営方針であり、支給される生活費たるポイント額の変動が起こるといふ事を暗に示している。

クラスメイトに『平等に』ポイント支給される事を強調していたことも気になる。

教師への質問では何も解決しないと結論付けた承太郎は行動を起こす。

そう、彼は細かいことが気になると夜も眠れないのだ。

「どうやらSシステムとやらを理解することが先決のようだぜ」

Sシステムとは、高度育成高等学校の独自システムだ。生活費のポイント支給などもこれの一環に当たる。

そして、それを調べるのに現状可能な手段は上級生に接触し確認を取るからだ。

教師が口止めされているため、上級生も二つ返事で明確な答えを言うとは考えにくい。

口止めはされているとみてまず、間違いないだろう。

しかし、たかが学生。必ずボロがでる。万が一出なくても観察から得られる情報はあらず。

一瞬で此処まで思考した承太郎は、昼食ついでに施設へと繰り出して行った。

時計の針は長針短針ともに十二を指している。放課後のテイータイムやらランチに仲間内で出てきている生徒が多く見受けられる。

今日は入学式。生徒会などの運営に関する一部生徒を除いては上級生たちは休日に該当している。

そのため、私服で歩いている者が多く、新入生と見分けることは容易い。

突如厳つい大男に話しかけられる側の気も知らない承太郎は、独りでいる生徒を見つけては声をかけていく。

被害 case その①

「おい、あんた。少しいいか」

「え……な、なんででしょうか……」

小柄なメガネの男子生徒は完全に恐怖し、足が震えていた。

承太郎は幾つか質問を纏めているので返事が得られなさそうなものから順に聞く。

「Sシステムについて、あんたの知っている事を教えてくれ」

「え、え……Sシステム？ えっと……」

たじろぐ上級生に承太郎は優しく促すよう声をかける。

「そうだ。あんたの知ってることだけで構わねえ」

「さ、3年生が……どどど、どうして2年の僕に？」

「いいや、俺は一年だ。で、どうなんだ？」

「いつ、一年!??ご、ごめんなさいっ、答えられません！」

メガネくんは言い切ると脱兎の如く逃げ去った。

「……やはり、1年には言えねえというわけか」

被害 case その②

「おいあんた、ちよつといいか」

「んだt……どうかしましたか？ あははは」

一般的に体格が良いと分類される、少しチンピラチックな男子生徒は背後から声をかけられ、振り返ると同時に態度も整えた。

「少し聞きたいことがある。何年何組だ？」

「さ、3年Cクラスです」

3年の段階で目の前の男が下級生である事は理解しつつもチンピラ君は噛みながら謙った。

「3年か。3年ともなると、ポイントの支給額ってのはどれぐらいになるんだ？」

「か、確認したいのですが、1年生ですよね？」

「ああ、そうだ」

「すみませんが答えられません」

言つて、ドラゴンなヤンキーが要求する角度で腰を曲げ頭を下げた。

「そうか。そいつは残念だ」

「そ、それじゃあ」

踵を返そうとするチンピラ君の肩を、圧倒的な質量のナニかが掴む。

「まあ、待ってくれよ先輩」

承太郎の手だ。

「は、はいー」

「これで最後にしようと思うんだが、先輩の所持ポイント額を教えてくださいませんか？」

頼むぜと言う承太郎の手に込められる力が増すのを感じたチンピ

ラ君は、学校のルール上自分が不利になる事は無いと理解しつつも、目の前の神話上の戦士のような男を目の前に恐怖に屈してしまった。チンピラ君は承太郎に『内密にしてくれ』と念を押した上で所持額を耳打ちする。

承太郎は一言、礼を言つて次に向かう。

被害者が五人、六人、そして二桁まで増えていったのは言うまでもない。

「今、得られる情報はこんな所か……しかし、厄介な仕組みだなSシステムつていうのは。肝心の査定基準が予想の範疇を超えられねえ」

承太郎がこの数十分で集めた情報をまとめるところだ。

- ・ 上級生の所持額からポイント支給額の変動はほぼ確定。
- ・ 所持ポイント額とクラスに一定の関係性が見られることからポイントの支給額は個人ではなくクラス単位に決められる。
- ・ 二学年に共通して、AからDの順で所持額が減っている傾向がある。

さらにここから『実力』に応じた査定やクラス間抗争を推測した。マジックや謎解き同様に種明かしをされればなんということはない。

しかし、入学日の段階で学校を疑い行動し、自分の考えを持つまで至る生徒がどれほどいるのかと問われれば、それは皆無に等しいと言わざるを得ない。

まさにこの空条承太郎、冷静沈着かつ抜け目ない化け物じみた漢である。

「入学時点で生徒を値踏みしてクラス分けしているとは考えたくねえが、現に俺がDクラスに配属されているってことは……無くはないかもしれないな」

殺人こそ犯してはいないものの、承太郎は不良のレッテルを貼られるほどには数々の法規違反を起こしている。

仮にAから順に格付けをするのであれば、社会性の面から最下位たるDに配属されても何らおかしくはないと考えたのだ。

承太郎にしても、高円寺にしても単純な成績で語れば非の打ち所が

ない。——が、社会適正として見た際に問題を抱えているのは事実なのだ。

「随分と不利な戦いになりそうだな」

お決まりのやれやれだぜと呟くと、承太郎は昼食を取るため適当な店を探す。

途中、とあるカフェのテラス席にて高円寺が上級生の女子に囲まれ、食事しているのを見なかったことにして、承太郎はハンバーガー専門店に入店した。

学校の敷地内では学生割引のように全商品が値引きされている、なんて事はない。

学食などを除いたほとんどの施設、店舗で全国どの店舗とも同じような金額設定がされている。

単身世帯の一ヶ月の食費の平均はおよそ四万円前後と言われている。

このことから承太郎は月4万は確保したいと漠然と思うが、基本支給額わからない現状では打てる手はあまり無い。

「いずれにせよ、答え合わせができるのは5月1日。それまでは様子を見るしか無いようだな」

受け取ったハンバーガーを数口で食べると、店を後にした。

その後、承太郎はパンフレットを見ながら、施設内にある店舗を確認することにした。

コンビニやスーパーから、ファッション、娯楽に至るまでありとあらゆる店舗が導入されているとは入学パンフレットにも書かれていたが、いざ目の当たりにすると圧巻だ。

もはや、ひとつの街レベル。

承太郎が監視カメラの位置を確認しながら散策しているとふと、パソコン専門店の店先のディスプレイを真剣に見学している男子生徒に視線が止まった。

制服を着ているためおそらくは新生入生だろう。

ガラスに反射する顔を見て、それは確信に変わった。

「たしか、外村だったな」

突如背後から声をかけられた外村は一瞬肩を上げて恐る恐る振り返った。

「く、空条氏!? 一体何でござろう、拙者この通り無一文ですぞ」
承太郎を見るなり外村はなぜかぴよんと跳ねた。

「何を言ってる? そんな事よりお前、機械に明るいのか?」

「それなりには……としか言いようがないでござるな。自作PCやプログラムぐらいは経験がござるがハツキングやはからきしでござるよ」

「それだけでできれば、大したもんじゃあないか。俺はこの手のものに疎くてな、この携帯の機能も実のところあまりよく分かってねえ」

承太郎が取り出したのは学校指定の携帯端末だ。

「少し使い方を教えてくれないか? 勿論礼はする」

「れ、礼だなんて結構でござる。身の安さ——けぷこん、クラスメイトの相談に乗るなど当然のこととござるよ」

素知らぬ顔で引き受けた外村だが、カツアゲと勘違いしていたなどとは口が裂けても言えない。

外村はまだ配布されてから半日しか経っていないにも関わらず入学式中弄り倒したことで、ありとあらゆる機能を把握していた。

途中、承太郎の奢りの飲み物を受け取りつつ丁寧に説明をしていた。

「最後にこの画面で登録している連絡先の生徒の位置情報を監視することもできるのでござるな。こんな機能をつけた学校側もなかなかチが悪いでござる」

「時間をとらせて悪かった。助かったぜ外村」

「このくらいお安い御用でござるよ」

説明が終わる頃には、外村から承太郎に対する過度な恐怖心は形を潜めていた。

「またよろしく頼むぜ」

「やかましいッ！」

オリエンテーションの続く授業の中で段々と弛緩していく雰囲気の中、私語が目立つようになった四限目。

周りで騒がれる事を好まない承太郎の覇気にも近い怒声が一瞬にして教室に静寂を取り戻した。

本来注意する立場のはずの教師も唾然としているほどの迫力。

お喋りに夢中になっていた生徒たちは顔面蒼白ものだ。

その日、六限まで私語をする者は居なかつたのは言うまでもない。

↑To Be Continued

鉄拳制裁

沈黙の2日目を乗り越えた、高校生活3日目。

「Good morning 承太郎。随分と現状把握に精を出している様だねえ」

学生寮のエントランスで鉢合わせた高円寺は朝から絶好調である。

「……朝っぱらからやかましいやつだ」

「フハハ、私は常にコンディションを最高に整えてるのだよ」

「……やれやれだぜ」

「それで承太郎。君は上を目指すのかな？」

「どうやら、高円寺も情報収集をしていたらしいと承太郎は気づいた。」

昨日見かけたハーレムは情報収集の一環だった様だ。

「Aクラスを」

確かな情報から話しているのであれば、高円寺は承太郎よりも多くの情報を得ていることになる発言が気にはなるが、返事は変わらないため承太郎が聞き返すことはない。

「降りられねえ勝負事でわざわざ負けてやる趣味はない」

「フハハ、実に君らしい」

「安心しな高円寺、お前の協力なんざ期待していない。もっとも、状況によるがな」

「何のことかな？ まあ、君がそう言うならそう言うことにしておく」

高円寺がわざわざ話しかけて来たのだ。

何かしらの意図がそこには必ずある。高円寺六助とはそう言う男だと承太郎は認識している。

そして、クラス間競争を話題に挙げたこと、自由人高円寺六助という人物を加味して承太郎が出した結論。

——それは

『私を面倒ごと巻き込むな』

暗にそう伝えて来たのだろうと判断した。

承太郎の性格をしる高円寺は負けず嫌いな承太郎が抗争に参加するだろうと予想しているはずだ。

瞬間の思考力が化け物じみているふたりの会話は必要最低限を終えると『アデュー』と高円寺は道中のベンチで待つ女子生徒の方へ去って行った。

一日六限を基本とする高度育成高等学校だが、水曜日だけは謎のロングホームルーム（LHR）が行われるため、七限まで授業がある。そして今日がその水曜日であった。

朝のショートホームルームで茶柱から今日のLHRはクラスの親交を深めるために自由に使って良いと説明をされたが、自由なら帰らせてくれと思ってしまうのは仕方のない事だろう。

午前中の授業中、勿論大っぴらに私語するタフネスはいなかった。しかし、女子を中心に口頭での会話から指先での会話に移っていったに過ぎない。

他にも居眠りするものゲームを机の下で楽しむものと水面下での問題は深刻なものだった。

承太郎はそんな生徒たちに辟易としながら、黒板の文字を写す。やがてチャイムが鳴り、昼休みになると勇敢にも立ち上がり承太郎に近づく生徒がいた。

ちなみに初日の綾小路清隆の席替え要請を受け、承太郎は綾小路と席を交替し、窓際最後方に座している。

「「ちよつといいか（な）？」」

それも三人。

三人は驚いたように顔を見合わせた。

「あはは、重なっちゃったね。えっと、平田くん、幸村くん先にどうぞ」手を前に出し譲るとジュエスチャーしたのはクラスのアイドル榎田桔梗だ。

初日から男女共に大勢の心を掴むコミュニケーション能力と容姿

の持ち主である。

ここでも、周りに気を使う様に立ち回っている。まだ、皆付き合いが浅いためこれが地であるか判断はつかないが人当たりが良いのは確かだ。

「こんな偶然あるんだね。僕はお昼と一緒に……と思ってきたんだけど幸村くんはまた別の用事かな？」

柔和な笑みを浮かべながら用件と提案をしたのは平田洋介。

入学式の日、自己紹介の流れを作るなどクラス内の友好関係を良くしていきたいと公言している好青年だ。

当然女子からの人気は高く、このところ女子に囲まれて男子とコミュニケーションを取れずにいた。

「俺は空条に聞きたいことがある。昼休みを共にするつもりはないから悪いが先に済ませさせてもらう」

この幸村というtheインテリ系の男子生徒は、基本一人でいる生徒ではあるが承太郎同様、必要があればコミュニケーションをはかることができる人間だ。

無論、態度や話し方には経験不足ゆえの棘はある。その上、周りの生徒たちを見下している節があり、高圧的な態度もその一つだ。

「俺は何も付き合うなんて言っていないんだがな」

静観していた承太郎は冗談のつもりで返したのだが、幸村の顔は引き攣り、残る二人も少し歪んだ笑みを浮かべていた。

「……冗談だ。で、その用ってのは一体なんだ？」

「そ、そうか。空条が入学式の日に質問していたことだが、あれから自分なりに考えてみたんだ。確かにこの学校は色々とおかしな点がある。そして、君がそのあたりをどう思っているのか聞きたい」

前のめりに話す幸村に吞まれてか、平田たちも真剣な面持ちだ。

「それは7限に全体に話そうと思っている。その時でも構わねえか？」

承太郎が七限目を私物化しようとしていることに驚きつつ幸村は返答する。

「わ、わかった」

幸村は納得している様には見えないが、承太郎にこう返されては聞き辛いというのが一般人というものだろう。

本当にそれだけ確認すると幸村は席に戻っていった。

「それで、お前たちの用は何だ？ 貴重な学生の昼休みだ、とつとと済ませな」

「確かにあんまり時間ないもんね。えっと、私も平田くんと一緒に、よかったらお昼一緒にどうかなくて」

意識的なのか無意識なのか、共感から入るコミュ力の高さが窺える。

一般男子目線では、あざと可愛くゆらゆら動く櫛田だが、承太郎目線ではふらふらしている不愉快な女にレツテルが貼られかけている事を当の本人が知る由もなく、『勿論、空条君の都合が合えばだけどね』と言いながら更に距離を縮めて行った。

「そうだね。櫛田さん、空条君が良ければだけど、僕も一緒にいいかな？」

「もちろんっ」

「どうかな空条くん。クラスメイトとして仲を深められたらと思うんだけど」

——嘘である。

この男、クラスメイトの多くが恐怖しているこの空条承太郎という存在を確かめ平和なクラスづくりという目標を目指して近寄った、ある種打算的な関係の構築のため動いている。

「私もっ」

——嘘である。

この女、皆が恐れ慄く空条承太郎とも仲のいい女子、空条承太郎に口利きできる女という肩書きを得ようと動いている。自分の人気を求心力を高めるために余念がないのだ。

そんな心中穏やかでないふたりの結末をなんとクラス中が見守っていた。

「別に構わねえが、あんた達だけか？」

どの道学食には行かため、多少人数が増えることは問題ではない。

承太郎としてもクラス単位での争いを想定しているためある程度の交流は必要だと考えていた。

承太郎の問いに、ふたりはそれぞれ仲の良い面子へ視線を送るが、苦笑いして首を横に振られた。

「はは……そうなるね」

男子最高峰のコミュ力を誇る平田とそれを軽く凌駕する櫛田はこの2日足らずで承太郎が無駄話を好まないだろうと悟る事は当然、無言だと気まずく感じがちな学食に向かう中でも間を埋めようと、質問攻めにする様な地雷は踏まなかった。

結果としてふたりは承太郎は気難しい雰囲気だが、決して話せない男ではないという事実と連絡先という成果を挙げ、教室へと帰還したのであった。

生還した勇者の元に民が集ったことは言うまでもない。

そして移動教室の音楽の授業を終えて迎えた七限目。

茶柱が教壇を降り、前方の椅子に腰掛けたタイミングで承太郎が立ち上がる。

「親交を深める前に一つ話を聞いてもらおうぜ」

九割の生徒は何も言えずに大河に身を任せ、九分の幸村などの意志が高い生徒は承太郎の発言に注意を払う。

そして、残る一分の生徒は——赤髪の不良は噛み付いた。

「はっ、なんでおめーの話を聞かなきゃならねんだよ。あれか？ また『強制はしない』ってやつか？ くだらねえ、俺はごめんだぜ」

赤髪の男子生徒、須藤健は自己紹介の時にも噛み付いた男だと。何が彼を駆り立てるのかは不明だが沸点と知性が低い事はこの三日間で皆が知るところとなっている。

「強制はしない？ 違うな、これは強制させてもらおうぜ。なんせ、死活問題なんぞな。退出するってんなら授業の補習のようにサシでゆっくりと俺の話を聞いてもらう事になる」

「お前にんな権利無いつつってんだよ！ だいたいな、ちよつとガタイがいいってだけで威張ってんじゃねえぞ!？」

須藤は座ったまま机を蹴飛ばした。

平田と櫛田が落ち着いてと声をかけているがそんなものは届かない。茶柱に助けを求めても目を閉じて静観している始末だ。

「なにも個人的な趣味について語ろうってわけじゃあ無い。クラスに関わる事に対する一意見を述べるだけだ。ガキみたいに喚いてないで大人しく座ってな」

「んだとツ！」

煽り耐性が皆無の須藤は最後の一言でブチギレて承太郎との距離を詰め腕を引き絞る。

「暴力はいけないよ！ 須藤君！」

最前列にいたはずの平田が決死の形相で止めに入ろうと駆け寄るが、承太郎はそれを手で制した。

「オレも男だ。絶対に譲れないもののため力を振るう事はある。だが、プライドの関係しない、気に食わないもの全てを力で解決するなんて事をするのは三下もいいところだぜ。お前がその程度のやつだというのなら、かかってきな」

「上等だてめえ、後悔させてやるよ」

学校の仕組みにある程度気づいた上でこの暴力沙汰に乗ったのは訳がある。

情報収集の中で、『被害側』が問題ないと申告すれば学校が問題視しても、問題にはならないという超法規的な仕組みを採用されていることを確かめていたからである。

抜け目なく保険もいくつか用意してある。

それでもダメだった時は仕方ないと思い切った行動に出るあたり、やはりこの承太郎、ジョースターの血族である。

怒声をあげながら喧嘩慣れした須藤は容赦なく承太郎の顔面目掛けて右のストレートを放つ。

男女共に直視できず、顔を背けるものが多い。一部の女子は悲鳴をあげている。

だが、喧嘩慣れしているのは承太郎とて同じこと。

承太郎は伸びてくる腕に対して踏み込み、ヒットポイントをずらし先に被弾しながら的確に須藤の顔面を同じく右のストレートを振り

抜いた。

いわゆるカウンターだ。

須藤の推進力が承太郎の拳に加算された結果、須藤は後方へふっ飛んだ。

「空条くんー！」

平田は暴力を止めたかったため、これは話が違っても言いたげに声を上げた。

そしてそのまま須藤に駆け寄る。

数秒意識を飛ばしていた須藤だが、平田の呼びかけで目を覚ますと邪魔だと平田を押し退けた。

「空条、流石にこれは問題だぞ」

ここまで静観していた茶柱も口を挟む。

「問題？ 一体これの何が問題になるっていうんだ茶柱センサーよ。須藤は俺に駆け寄り、そこに落ちているプリントに足を取られ後方に転んだ。勢いがあったもんで派手に見えたのかもしれないが、あいつはただ、転んだだけじゃあないか。これの一体何に問題があるっていうんだ？」

承太郎は大きな体を曲げて落ちていた一枚のプリントを拾い上げた。

「しかし——」

「それとも何か？ この学校はプリントに滑ってこけただけの小さな事故もいちいち問題として取り上げ、処罰を下すともいうのか？」

かかってこいとまで言っておいて苦しすぎる言い訳だと多くの生徒は言わずとも考えている。

何をどう考えても暴力沙汰の大問題ではないか、と。

何故この空条承太郎という男はここまで強気に出れるのか、と。

茶柱は監督責任など大人の事情との葛藤があるのか一瞬、戸惑った表情になり、視線を教室の角に向けた。

視線の先にあるのは教室に四つ設置されている監視カメラだ。

承太郎が言う様に監視カメラがなければ無茶な言い分でも——ポイント査定とは別で——通ってしまうのがこの学校だ。

教室内の生徒達を監視する様に設置された監視カメラは単体で全体を取られるのではなく、対角に設置し死角を補い合っている。

茶柱は承太郎がいる位置を監視しているカメラを見て思わず目を見開いた。

そこには、スプレーの様なものでカバーを塗り潰された無惨な姿の監視カメラがあったのだ。

「……空条、お前一体どこまで搦んでいる」

「一体何のことだかな。わからないぜ茶柱センサー」

「……須藤、お前もいいんだな」

承太郎が茶柱と問答している間にふらふらと立ち上がり席に戻っていた須藤は小さな声で了承の返事をした。

「空条、ひとつ忠告しておく。こんな手がいつまでも通用すると思わないことだ」

茶柱が所定位置に戻ると、嫌な静寂が教室を支配する。そんな中、承太郎は教壇に上がった。

須藤はとうとうとふて寝している。

承太郎はさて本題だがと切り出し、ここ2日集めた情報とそこから行った推論を——クラス序列を除いて——述べた。

聴衆の反応は様々だが、あり得ないだろと反論する様な生徒は居ない。

解説が進むにつれ真剣な表情で聞く姿勢を示していた。

「これはあくまで俺の考えに過ぎない。なんせそこで座っているセンサーは答えてくれないんでな。答え合わせができるのは5月1日になるだろう」

「茶柱先生今の話マジっすか!?俺ら何も聞いてないんすけど」

承太郎の話が一区切りついたタイミングで拳手もせず話し始めたのは池というお調子者な男子生徒だ。

だが、今回に限ってはクラスの総意を担任にぶつけたとも取れる。

「入学式の日の説明は行っている。それ以上は無い」

「マジかよ」

他にも口々に苦情やら文句を垂れる生徒が現れ出した。

「今出来る事は限られている」

承太郎が口を開くと静寂が戻る。

「生活態度に気をつける事だ」

どきりと心臓が跳ねた生徒が少なからずいる。そして、承太郎はそれを見逃してくれない。追い討ちをかける様に続ける。

「授業中の私語、ケータイ、ゲーム、居眠り。これ以降、明らかにマイナス査定だろう行為は極力避ける事だ」

言葉を区切り、心当たりのありそうな生徒に視線を配り釘を刺す。

「大方想定通りだった場合、個人でできることなんざたかが知れている。他に気づいた事や意見があるなら遠慮なく話してくれ。これは強制できる事ではないが、協力頼むぜ」

鉄拳制裁を見せられた上でこの協力を断れる生徒はこのクラスには居ない。

そもそも承太郎が提案している協調を字面そのままに捉えられている生徒はほぼ皆無。

皆暴力による独裁政治の開幕を感じ取っていた。

それも相まって、心情は様々だが皆、首を縦に振った。

「最後になるが、この話は他言無用だ。よろしく頼むぜ」

クラス競争と序列を省いているため、承太郎の発言の意図はわからない生徒達だが彼の怒りに触れることを恐れてこの緘口令が絶大な効果を発揮することを承太郎は知らない。

当の本人は漏れれば仕方ないぐらいにしか捉えていないのだが、ぶっ飛び須藤を目撃した生徒達は内心穏やかではないのだ。

「ありがとう空条くん。確かにまだ仮説かも知れないけど、話を聞いてその確率が高いんじゃないかと僕自身考えさせてもらえたよ」
立ち上がったのは当然、平田である。

「もし、杞憂に終わればそれはそれでよしだし、僕も入学して浮かれていた部分があるから改めて高校生としての生活態度を見直してみるよ」

承太郎は聴き終えると席に戻った。

「みんなはどうかな？」

平田の問いかけは承太郎の要請と本質的には同じだが、あまりにも印象が違う。

彼がこの数日で築いた人間関係も大きな要因ではあるが、受けては指示と提案ほどの印象差があった。

人徳の成す所である。

ようやく発言権を得たと言わんばかりに生徒たちが口を開き始めた。

「サンセー。ポイント減るとかホントごめんだし」

女子グループを形成しつつある軽井沢に続き参加の女子が賛成の意を示す。

「私も賛成だよ。大変だけど、授業も頑張らないとね」

続く櫛田の後も同じ意見が続いた。

その後はレクリエーションが行われることもなく、実質的には自由時間となった。

「お、おい空条。意見は俺も賛成なんだが、須藤の件は流石に不味かったんじゃないか？」

「……幸村か。不味いだろうな」

「だったら——」アイツを放置するのは更に不味い。俺も人の事は言えるたちじゃあないが、奴は見境が無さすぎる。アレに懲りて一ヶ月持ち堪えてくれればいいんだがな。やれやれだぜ」

「それは……確かに須藤の行動は目に余っていたし、空条以外に止める奴はいなかったかも知れないが……」

「皆に話した手前、俺自身今までの振る舞いは見直すつもりだ」

高円寺以外の生徒は彼が不良のレッテルを貼られるまでに至った数々の蛮行を知らない。

幸村はそれ以上は何も言えず、わざわざ近くまで来た要件を伝えることにする。

「Sシステムの話なんだが、学校側は生活費の査定のためだけに実力を測ると思うか？」

「さあな」

「さあなって……例えばの話だが、生活費しか変わらないなら空条の

言う様に生活態度に気をつけて定期テストを真面目に取り組むだけだろうか？ これってポイント以外普通の学校と変わらないんじゃないかと思うんだが」

幸村は矢継ぎ早に続ける。

「口止めをしたって事は、何か知っていることがあるんじゃないのか？」

「やれやれ、よくまわる口だぜ。詰める様で悪いが俺もお前も立場は同じ、お前が知りようが無い情報は俺も持ち合わせちゃあいないんだぜ」

「……………」

「だから予想せざるを得ない。お前はさつき定期テストに真面目に取り組むと言っていたが、クラスと平均点がポイント支給額の軸になると考えているわけか」

「あ、ああ」

「高校入試を合格したものの達同士の中で、そこまで学力差があると思うのか？」

「……たしかに全員が一定水準には居るはず……か」

元来入試とはそういうものである。

「もつとも、通常の学校であればの話だが」

「空条は何が言いたいんだ？ ハッキリ言ってくれ」

幸村であればと考え、承太郎はひとつ息を吐くと周囲を見渡した。ほとんどの生徒達が席から離れ小集団を作り時間を潰しているのを確認したのだ。

人気を確認しての事だが、隣人が読書し動く気配もない。

場所を変えるのも面倒なため、承太郎はトーンを一つ下げた。

「説明の中で伏せた情報があるということだ。それは上級生はクラス単位で所持ポイントに明確な差があるということだ。悲しいことにAからDの順に減っているがな。つまり、この学校はその『差』が生まれる様な何かを用意してらってわけだな」

「ちよつとまで空条、『クラス替えが無い』この学校で先輩Dクラスが最下位って事は……」

「可能性は2つ。Dクラスには此処でいう実力の低い者が集められている。もしくは、評価順にクラスが入れ替わるか、だ」

「クラス替えは……いや、進級によるクラス替えが無いだけ、とも取れるのか。となると後者の可能性が高いな」

幸村は己の実力不足は疑ってもいないらしい。無言の承太郎をよそに思考し始める。

これこそが承太郎が情報を伏せて説明した要因だ。

核心をつく情報は得ていないが、承太郎は可能性を二つ提示しながら両方が適応されていると考えている。

ただでさえ、来月のポイントに対する不安を煽る事になるためクラス間競争の可能性を暗示したり、クラス配属について個々人の自尊心を傷つけたりと更なる負荷を与えるのは避けた方が良くと考えていた。

無視しても後が面倒そうで幸村には話したが、とても受け入れる事は出来無さそうだ。

「ここからは完全な推測だが、差を作るために出される課題は何も学力を問うものだけとは限らねえ。テストは確実に査定に響くだろうが、例えば、学校行事が査定に含まれるのなら学力以外も求められるだろうぜ」

「……確かに。わかったことが増えた様でわからないこともそれ以上に増えるな……」

「そういうことだ」

↑To Be Continued

細マ×ゴリマ×彫刻×事なかれ主義Ⅱ誤算

side 綾小路清隆

「おはよう山内！」

「おはよう池！」

登校すると満面かつ鼻の下を伸ばした卑猥な笑みを浮かべる二人が挨拶を交わしていた。

この二人、遅刻する事はないがこんなに早く登校する事はこの一週間なかったのに珍しいこともあるもんだ。

空条の弁論以降、私語や内職、遅刻をする生徒は居ない。とはいえ、池や山内、須藤辺りを筆頭にうつらうつらと居眠りしていたり机に突っ伏して寝ている姿はまばらに見受けられる。

生理現象には勝てないからな。

オレは許してやりたいが、隣人の堀北は射殺しそうに睨んでいた。

あいつ、オレが寝かけるとコンパスの針で刺してくるぐらいだ。本当に危害を加えそうで怖い。

「いやあー授業が楽しみで目が冴えちゃってさー」

「なはは。この学校は最高だよな、まさかこの時期から水泳があるなんてさ！ 水泳って言ったら、女の子！ 女の子といえばスク水だよな！」

確か水泳の授業は男女合同。つまり、堀北や櫛田、その他大勢の女子の水着……肌の露出を目にする事になる。

ただ、池と山内がはしやぎすぎていて、会話を聞いてしまった一部の女子はドン引きしている。

しかしこれはチャンスとも取れる。

高校生男子にとって『女子』の話し、とくに『下ネタ』と呼ばれるジャンルは最強のコミュニケーションツールだ。

これさえあればオレでも男子達と仲を深められるかもしれない。

何度か様子を伺い会話が途切れたタイミングで今しかないと立ち上がる。——が……

「おーい博士ー。ちよつと来てくれよー」

「フフツ、誰が呼んだかポセイドン。たんすに入れるはダンスに「な、博士！ 女子の水着姿の記録は大丈夫なんだよな!!？」

「ぬ、口上を最後まで聞かぬとは……けぷこん。しかし、その点は任せてください。体調不良で授業を見学する予定ンゴ」

「記録？ 何させるつもりだよ」

輪の中にいた須藤が突っ込んだ。

空条との一件の後、孤立するかに思われた須藤だったが、池のコミュニケーション力が幸いしグループの一員となっている。

そのグループは池、山内、須藤から成り、休み時間のはしやぎ方や私生活から『三馬鹿』などと呼ばれるが……

「博士にクラスの女子のおっぱい大きい子ランキングを作ってもらうんだよ。あわよくば携帯で撮影とかもな！」

「……おいおい」

須藤も池の狙いに引いていた。

「哀れね」

「……お前も来てたのか、堀北」

「品性に欠ける会話に心奪われ気づいていなかったのね」

「……聞こえてたのか？」

「あなたより机ひとつ分彼らに近いのに聞こえていないはずがないでしょう」

「それもそうか……」

「でも、本当に哀れねあなた。大事な大事なお友達を作る機会よりも保身に走る様では一生ぼっちね」

痛いところを突いてくるな。

しかし、前方からまるで汚物でも見る様な視線を向けている篠原達を目にしてしまったのは積極的に近づこうとは思えない。

「オレは事なかれ主義なんだよ」

心無い堀北からの口撃を受け、池達を眺めながら耐え凌いでいると博士こと外村が慌てて池達に話し始めた。

「撤回！ 撤回でござるよ、空条氏が間も無く到着するでござる」

「まじか！ 池！ オツズ表頼んだ！」

いの一番に山内は物的証拠を池に押しつけて席に戻る。

「おい山内つて、やば、博士これどこに!?!?」

「落ち着くでござる。机の中に入れておけばそれで大丈夫で候」

バタバタと解散した一味が席に着く頃、ガラリと戸を開けて空条が登校して来た。

「どうやってかわからないが博士は空条の動きを監視しているらしい。」

ちなみに博士は時折空条に話しかけられたり——会話の内容まではわかっていないが——している。

少なからず交友がある様だから、登校をメッセージが何かで伝えているのかもしれない……いや、ないか? ないな。これは無い。

空条は淀みなくオレの後ろにある席に着き、机の留め具に鞆をかけ、静かに目を閉じる。

毎朝こうだ。

堀北は空条が気になっている様でチラチラと見てはいるが声をかける気配はない。

空条も必要以上のコミュニケーションは取らない様で、あの登壇以降、自発的に声をかけている姿は少ない。

基本、静観している。

それにしてもあの日の一幕は興味深かったな。

話していた内容は言うまでも無い。

アレはおそらく当たってる。タイミングややり方は他もあるだろうが、空条が単独でかつ、次のポイント支給日までの応急処置と考えているのならベストに近いものであったかもしれない。

しかし、オレが注目したことは、別のところにある。

いったい、何人が気づいていたのだろうか。

あの日、少なくとも午前中までは正常に稼働していた監視カメラの一つが七限目には黒く塗り潰されていた。

確認は無いが、あれは六限目の移動教室に便所に行くとき席を立った空条が工作したのだろう。

止めに入る平田を静止した逆の手でプリントを落としていたり抜

け目もない。

事前の情報収集による問題化の防止策と失敗した際の保険をかけながら、読み通りに須藤を返り討ちにした。

恐怖政治としてはこれ以上ない演出であり、現に結果をもたらしている。

アレ以降おとなしい事もあり、不興を買わなければ問題ないとクラスメイト達も過剰に怯える事はない。

空条は軽く殴った様にしか見えなかったが、須藤は意識を飛ばしていたし、ヒットポイントのずらし方も見事だった。

アレを同じように顎先に貫えばオレも意識を刈り取られるのだろうか……

何かが心の奥を燻るような感覚を覚えた気がした瞬間、携帯の振動に意識を引き戻される。

『綾小路ー、俺たち今一口10000ポイントで女子のおっぱいの大きさ賭けてんだけどお前も賭けないかー?』

突如送り付けられたメッセージの送り主は池と表示されている。池の方を見ると、ニカッと笑い親指を立てている。

連絡先は交換していなかつたはずだが……いったいどうやって……

その旨を質問すると平田が作っていた男子のクラスチャットから登録したと教えられた。

個人情報取り扱い……緩くないか?

『賭けか。無駄遣いしているのか?』

『いやー、たまにはパアツと遊ぶべきだつて! ポイントも半分は残しときゃいいだろ?』

『……そうか。えーと、人気は誰なんだ?』

『お! さすが綾小路! 賭けの人数は多くないと面白くないからな! 今人気は長谷部だな、後は榎田ちゃんとか』

『なら榎田に一口賭けておいてくれ』

『お前、榎田ちゃんは俺が狙ってるんだから手を出すなよ?』

『いや、そんな事は考えていないが』

『ならおっけー、賭けとくぜ』

それにしてもチャットの返信が早い。倍速以上のタイピング速度の差がありそうだ。

内容はともかくとして、期せずして連絡先を交換できたと言う事は、もう友達……と言う事でいいのだろうか？

「うひゃあ、やっぱこの学校はすげえなあ！ 街のプールより凄いいじゃね？」

競泳パンツを履いた池がプールサイドに出るなりそんな声をあげた。

更衣室を出るとすぐに室内の50Mプールが眼前に広がる。飛び込み台やら二階席なども完備されており、みんな口々にすごいすごいと褒め称えている辺り通常の学校とは一線を画すのだろう。

「女子は？ 女子はまだなのかつ？？」

池が鼻息荒くこちらを向いて言う。

こちら側に他の生徒は居ないのでオレに話しかけているのだろうか？

「……えー、着替えに時間がかかってるんじゃないか？」

「そ、そうだな！ なあ、もし俺が血迷って女子更衣室に飛び込んだらどうなるかな？」

「女子に袋叩きにされた上に退学になって、書類送検されるだろうな」「……………リアルなツッコミやめてくれよ」

池は想像して怖くなったのか、ぶるぶると身を震わせた。

「変に水着とか意識してると、女子に嫌われるぞ？」

「意識しない男が居るかよ！ 勃ったらどうしよう……………」

きつとその瞬間から卒業するその日まで、池は嫌われ続けることだ

ろう。

って、あれ？ 何かオレ自然と池たちと会話出来てない？

つい今朝まで、入りたくても入れなかったグループに気が付けば片足をつっ込んでる。

もしかするとオレは今、友達が誕生していく瞬間を生で体験しているのかも知れない。

などと内心感激している間に、男子待望の女子が登場したらしく池達の歓喜に満ちた奇声が発せられたのも束の間、困惑の渦が広がった。

どうやら、女子の大半が見学し、二階席に体操着姿で現れたらしい。

今朝の話を聞いていれば見学も視野に入れるだろうな。好き好んで好奇の視線に晒されたくはないだろう。

池達は櫛田の登場に活路を見出し、かくいうオレも万乳引力の誘いに必死に抵抗している。

目線が誘導されるのは悲しいかな、男の性らしい。

「何を黄昏ているの？」

堀北は怪訝な様子でオレの顔を覗き込んできた。

「己との戦いに没頭していたんだ」

堀北の水着姿。何ていうか、うん、健康的でけして悪くはない。

でも凝視したら大変なことになりそうだったので、落ち着くまで我慢しておく。

「……………」

と、何故か堀北はオレの全身を見ている。

「綾小路くん、何か運動してた？」

「え？ いや、別に。自慢じゃないが中学は帰宅部だったぞ」

「それにしても……………前腕の発達とか、背中の筋肉とか、普通じゃないけど」

「両親から恵まれた身体貰っただけじゃないか？」

「とてもそれだけが理由とは思えない」

「お前はアレか？ 筋肉フェチか？ 言いきれれるのか？ 命賭けるか？」

「そこまで否定するなら、信じるけれど………」

どこか不満そうだ。　どうやら堀北は、それなりに見る目があるつもりらしい。

「それにしても、彼、凄いわね」

堀北の視線につられて、俺も目を向ける。

「空条か、確かにアレは高校生の肉体じゃないな。もはや彫刻レベルだ」

現に二階席では、男子をボロカスに言いながらも平田や空条の肉体を遠慮なく観察している女子が多い。

空条を見ている女子の中には鼻を押さえている者もいるがまさか鼻血でも出しているのだろうか？

「彼は何か格闘技をやっていたのかしら……」

なぜに格闘技限定？　と思っただが、この間の右ストレートは確かに全くの素人の動きではなかったな。

喧嘩慣れだけであの領域に踏み込んでいるのならそれこそ化け物だ。

「さあな。それにしても堀北は随分と空条を気にしているんだな」

「そんな事はないわ」

「いや、あるだろ。いつもチラチラみて——「ないわ」

蛇に睨まれた蛙は大人しくしておこう。あれ？　大人しくしてても殺されるんじゃないや……」

「……痛い」

予想通り、無駄に鋭い手刀が脇腹を抉った。

「口は災いの元とはよく言ったものね」

堀北は災いの元の間違いだろ、と訂正する事はついぞできなかった。

「よーしお前ら集合しろー」

その後、中年体育教師が基本説明を行い、いきなり賞金5000ポイントと補習を賭けた男女別50M自由型のレースが開催される運びになった。

女子は見学が多いため5人レースを2回行いタイム順で、男子は上

位5名での決勝戦を行うらしい。

「ではまず男子から行う。えー……綾小路、須藤、空条、平田スタートの準備しろー」

いきなり呼ばれてしまった………どういう人選だこれ？ 出席番号ですら無いんだが……呼ばれてしまったてはしかたない。

この中で最下位を避ければクラス内での最下位は避けられる。

だが、いくらオレでも分かる。このメンバーの平均は高いのではないだろうか。しかし、最悪のケースを想定すると………なんとかついて行ければ補習と悪目立ちは避けられるか？

幸い1コースということもある。とりあえず、僅差の3位あたりになれば御の字だ。

が、こればかりはなんとも言えないな。

「おい空条！ 勝負しろ！ 負けた方が勝った方に昼飯1週間奢る！ どうだ！！？」

スタート台を前にして突如声を荒げた須藤。どうやら対抗心を燃やしているらしい。

女子達の平田の登壇に歓声をBGMに熱い展開が繰り広げられる。「やれやれだぜ」

空条は呆れたように呟いている。

変な対抗心燃やされて絡まれるって大変だよな。やつぱり無駄に目立ちたくないものだな。……目立てないけど。

「逃げんのか！！？ あ！！？」

黙っている空条に痺れを切らした須藤がさらに吠える。

「二言はねえな？」

「たりめーだ。ぶっ潰してやる」

おそらくトップ争いはこの2人になるとして……オレのライバルは平田と言ったところか。

ビツという電子音とともにオレたちはスタート台から飛び出した。

飛び込みの勢いを利用して水をかき分け、一度目の息継ぎのため顔を上げると既に空条は身体1個分くらいの差をつけて泳いでいた。

平田は同じぐらいの位置にいる。よし、このまま頑張ろう。

俺が頑張って泳いでいると誰かがゴールしたらしくプールサイドから驚嘆の聲が上がっている。

「ふう……なんとか3位になれたか？」

顔を上げるとクソツツ！ と膝を叩く須藤と、いつも通りの顔でプールサイドに向かう空条がいた。

どうやら、空条に軍配があがったらしい。

そしてオレも僅差で3位を獲得し、タイムを聞いてプールサイドに向かうと堀北が声をかけてきた。

「驚いたわ、あなた本当に運動はしていなかったの？ かなり速かったと思うのだけれど」

「……そうなのか？」

「参考までにタイムを聞かせてくれるかしら」

「26秒だった」

「今やっている、第二レース。先頭でも30秒前後なんじゃ無いかしら？」

「……みたいだな。空条たちにつられていつも以上のペースで泳げたみたいだな。ところで空条のタイムとかは？」

「23.16秒。先生が興奮して叫んでいたのよ」

「凄いな。空条が水泳部……とは考えにくいか」

「ええ、水泳に向いている身体つきとも言い難いわね」

確かに水泳に必要な筋肉以外もかなりついているから重りになっているんだろうが、それでも23秒台とは未恐ろしい。

その後、第三レースの高円寺も23秒台をマークし、全員のタイムを取り終え決勝戦に駒を進める5人が発表される。

「とてもレベルの高い泳ぎがみれて先生は嬉しいぞ。では、決勝戦を行うメンバーを発表する空条、高円寺、須藤、綾小路、平田だ。よし、準備しろ」

「せいぜい善戦するのね」

「……いや、無理なペースで泳いだからもう筋肉が悲鳴を上げていてそれどころじゃ無い」

「まあ、誰もあなたを見てはいないのだから気楽に泳ぐといいわ」

「お前はオレを応援してくれているのか精神攻撃を仕掛けているのかどっちなんだ……」

オレが肩を落としながら軽くストレッチし、準備に取り掛かると高円寺の声が聞こえてきた。

「思えば承太郎、君と肩を並べて競うのは初めてのことだねえ」

「さつきみてえな、派手な泳ぎで負け惜しむんじやあないぜ」

高円寺は先程強烈に波を立てて泳いでいた。その事だろう。

このふたり、そういえば時々話しているな。元々知り合いらしいが、仲もいいのか？

高円寺は高笑いをし、空条はいつも通りだが、静かな闘志がバチバチと火花を散らしている。

2人とも負けず嫌いなのだろう。

事実上このふたりの決勝戦だ。プールサイドの視線は第一、第二コースに——一部、危ない視線が平田に——のみ注がれている。

オレも普通に上から見たいレースだったな……

無いものねだりしても仕方ないので、スタート台に登る。そして、飛び込んだ。

「フハハハハ、これでこそ空条承太郎だねえ。私の全力をもつてして一歩及ばないとは。流石と言わざるを得ない」

僅差の二着でゴールしたらしい高円寺は、髪をかきあげながら気持ちよさそうに笑っていた。

「Nice fightだ、承太郎」

「やれやれ、どっちが勝ったのかわかったもんじやあないぜ」

2人とも全力を出し切ったらしく、流石に肩で息をしている。……本当に見たかった。

神々の決戦でも見た凡夫のように体育教師は顎が外れたのか口を大きく開けたままにストツプウオッチを見続け、正気に戻ると2人を水泳部に勧誘している。

水泳部の小野寺たちが空条の所に駆けていくのを横目に見ていると櫛田が話しかけてきた。

まあ、今回は空条たちの活躍でオレのタイムもさほど目立っていない

かったようだし、結果オーライと言っても良いかもしれない。
オレは目立たなければそれで良いのだ。

↑T o B e C o n t i n u e d

5月1日 その①

入学から3週間が経ち、当初不安定であったクラス内のグループ分けも明確にされた今日この頃。

女子たちの中ではカースト争いを気にしている者が多く、暫定では軽井沢のグループと櫛田が幅を利かせているようだ。

いや、幅を利かせているのは軽井沢のグループのみで、櫛田はその人柄ゆえに影響力が強いと言った方が適切であろう。

一方の男子は平田以外に女子に対する発言権はほぼ存在しない。一強だ。

承太郎とはいえば、時折声を掛けられているものの基本は相変わらず腕を組み、独りで静かに席に座っている。

声をかけてくるメンバーは平田、櫛田、幸村、小野寺そして——
「空条氏、例の件。ミッションコンプリートしたのでござるよ」

——外村だ。

「そうか。確認次第入金する」

「では、放課後にまた連絡するでござる」

博士こと外村がサラダバーと席に戻ると同時に3限目をつける鐘が鳴り、茶柱が入室してきた。

「喜べ、今日は趣向を変えて5科目の小テストを行う」

「えー、聞いてないっすよ先生ー」

「ずる〜い」

3限目は日本史のはずだった予定だが、全教科の小テストに変更されたようだ。

突然の変更に文句を言う生徒もいるが茶柱は相手することなく続けた。

「今回のテストはあくまで今後の参考用だ。成績表には反映されることはない。ノーリスクだから安心しろ。ただしカンニングは当然厳禁だぞ」

茶柱の説明を聞き、何だそれならと胸を撫で下ろす者と警戒心を

グツと高める者と反応は二様だ。

そして後者の一員たる平田が、さつと挙手をする。

「先生、成績にはという事は他の何か、例えば来月のポイント支給額などには影響があるという事でしょうか？」

「それは答えることが出来ないな、平田。だが、何事にも真面目に取り組む事は大切だぞ？」

「……わかりました。ありがとうございます」

「では、今か——「待ちな」」

茶柱が教卓に置いていたテストの束に手をかけたが、呼び止められ顔を上げる。

「どうした空条」

「この小テストとやらは、全クラスで同様に組み込まれているのか？」

「相変わらずの言葉遣いだが、まあ良いだろう。その通りだ」

「なら、テストの説明や質疑応答にも一定のルールが存在している。違うか？」

「そうだ」

「説明の仕方について、あんたたち教師にある程度の裁量権はあるか」

「当然だ。一言一句合わせるのは手間だろう」

「最後にひとつ聞かせてもらうが、あんたの言う『ノーリスク』っていうのは、ナニに対するリスクだ？ ポイント支給額か？ 退学か？」

強い口調で承太郎は続ける。

一年のクラス人数が一律であるのに対し、上級生のクラスの人数が一律でないことを疑問に思ったがゆえの質問だ。

「ノーリスクってワードがあんたの裁量権の範疇で足されたものってんなら答えて貰うぜ」

「退学か、随分と物騒な言葉を出すな。が、その通りだ。このテストにおいて退学の措置をとることはないという意味での『ノーリスク』だ。これ以上の質問は受け付けない」

来月以降のことは徹底して秘匿する。

それが現状の学校のスタンスと理解している承太郎は暖簾を腕で押すようなことはしない。

大人しく、前の綾小路からテスト用紙を受け取り筆記具片手に問題に向き合った。

他の生徒たちもある程度の緊張感を持って取り組んでいる。

テストは一科目四問の計二十問。どれも中学復習レベルの問題で受験問題に比べれば何段階もレベルの低い問題であった。

素のポテンシャルが高い上、努力家である承太郎は記憶力、応用力にも優れておりスラスラとペンを走らせる。

が、数学の問題を一問解き終えたところでペンが止まった。

(……この三問だけレベルが異様に高いじゃあないか)

しばらく問題と睨めっこした後、一応既習の内容を応用すれば解けないことも無い問題と理解して再度ペンを持ったのだった。

5月最初の学校開始を告げる始業のチャイムが鳴った。程なくして、手にポスターの筒を持った茶柱がやってくる。

普段から気難しそうな顔をしているが、今日も今日とて口は真一文字だ。

「これより朝のホームルームを始める。では、早速だが答え合わせと行こうか」

承太郎に一瞬、視線をやると手にしていた筒から大きな画用紙を取り出し、黒板に貼り出した。

そこにはAクラスからDクラスの名前とその横に最大4桁の数字が表示されていた。

Aクラス……940

Bクラス……650

Cクラス……620

Dクラス……490

「まずは良くやったと言っておこう。お前たちは今日から1年Cクラスとなった。不良品たるお前らがこの学校始まって以来の快拳を達成したわけだな」

支給額についての説明がなされると踏んでいた生徒たちの間に困惑した空気が流れる。

「先生、僕たちがCクラスというのは一体」

「そう慌てるな平田。順に説明する。この学校では、入学式の日に説明した通り、実力で生徒を測る。そして今回お前たちは620という評価を受けた。クラスポイントと今後言うが、このクラスポイントを100倍したポイントがお前たちには支給されることになっている。こちらは、プライベートポイントと以後呼ばせてもらう」

確かに今日、Dクラスの全員平等に62000ポイントが振り込まれていた。

これを確認した全員が承太郎に感謝したのは言うまでもない。

「茶柱先生、ポイント増減の詳細をお聞かせいただけませんか」

「幸村、質問は拳手をしてからだ。まったく……答えるとそれは出来ない相談だ。人事考課、つまり詳細な査定の内容は、この学校の決まりで教えられないことになっている。社会も同じだ。お前が社会に出て、企業に入ったとして詳しい人事の査定内容を教えるか否かは、企業が決めることだ」

「……っ。なるほど、ありがとうございます」

「そうだな、昇格の祝いにひとついいことを教えてやろう。お前たちが早々に私語や遅刻に気をつけたのは大きかったぞ？ まあ、学生として出来て当然のこと、それらの問題がないからと言ってポイントは増えないがな」

承太郎は静かに状況を見守っている。横に座る堀北や幸村など一部生徒は必死にメモを取っていた。

「早々にこの仕組みに気づいた生徒がいたにも関わらず、ここまでポイントを吐き出したのはさすが不良品どもだ。嘆かわしいな」

茶柱は額に手を当てやれやれと目を閉じた。

「例えば、そうだな。須藤、お前は入学初日に上級生に絡まれたな」

「……だから何だってんだよ。てか、何で知ってんだ気持悪い」

「監視カメラじゃね？」

「んなことわかってんだよ！」

池が何気なくツツコムと須藤が怒鳴り返した。

「結果お前はゴミ箱を蹴飛ばし、ゴミを散乱させた。これは明らかに査定に響いていると考えて貰っていい。その後綾小路がゴミ拾いをしていたぞ？ 札を言っておくんだな。とまあこのように、授業だけが評価の対象じゃないと覚えておくといい」

居眠り常習犯の須藤にクラス中から厳しい視線が向けられるがその後茶柱に軽井沢グループなど、要は公共の場で他者に迷惑をかける振る舞いをした生徒たちが名指しにされることで霧散した。

「えらく好き放題生活していたようだな。不良品ども」

「先生、先ほどからのその『不良品』と言うのは一体どう言うことですか？」

「ん？ ああ、すまない。説明がまだだったな。この学校では優秀な生徒たちの順にクラス分けされるようになっていく。最も優秀な生徒はAクラスへ。ダメな生徒はDクラスへ、と。ま、大手集団塾でも良くある制度だな。これは入学段階のクラス分けにも適応されているぞ？」

生徒たちの顔が強張った。

質問した平田も少なからず動揺しているようだが切り返す。

「でも、僕らはそのDという評価が間違いだつたと証明したのではないですか？」

「面白いことを言うな平田。確かにある一面ではそう言うことになる。クラスとしては、な」

茶柱の言う所を理解した平田は苦い顔をする。

「さて、そのクラスのことだがC^{クラスポイント} Pは毎月振り込まれる金と連動しているのは説明したが、それだけじゃない。このC^{クラスポイント} Pの値がクラスのランクに反映されている」

CPの多い順にクラスが変わると言うことだ。

元CクラスのCP490を上回る結果を残した元Dクラスはこの5月1日をもってCに昇格したことになる。

「過去、Dクラスが上に上がった試しはない。これは本当に快挙だ。誇っていいぞ？」

あれだけ貶しておいて、今更持ち上げられても素直に受け止められない。

生徒たちがそれに浮き足立つことはなかった。

「それからもう一つ付け加えておこう。国の管理下にあるこの学校は高い進学率と就職率を誇っている。それは周知の事実だ。恐らくこのクラスの殆どの者も、目標とする進学先、就職先を持っていることだろう」

それは当然のことだろう。この学校は全国でも屈指の進学、就職率。ここさえ卒業出来れば、通常では難しいとされる希望先にもすんなりと入れると噂されていた。日本最高峰のレベルを誇る東京大学ですら推薦で入れるらしいというまことしやかな噂があるほどだ。「が、世の中そんな上手い話はない。お前らのような低レベルな人間がどこにでも進学、就職できるほど世の中は甘くできているわけがないだろう」

茶柱の言葉が教室に響き渡る。

「この特権を得ることができるのはAクラスだけだ。Aクラスに上がる他にはない。それ以外の生徒には、この学校は何一つお前たちに保証するものはない」

「ちよ、ちよつと待ってください先生。それはいくら何でも無茶苦茶だ！」

承太郎との会話である程度想定内と落ち着いていた幸村がここに来て興奮し始めた。

「無茶苦茶？ 何がだ幸村、質問があるなら具体的にしてみろ」

「入学案内のパンフレットにだって希望した進路を学校がバックアップすると書いてあったはずです」

「そうだな、確かに書いてある。だが『全員を』なんてことは書いてい

なかつただろう?」

「そ、それはっ……」

詐欺もいい所だ。確かに書いてはいないが、ミスリードしている。鵜呑みにして進学してきた学生がほとんどだろう。

「みつともないねえ。男が慌てふためく姿ほど惨めなものはない」

「なにッ!?」

幸村が高円寺を睨みつけた。

「そもそも、学校に自らの将来を世話してもらおうなどと考えていること自体、私からすれば信じられないことなのだよ。AでもDでも私には関係のないことさ」

正論じみた高円寺の答えに幸村は反撃の言葉が出ず、そのまま腰を下ろした。

このAクラスを目指そうと言う流れになりつつある中で、堂々と離脱宣言する高円寺に承太郎は内心やれやれと呟いている。

「さて、もうひとつ。これは先日行った小テストの結果だ」

茶柱は筒からもう一枚の画用紙を取り出し、同じく黒板に張り出した。

「ある程度真面目に授業を受けているとは思っていたが、本当に揃いも揃って粒揃いで、先生は嬉しいぞ。中学で一体何を勉強してきたんだ? お前らは」

授業態度と学力は皮肉にもイコールではない。一部の生徒を除き、ほとんどの生徒が60点前後の点数しか取れていなかった。

中学復習レベルで60点を切っている生徒たちはありていに言つて学力が低い。40点を切っているものたちは馬鹿と呼ばれてもおかしくは無いレベルだ。

にも関わらずその該当者が七名もいる。

最下位須藤の14点は驚異の点数だ。三馬鹿トリアはもれなく40点を下回っており、名実ともに三馬鹿と呼ばれることが決定した。「良かったな、これが本番だったら7人は入学早々退学になっていたところだ」

「た、退学? どういうことですか?」

「この学校では中間テスト、期末テストで1科目でも赤点を取ったら退学になることが決まっている。今回のテストで言えば、32点未満の生徒は全員対象と言うことになる。本当に愚かだな、お前たちは」
「は、はああああああ!!」

真つ先に驚愕の声をあげたのは、その7人に該当する池たち。

貼り出された紙には、7人で一番点数の高い菊池の31点、その上に赤いラインが引かれていた。つまり菊池を含め、それ以下の生徒は赤点ということだ。

「ふっぎけんよ佐枝ちゃん先生！ 退学とか冗談じゃねえよ！」

「私に言われても困る。学校のルールだ、腹をくくれ」

怒り心頭の池や山内と恐怖し身震いする女子と反応はさまざまだ。

平田が三度挙手した。

「赤点の基準を教えてください」

「教科ごとにクラスの平均点÷2をした点数を下回る場合を赤点とする。小数点以下は四捨五入するので気をつけるように」

「ありがとうございます」

「中間テストまで残り三週間。まあじっくりと熟考し、退学を回避してくれ。お前らが赤点を取らずに乗り切れる方法は必ずあると信じている。出来ることなら今回の昇格が偶然では無いと証明してくれ」

茶柱が去るとがつくしと赤点組が肩を落としている。

茶柱の言葉が脳裏を何度も反響しているのだろう。早くも諦めたのか泣いている女子生徒までいる始末だ。

無情にも重たい雰囲気の中、ホームルーム終了のチャイムが鳴り響き、僅かな時間だが休み時間が訪れた。考える時間が訪れてしまったのだ。

所持ポイントがある程度あることで、多くの生徒はある程度の余裕を保っているが、幸村よろしくこの学校の進路・就職のバックアップを受けられないことやDクラスに配属されたことにショックを受けた生徒は多かった。

茶柱の冷たい対応もそれに拍車をかけている。

みな口々に不安を吐露し始めた。

「みんな、混乱する気持ちはわかるけど一旦落ち着こう」

負の循環を辿る前に平田が立ち上がった。その平田を始め幾人かが承太郎をチラチラと見ているのは気のせいでは無いだろう。

そして——承太郎が立ち上がった。

↑To Be Continued

5月1日 その②

「平田、いいこと言うじゃあねえか」

承太郎が口を開くと、反射的にクラスメイトは口を噤む。恐怖もある。今まではそれが九割を占めていただろう。

だが、みな期待しているのだ。このポイントシステムを初日から見抜き行動し、クラスに多大なる貢献を果たした男の次なる考えを。

とはいえ、それは承太郎の望む形では無い。いずれ打破すべきトツプダウン方だが、今はある程度仕方ないと考えていた。

「今、俺たちがすべき事は何だ？」

承太郎が視線を回し投げかけるが、結局最後平田に辿り着くまで答える生徒は居ない。

「勉強……だよな？」

クラス中が頷く。

「ああ、その通りだ。3年間ついて回る試験に関するこの課題を根本的に解決するには学力をつける他ない。特に赤点組には、な」

池は大きく肩を上げ身震いした。

「最初に言っておくが、俺はAクラスを目指すぜ。退学者を出したクラスに対してペナルティが無いとは考えにくい。切り捨てるって発想は捨てている。ペナルティの有無を確認するのは容易いが、ポイントを浪費することもないだろう」

「そうだね、僕もみんなでこの課題を乗り越えていきたいよ」

「私もそう思うな！ みんなで協力して頑張っていこっ！」

平田、櫛田につづきみな賛成の意を示していく。

「テストについてはこれ以上話す事はないぜ。死ぬ気で勉強しな」

ちなみ承太郎は小テストにおいて95点という高得点を叩き出しており、高円寺と同率1位である。

学力の高さと思考力は必ずしもイコールではないが、学生にとって発言の信憑性を高めるには十分すぎる要因だ。

「問題はまだある」

「まだ……一体何かな？」

「俺たちは晴れてCクラスとなったわけだが、これは少なくとも現Dクラス、そしてBクラスから狙われる可能性が高いとは思わねえか？」

「確かに、注目は浴びると思うけど、クラス間で競い合うと言っても定期テストじゃ何も無いんじゃないかな？」

「俺は何もテストの話をしているんじゃないぜ。そうだな、俺なら、今の不安定な心理につけ込み、てめえが有利に運べる問題を起こし他クラスから搾れるだけポイントを搾ろうと考える。これを他クラスが考えていないとは限らねえぜ」

「い、いくら何でもそれは考えすぎなんじゃないかな？」

「さしもの平田も苦笑いだ。」

「というか不穏すぎる承太郎の発言にみな引き攣った表情をしている。」

「それでもないはずだ。櫛田から現Dクラスは暴力上等のクラスだと聞いている。逆上し手を出しそうなやつをターゲットにして接触してくる可能性はないだろう」

「誰もが『お前だよ』と思ったが、決して口にはしない。」

「この学校は生徒間の問題に生徒会が介入し、裁判の真似事のようなことをし、そこでの判決は絶対だそうさ。ポイントが関わることも少なくないと聞く。巻き込まれねえためには何があっても無視する事か記録することだけ、一応心に留めとくんだな」

「情報収集にポイントを使い始めている承太郎は得ている情報の正確性と密度が格段と上がっている。」

「そんな仕組みがあるんだね。忠告ありがとう空条くん」

「他クラスに友達がいる人も多いと思うけど、ちよつと気をつけないとね」

「と、最も他クラスに友達が多い櫛田が言う。」

「この場を借りて、少しいいかな？」

「平田は話が一区切りついたところで前置きし、承太郎の方へ向き直った。」

「空条くん、改めてお礼を言いたい。君がポイントの仕組みについて気づいて共有してくれていかなかったらと思うと正直ゾツとするよ。本当にありがとう」

「ほんとそれな！ 山内がうるさ過ぎてポイント0になるところだったぜー」

「は？？池！ お前にだけは言われたくないぞ！」

「どっちもどっちだろオメーら」

「須藤が言うなっ！」

池と山内に須藤が突っ込むという光景をしらけた目で睨む女子たちだが、当の三馬鹿はその視線に気づいていないのか軽口を続ける。

しかし、この雰囲気につられて次第にクラスの張り詰めた雰囲気が弛緩していった。

「……やれやれだぜ」

ガヤガヤとし出し、承太郎も話す事は話したので腰を下ろした。

「空条くん、さっきのことだけど……これからは協力して頑張ってきたと思うっているんだ。よろしくね」

平田が歩み寄り差し出してきた手を、承太郎は力強く握り返し首肯する。

「……それから、問題を起こすって話なんだけど……」

「安心しな、無駄なリスクを犯しやしないぜ」

「そ、そっか。ごめんね、疑ったりして」

平田が用件を話し終えたタイミングでちょうど始業の鐘が鳴り、生徒たちは再び席につき授業の準備をしたのであった。

やるべき事がある程度明確化され、ただ漠然と押し寄せる恐怖に屈することなく各々が思考を始める。

やはり、金があればある程度心に余裕ができるというものだ。

——昼休み

「く、空条くん。よかったら何だけどお昼一緒しない？」

承太郎が顔を上げると、水泳部所属の小野寺かや乃が気恥ずかしそうに立っていた。その後ろには小野寺が仲良くしている生徒が二人いる。

小野寺はショートカットの良く似合う可愛さと凛々しさを兼ね備えた、活発な印象の女子生徒だ。

以前の水泳50M自由形では見事に一位を勝ち獲っていた事は、承太郎の印象にも残っている。

水泳の模擬選手権以降、短い会話を交わす事は何度かあったが、食事に誘われたのはこれが初めてである。

「空条、俺もいいか？」

そういうとこだぞ幸村と女子からの視線が鋭いが、意に介することなく——正しくは気づくことなく幸村が参加を申し込む。

「構わねえが」

「あ、僕もいいかな？」

「平田君が行くなら私もー」

平田の参加から芋づる式に軽井沢グループ、櫛田たちも参加する運びになり気がつけば10人を超える大所帯だ。

「……やれやれだぜ」

承太郎としては断つてもいいのだが、どの道向かうのは食堂だ。近くの席に陣取られたら巻き込まれる事は目に見えている。

全てを自分1人で賄えるなどと驕ってはいない承太郎は、静かに過ごせないことにはなるが苦渋の決断の末に、今後の繋がりを取ったのであった。

道中「何でこんな大人数に……」と嘆く幸村が承太郎に声をかける。

「空条はDクラスに配属された事、どう思ってるんだ？俺は正直納得いってない」

「あ、それ私もちよつとわかる。確かに勉強は得意じゃないけどシヨックだった」

言う幸村は拳に力が入っており、言葉の上では軽く話しているが、今尚プライドが傷つけられ腹のワタは煮え繰り返っていきそうだ。

面と向かって『不良品』などと言われて気にしていないのは現クラスには三名だけだ。

「特にねえな」

「……どうしてか聞いてもいいか？」

幸村目線、文武両道で頭もキレる空条の答えに驚きを隠せない。なにか、茶柱の言葉の裏を読んだのかも知れないと考えてしまう。「心当たりが多すぎるだけだぜ。お世辞にも優等生ではなかったからな」

なんとなく察して二人も黙る。

「しかし、本当に空条の予想通りだったな……ここでの実力は学力だけじゃない……んだらうな」

何か思い当たる節でもあるのか、幸村は悔しそうに唇を噛む。

学食に到着すると先行し席を確保していた平田たちに呼ばれ、各々発券し席についた。

「あれ、空条くん山菜定食なんだ」

「いろいろと入り用でな」

承太郎が手にしているのはなんと0円で発券することが出来る奇跡の定食だ。

山菜のお浸しと味噌汁、白米と学生にはいささか渋過ぎる定食なのだが、素材の味を活かしたこの定食を案外承太郎は気に入っている。節約も兼ねているが2回に1回ほどのペースで承太郎はこの山菜定食を注文している。

大人数で食事とはいっても、結局のところ社会人の飲み会と同じようなもので離れた席にいる人と話すことなんてまずない。

承太郎は端に座しているのでせいぜい、隣の幸村、向かい側の櫛田、小野寺ぐらいいしか声をかけてくる事もなく大盛りのご飯を口に運んでいた。

承太郎に用がある3人だが、他に對してはそうではないため必然会話がぶつ切りになり、その都度訪れようとする気まずさを櫛田が必死に押さえつけている。

おそらく静寂を誰も気にしないのだが、必死に繋ぐ櫛田。なんとも損な役回りだ。

「みんな、勉強会を開くのはどうかかな？」

平田が場にいる全員に向けて提案する。心なしか承太郎に視線を向けている時間が長いのは気のせいではないだろう。

取り巻きの中心に『サンサー』と明るい雰囲気を広まる中沈黙している承太郎が気になった平田が問いかけた。

「空条くんはどうかかな？」

「好きにすればいい。改めて言うておくが、俺は何もクラスのリーダーだとか、先導者だとかになろうなんて事はこれっぽっちも考えちゃあいねえ。必要だと思った時に必要だと思ったことを話していいだけだ。意見が違えば口を出す事もあるかもしれないが、その時はその時だけ」

「わかったよ。ありがとう。それで、まだ詰めれてないんだけど、空条くんや幸村くん、櫛田さんには講師として参加してもらえたらと思ってるんだけど、どうかかな？」

もちろん、選ばれた三人は小テストで比較的優秀な成績を収めている。

「私で力になれるかわからないけど、ぜひ参加させてほしいな」

迷う事なく引き受ける櫛田の笑顔につられて平田の表情も明るくなる。平田は礼を言つて残る二人を待った。

もちろん平田が急かすことはないが、取り巻きの視線が承太郎たちに刺さる。

承太郎の視線の先には、葛藤している幸村がいた。Aクラスを目指すためにはある一定のクラスメイトとの関わりが必要になることは理解している。

単なる勉強会でいいのか。そもそも、学習という自分のフィールドでさえ、大勢が集まる場に飛び込むことを躊躇ってしまう。

しばらく熟考し、口を開く。

「……赤点組の数人なら」

「ほんとうかい？　ありがとう」

目を逸らした幸村の知るところではないが、平田は満面の笑みだ。「俺はやることあるんでな、参加するかどうかはそれ次第だぜ。……そうだな。赤点組でどうしても参加しないって奴がいたら連絡してくれ」

不穏な香りしかない承太郎の発言に苦笑いの平田だがこの場で

追求はしなかった。

「勉強会の持ち方はまた、話し合いたいと思ってるんだ。みんな、協力してくれてありがとう」

↓↓↓↓↓↓↓↓

——放課後。

承太郎は六限終了後のSHRを終え、教室を去ろうとする茶柱に背後から声をかけた。

「茶柱S——「なんだ？ 質問か空条」」

承太郎が肯定すると茶柱は一瞬口角を上げたが、すぐにいつもの真一文字に戻る。

「悪いが先約がある。そうだな……30分後に生徒指導室前に来い」
承太郎が口を開こうとするが異論は認めないと、踵を鳴らして廊下を歩いて行った。

「……やれやれだぜ」

ほんの2、3分で終わるはずの用件を先延ばしにされ若干の苛立ちを覚える承太郎だが、ぐっと堪え一方的な要求を呑むことにする。

——数分後

『一年Dクラス綾小路清隆くん。職員室で茶柱先生がお待ちです。繰り返します………』

——25分後

基本的に人を待たせることを嫌う承太郎は、待ち合わせには5分以上前には着くことを心がけている。

が、今日ばかりはその心構えを捨てるべきだったと現在進行形で後

悔している。

「へえ、君が噂の空条承太郎くんか。さっきの綾小路といい、Dクラス……Cクラスはイケメン揃いだね。それもタイプが違うなんて女子が羨ましいな〜」

生徒指導前で待機している承太郎の前には一年Bクラス担任の星之宮知恵だ。ピンクゴールドの美しい髪色、ロングヘアの女子生徒と共に職員室から出て来て承太郎を見つけるや否や声をかけてきたのだ。

「ね、一之瀬さんもそう思うでしょ?」

キラークラスを受けた少女、一之瀬は苦笑しながら華麗に受け流している。

今のところ承太郎の眼下でBクラスと担任と生徒が話しているだけ。正直鬱陶しいので黙り込んでいる。

「すごいおっきいね、何センチあるの?」

「……………」

「あれ? 緊張しちゃってる? おーい」

「せ、先生迷惑なんじゃ…………」

「ほれほれ〜」

なぜか星之宮はストップをかけずに指先で承太郎の腹筋をつついた。

「わお、かったい!」

「やかましいッ! 鬱陶しいぞこのアマツ!!?」

ひゃんと情けない声をあげた星之宮は両手を上げて降参のポーズを取り、一之瀬は絶句。恐怖で青ざめていた。

「そんなに怒らないでよ。びっくりしたじゃない」

まるであざと可愛い10代美少女のように承太郎の腹筋をぽかぽかと叩く担任を見て一之瀬も何も言えず、承太郎はやれやれと呟く。

「…………三十路にもなって何をしている知恵」

その異様な光景を目にしてしまった茶柱が思わず思っていることを口に出す。

「あ! それ言っちゃおう? 言っちゃおうの!?!?」

「すまないな空条。中に入ってくれ」

「ちよつと、これから色々聞こうと思つてたのにく。一之瀬さんも聞きたいよね?」

「えつと、ありますけどお話があるんじゃない?」

「空条、そいつは相手しなくて良い」

「ひどい」

茶柱よりも先に承太郎が歩き出し、二人してなにやら喚く星之宮を無視して生徒指導室に入った。

「なんだ……その、同僚が迷惑をかけたな」

一つ咳払いして、上座の椅子に茶柱は腰を落とすと承太郎に着席を促すが長居するつもりはないと断る。

「ここには監視カメラも盗聴器も設置されていない。そう警戒せずとも良いんだがな。まあいい、用件を聞こうか」

「中間考査の解答は何ポイントだ」

「というと? 少々曖昧だな」

「何ポイントで購入できると聞いているんだぜ」

「1000万だ」

ポイントを聞いた承太郎がどのような反応を示すか茶柱は注意深く見ていたが、承太郎の表情はまるで予想通りとでも言いたげにピクリとも動かない。

そして、あろうことか「そうか」とだけ答えた承太郎は生徒指導室を去ろうと踵を返す。

「待て空条」

慌てて茶柱が呼び止めると、承太郎は足を止めたものの背中を向けたままだ。

「お前はAクラスを目指すのか?」

「さてな、あんたには関係のないことだぜ」

「関係ないということはないだろう。なんて事はない、お前たちの方針を知っていれば案外力になれることがあるかもしれないぞ?」

「枠から出れねえあんたに期待する事は何もないぜ。精々、審判としてゲームの進行を全うするんだな」

茶柱はCクラスの面々からは冷徹、思いやりがないと散々な評価をされている。

根拠のない有存在感と社会そのものを舐めている学生たちは茶柱の表面上の態度や言葉を鵜呑みにし教師失格の烙印を押しているわけだ。

反面、日本史の授業を受けている他クラスからは要点を抑えた授業と歴史の裏側の話など退屈しない授業を作る熱心な先生と評価されている。

刺々しい言葉の裏側にある真意を少なからず悟っている承太郎だが、だからといってわざわざ歩み寄る事はない。

承太郎は振り返る事なく生徒指導室を後にした。

「……出てきて良いぞ」

「全然相手にされてませんでしたね」

「どうやら退学したいらしいな、綾小路」

隣の給湯室から姿を現したのは、呼び出しをくらっていた綾小路清隆。そしてもうひとり、堀北鈴音であった。

「随分とはつきり聞こえるのね、綾小路くん」

睨みつけられる綾小路だがこれには理由がある。

遡る事30分前、呼び出された綾小路は茶柱にこの給湯室に閉じ込められ、自らがDクラスに配属されたことに抗議してきた堀北の会話を聞かされていたのだ。

茶柱が、タチの悪いことにこの二人を引き合わせた際に「壁が厚くてあまり聞こえなかった」と綾小路が言い訳したことに起因する。

「風の巡りが良かったみたいだな……う」

脇腹に堀北の手刀が刺さり、綾小路が小さく呻く。

「お前たちは空条をどう思う」

「……とても優秀な生徒ではないでしょうか」

即答した堀北の表情は暗く、綾小路も同じだと答える。

「Aクラスを目指す堀北としては次の中間試験、どう挑む」

「学力下位の生徒に対し勉強会を開いて学力の向上を図ります」

「ほう、あの中学レベルの問題も解けないような奴らの学力を3週間

でなんとかかすると?」

「……それは」

「先生、さっき空条が値段を聞いていた件ですが本当にポイントを貯めれば購入できるんですか?」

言い淀む堀北を横目に綾小路が質問する。

「ああ、法とルールに触れない限り、この学校にポイントで購入出来ないものは無いからな」

「茶柱先生は空条くんが模索しているような手を使うべきと……そういうことでしょうか」

「だとすればどうする?」

「私は裏技……のような手で試験を乗り越えても根本的な解決にはならないと考えます。私は私のやり方で向き合います」

堀北は自分に言い聞かせるよう、力強く答えたのだった。

↑To Be Continued

中間試験

『1年Cクラス担任、茶柱先生。空条承太郎くんが呼びびです。至急、生徒指導室までお越し下さい。繰り返しです……』

一本の放送で生徒も教師も含め学校中がざわついた。

無理もない。本来呼び出す側のはずの教師が、生徒によって呼び出されたのだ。

職員室でも席についていた茶柱に先生たちの視線が集まっていた。

「つぷ。サエちゃん呼び出されてつ、ごめん、無理。あはははは——ひゃん」

茶柱は隣で笑う星之宮の頭頂部をクリップボードで叩くと席を立った。

——この放送が流れる少し前

テスト週間も2週間を切り、承太郎が所属する1年Cクラスでもいくつかのグループに分かれて勉強会が始動し始めていた。

最も大きいグループは平田が発起人となったグループ。次いで堀北主催の三馬鹿と綾小路、沖谷櫛田が参加するグループ。最後に残った赤点組、外村の面倒をみる幸村グループの3グループだ。

女子の赤点組は平田グループ、男子は他2つといった構図だ。

もちろん全員がどこかの勉強会に顔を出しているのではなく、個人での勉強に集中している生徒も多い。

開始早々に離散した堀北グループだが、櫛田の働きでなんとか再結成を果たすことができた。と外村から報告を受けていた。

ちなみに、櫛田は平田、堀北グループ双方に顔を出し多忙を極めている。

そんな中、承太郎は入手した情報の真偽を確かめるため放課後直ぐに1年の廊下を歩いていた——のだが、他クラスの生徒に声を掛けても逃げられ続け、立ち尽くしている。

「……やれやれだぜ」

承太郎は携帯を取り出すと、連絡先一覧から多忙を極めるあざとい系美少女を呼び出した。数コールの後ガチャと通話がつながった。

『もしもーし、空条くん？ どうしたのかな？』

「少し頼みたいことがある」

『……えーつと、私に出来ることなら大丈夫だよ』

「助かる。A、B、Dそれぞれのクラス一人でいい、テスト範囲を確認してくれねえか。難航していてな」

『え？ テスト範囲？ どうしてか聞いてもいいかな？』

協力を仰ぐ以上、聞かれたことには答えるのが誠意だと承太郎はここ数日の出来事を話した。

例年入学最初の間テストは問題が同じという伝統があること。

入手したテスト過去問及び小テストと今回伝えられたテスト範囲がズレていることを上級生に追求すると、テスト二週間前を切るタイミングでテスト範囲の変更を伝えられるということ。

上級生の話通りであれば今日、変更の伝達があるはずなのに無かったため、念のため他クラスにテスト範囲の確認をとっておきたかったこと。

以上三点と口外しないことを伝えると櫛田は依頼を快諾し、すぐ連絡するねと告げ通話を終えた。

そして10分も経たない内に携帯が震える。

『テスト範囲わかったよ。空条くんの言う通り他の3クラスは今日変更を聞いてみたい。これって……』

「……そうか。助かったぜ」

それじゃあと通話を切ろうとする承太郎を櫛田が呼び止める。

『空条くん、これから茶柱先生に確認しに行くのかな？』

「そうなるな」

『確認して、どうするつもりなのか教えてもらってもいい?』

「簡単な話だ。第一声が深い謝罪であればよし……それ以外なら気合を入れる」

櫛田が聞きたかったことでないが、その焦ったさを声色に乗せたりはしない。

櫛田にとって大切なのはこのクラスに大きく関わる情報を『誰が』伝えるのかであり、茶柱の行く末ではない。

その点を追求しようとするも礼を告げた承太郎に通話を切られてしまう。

櫛田は舌打ちをひとつして、明るい表情で勉強会に戻っていった。

一方の承太郎が向かったのは職員室……ではなく放送室だ。

「放送権を買わせてもらおうか」



——そして現在。

生徒指導室の学生からすれば重たい扉を開き茶柱が入室すると、上座に長い脚を組み、逞しい腕も組んだ承太郎が待っていた。

「空条、一体なんのつもりだ」

「ひとつ確認するが、何か言っておく事はあるか」

「無いな」

「そうか。そいつは良かったぜ。まあ座りな、茶柱センサー」

茶柱はいつもの様子を崩すことなく、本来生徒が座る側の下座に腰掛けた。承太郎はそれを見届けて机に片肘をついた。

「5月1日、あなたは学力の乏しいCクラスが、確実に試験を乗り越える方法があると、そう言ったな」

「ああ」

「そこで俺はいくつか可能性をあたったわけだ。あなたに直接聞いたのもひとつだな」

ひとつ区切り、承太郎は立ち上がる。そして、ゆっくりと一歩ずつ歩き始める。

「そして、俺が入手した情報では今日、この日にテスト範囲の変更つてのが知らされるはずだったんだがな」

「フツ、誤情報を掴まされたんじゃないか？」

「誤情報？ 違うなツ！」

茶柱真後ろまでできた承太郎は、茶柱が座るパイプ椅子に手をかけ思いつきり後方に投げ飛ばす。

パイプ椅子は壁にぶつかり、ドン、ガシャンと音を立てて倒れた。

突然身体ごと浮かされた茶柱は、流石に慌てて手を広げるが時既に遅し、先ほども座っていた椅子を抜き取られ地面に落下する。

「Cクラスを除く他3クラスは今日テスト範囲の変更が伝えられてるんだぜ。確実にな」

承太郎は間抜けにも尻餅をつき両手を地面についている茶柱の襟を掴み持ち上げる。

「どういうことか説明してもらおうかつ！ エエツ！」

「ウツ………なんの真似だ」

「質問しているのはあんたじゃあ無いぜツ！ さつさと答えなツ！」

茶柱の足はつま先がかろうじてついていている程度でほとんど浮かされておき、グイツと身体を揺らされることで首にかかる負荷が更に上がる。

「………裁量権の範囲内だ」

か細い声で反論するが承太郎は聞く耳を持たない。

「担当するクラスが不利になる状況を意図的に作るとは恐れ入るぜ。俺は一度言ったぜ審判としての仕事をしろとな。例えるにあんたたち教師はカードゲームでいうところのディーラーだ。ディーラーつ

てのはプレイヤーに公平にカードを配るのが仕事ってのが俺の意見だが違うか？」

「それがどうした」

「どのタイミングで、どのカードを切るのか決めるのはあんたじゃあ無い。プレイヤーである俺たちだッ！生徒に見切りをつけるのは勝手だが最低限の仕事はしてもらおうかッ！」

言い切って茶柱を壁際に突き飛ばす。茶柱は数分ぶりに地に足をつけながら飛ばされる力に負けて後方に飛び掃除用具入れに衝突し肺の空気をガハツと漏らし数度咳き込んだ。

「今後役割を果たすか！果たさないか！ハッキリ言葉に出して言ってもらおうッ！茶柱ッ！」

茶柱に向き直り怒鳴る承太郎の表情は鬼気迫るものがあり、さしもの茶柱も血の気が引き、呼吸が荒くなる。

「……………わ……………た」

「聞こえねえなあッ！」

ガンッ！と承太郎は腕を突き出し、掃除用具入れに拳を叩きつけ茶柱は体を震わせる。

「……………公平に努めよう」

——数十分後1年Cクラスの生徒宛に茶柱から謝罪文と変更後のテスト範囲が通達されたのだった。

承太郎が生徒指導室を去った後、星乃宮によって腰を抜かし、動けなくなった茶柱が発見され一言「何も無かった」と話したのはまた別の話。

一方、放送を聞いて爆笑していたクラスメイトたちはテスト範囲変

更のメールを受けて慌てふためく者、怒りを露わにする者、まだ二週間あると支えようとする者三者三様の反応だった。

そんな中、承太郎は1年Cクラスの教室に向かっていた。目標の人物は一役買った櫛田……ではなく平田だ。

その後のひとつ平田に頼み事をして、承太郎は他の生徒と同じように学業に励む事にした。

↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑↑

きたる金曜日の中間テストを目前に控えた水曜日。放課後を迎えた生徒たちがいつものテスト勉強に移行しようと動き出す前に、穏健派のリーダー平田洋介が動いた。

「みんな、少しいいかな。実は中間テストに向けて重要な情報を共有したいんだ」

「え、なにに？」

軽井沢を筆頭に反応を示し、三馬鹿や堀北も耳を傾ける。

「今日までに、みんな中間テストに向けて必死に勉強してきたと思う。そのことで、力になれるかもしれないことがあるんだ」

平田は事前に承太郎から受け取り茶柱に職員室の印刷機を借り安く仕上げた人数分の過去問の束から一部取り上げて話しを続ける。

「この学校には毎年、1年の1学期中間テストは同じ問題が出される伝統があるらしいんだ。昨日、先輩から話を聞いて、過去問も譲って貰ったんだ」

「マジかよー！」

「なんだよ、そんなのあるなら勉強しなくて良かったじゃん」

三馬鹿トリオが火蓋を切ると軽井沢たちも似たような軽口を叩く。

その光景を見て心底安心している平田と櫛田。想定通りと何の反

応も示さない承太郎だ。平田は基礎学力の大切さを改めて訴えた上で続ける。

「今年も例年の法則が適応されているとは限らない。ただ、範囲も同じだし練習には確実に使える者だと思うんだ。だから、よければ使つて欲しいんだ」

「見直したぞ平田く」

「うっし、コレで赤点回避間違いなしだぜツ！」

「須藤くん、浮かれるのはまだ早いわ。今日からコレを使ってみっちり勉強よ」

「お……おう」

「暗記すればいいと前日に投げて寝落ち……なんて冗談にもならないわ」

「……うす」

高円寺を除くクラスメイトが過去問を受け取り口々に感想やら意気込みを語る中、須藤に注意喚起した堀北が平田のもとへと向かう。

「平田くん。コレは本当にあなたの案なのかしら」

「そう……だね」

平田は苦笑いしながら答え、堀北も察する。

「十中八九、テスト範囲の変更にも空条くんが噛んでいるんでしょね」

「あのタイミングということは、そうなんだろうね」

「あなた、何も聞かされていなかったの？」

「みんなと同じだよ。メールを見て初めて知ったからね」

「……そう」

「堀北さんたちはテスト、どうなりそうかな？」

「……正直これがなければ厳しかったかもしれないわ」

実際、日本史や生物など暗記科目は褒美に釣られた故の努力もあり三馬鹿とはいえ、赤点を回避することができらうラインまで来ている。

問題は文法を理解していないためセンスを問われる国語、中学からの知識の積み重ねと応用が必要な数学、外国語だ。

特に外国語、高度育成高等学校では英語を学習しているがこれが致命的。三馬鹿は軒並み単語力が皆無で須藤に至ってはAからZまでの順番すら怪しかったほどだ。

「裏技には頼らないんじゃないかなかったのか？」

堀北が席に戻る間に同じ勉強グループに居た綾小路が茶化すと堀北はいつも通り睨みつける。

「嫌味のつもり？」

「……なんでもありません」

「そういえば……いいえ、忘れてちようだい」

「なんだよ、気になるだろ」

「そう？　じゃあ、聞かせてもらおうけど。少し前の昼休み、櫛田さんとコソコソ食堂で上級生に話しかけていたのは何？　報告を受けて無いのだけけれど」

「なんのことだ？」

「もう少しマシなとぼけ方はできなかったのかしら。話していた事実を視認した私に対してそれは通用しないわ」

「そういうところは鋭いな……だが、本当になんてことないぞ？」

「なら、答えてもらえるかしら」

「須藤たちの学力がアレだっただろ？　だから、オレなりに抜け道を模索してみたんだが……徒労だった」

「それは空条くんの指示？」

「話したこともないが？」

「そう……だったわね。ごめんなさい、あなたがぼつちなのを忘れていたわ」

「おい、勝手に憐れむな。しかも、堀北だって同じだろ」

「私は好きで独りでいるもの、あなたと違うわ」

他愛もない会話をしながら荷物をまとめ、堀北たちは勉強会に使っている図書室へと向かった。

そして2日後、1年Cクラスの生徒たちは1人の落第者を出すことなく中間試験を乗り越えることができたのであった。

↑T o B e C o n t i n u e d

テストのその後

S i d e 綾小路清隆

「えー、では僭越ながら私^{わたくし}池寛治が音頭を取らせていただきます！」
ワザとらしくごほんと咳払いした池は誰に頼まれたわけでもないが、この第一回定期考査全員合格記念クラス打ち上げ会を開始すべく立ち上がった。

打ち上げの字面的に毎回やるつもりらしい。とすると最大年5回になるわけだ。

暇があつて読んだ社会人男性を主人公にした小説では、忘年会など年に一回ですら辟易としていた付き合いの会合が年に5回。大人数での飲み食いが苦手な面々の心中を察するが、オレとしては友達を作りたい口実になるかもしれないと思ひ二つ返事で参加した。

「まさか、あなたが参加するなんてね」

オレたち1年Cクラスは大人数の受け入れをしている居酒屋を会場としている。もちろん飲酒はご法度であるため注文も出来ないし、注文した場合には学校に通報すると入店時に注意喚起もされている。

そんな会場の10人がけの座敷タイプの席が3つ。さらにそのうちの1つの角に追いやられたオレに同じく角に追いやられた堀北鈴音が話しかけてきた。

「こういうのは断つたら角が立つだろ。オレは事なかれ主義なんだよ」

「相変わらずね」

「それに、それはこっちのセリフだ。堀北が参加するとは思わなかったぞ」

クラスの打ち上げと聞けば聞こえはいいが、オレたちCクラスは一枚岩でもなければ仲良しこよしのクラスというわけではない。

この打ち上げに参加しているのもクラスの7割といった具合で、そのなかでも乗り気な生徒がどれほどいるのかと聞かれれば2、3割程度なのだろうと答えざるを得ない。

ちなみに発起人は池と山内だ。

最初は堀北グループでの開催予定であったが、櫛田が平田に話したことでクラス単位の打ち上げへと昇格したのだ。

「あなたの勝手な印象で語らないでもらえるかしら？」

『私は好んで1人でのいるの、あなたとは違うわ』なんていつてなかったか？」

ちよつと出来心でものまねしてみたのがよくなかったらしく、恐ろしくするどい眼光とコンパスの針を向けられた。

なんでコンパス常備してるんだよ、などと思うと同時にちくりと腕に針先が当てられた。押し込まれてしまったら強制退場級の出血をしてみたいそうなので誠心誠意謝罪する。

わかればいいのよ、と吐き捨てた堀北は武器をしまおう。

恐ろしい女だ。

堀北の敵意から免れ一安心したところでちよつと池の長い口上がひと段落したようで、皆飲み物を手に取ったのでオレもそれにならない麦茶の入ったグラスを取る。

「えー、宴もたけなわですがそろそろ「それ終わりの挨拶だぞー」「やっぱバカじゃん」う、うるせーわかってるよそれぐらい！」

知ってる文言を使ったかったんだろうな。池は顔を真っ赤にして反論している。宴もたけなわ、酒宴の席が盛り上がっていることを表す言葉だ。そもそも酒宴ですらないけどな。

「盃を干すと書いて！・『かんぱ——い』『乾杯と読む！』」

外村だけ若干違う返しをしているが気にしないでおこーう。

乾杯を合図にみな、喉を潤しコース料理が運ばれてきて箸を伸ばす。今回のコースは最初は海鮮、途中から唐揚げなどの若者大好きな品が提供されるそうだ。

隣の堀北は唇を湿らせるだけお茶を飲むと開口一番「綾小路くん、平田くん席替えを提案してきなさい」なんて抜かした。

「まだ始まって1分も経ってないのに通るわけないだろそんな意見」

「そこを通すのがあなたの仕事よ」

「無理だ。諦めて時を待つか自分でやるんだな」

「つかえないわね」

「おい」

三馬鹿を勉強会に呼んだ時もそうだったが、こいつはオレをなんだと思っっているんだ？

堀北が席替えを切り出した理由は至ってシンプルで、確信を持って答えられる。

要は空条とお近づきになりたいんだろう。空条が最初に3連の内この席から一番遠い位置にある机の角に陣取った時にさりげなく近くに座ろうとしていたからな。

まあ、現在空条の脇を固めているのは平田・軽井沢や小野寺たちな訳で追いやられた堀北は幸か不幸か勉強会のグループに幸村や外村などの面々で席についている。

「素直に声をかければいいのにな」

「……何か言ったかしら？」

おっと、心の声が漏れてしまっていたらしい。

おい、ポケットに手を入れるな、物騒なんだよ。

「ほ、堀北。あ、あのよ——」

渡りに船。須藤が果敢にも堀北に話しかけてくれたのでオレはお造りに舌鼓をうつことにする。

「うまいな」

脂の乗った身に、旨味を引き立てる醤油と香るワサビ。進学してから初めて食べたが、回る寿司屋に今度行ってみよう。

それにしても、意外といえば空条が打ち上げに参加しているのも意外な事だ。

話しかけづらいものの話せない訳ではないというのがここ一ヶ月半での総評だが、基本単独行動をしている男だ。

好んでこの場にいるとは考えにくい。

案外軽井沢たちにゴリ押されて断れなかった……なんてオチなのかもかもしれないな。

堀北から、いやあの高円寺を含めたCクラス全員から一目置かれる空条承太郎。オレもクラスの一員として彼の動向は当然気にはなるわけだ。

動向を読みきれなかったせいで損失も出してしまった。

実は先の中間試験、平田が配布した過去問題の提供元である空条承太郎のせい……といえれば失礼だが、あまりに須藤の学力が追いついていなかったため念のため、過去問を15000ポイントで購入していたんだが全くの無駄金になってしまったというわけだ。

事前に空条に接触はしたものの、単純な観察で察することは出来なかった。

なんなんだろうな、あの生命力に満ち溢れた目は。

オレの質問にも全身何の反応も示すことなく『わからねえな』と答えただけだった。

正攻法以外の可能性を暗示した質問をしたんだから多少瞳孔が開いたり、視線が動いたりはあるかもしれないと思うんだが、まあ仕方ない。赤点退学者が出なかったからよしとしよう。

「綾小路殿は随分と刺身がお好きなようでござるな。拙者あまりナマモノが得意でない故お譲り申すが？」

「……いいのか？」

いつのまにか、かなりの量摘んでいたらしい。無意識って怖いな。

……が、外村の好意に甘えるとしよう。

うまい。

「私の分もあげるわ」

「……この流れは覚えがあるな」

ずっと皿をスライドさせてきた堀北には以前奢ってもらったことがあるのだが、食べた瞬間頼みごとをしてくるといういやらしい手を使われた。

「人の善意を素直に受け止められなくなったら終わりよ？」

「その原因を作ったのは他でもない堀北なんだけどな」

「何のことかしら？ 私はただお願いをしただけで、強制はしていないわ」

「追分と都合のいい解釈をしていらっしやるようで」

「で、食べるの？ 食べないの？ 私も一度あげるといつてしまった手前、断られると思うところがあるのだけれど」

これが櫛田とかだった素直に受け取っていたが、堀北は警戒しなければならぬ。

しかし、刺身がうまいのは確かで一皿二皿程度では量的に足りないというのも事実。

しばらく悩んでいると堀北の右手が刺突武器をしまっているポケットに向かう。

「食べます。食べさせていただきます」

「そう。よかつたわ」

堀北に見つめられながら、恐る恐る箸をつける。

「それで頼みたいことがあるのだけれど」

「おい、なにか？ お前はオレを人間不信にでもしたいのか？」

「そもそも誰も信用していないあなたは何を言っているの？」

「勝手に人を決めつけるな。オレにだって信頼を置く友達の一人や二人……「いないわよね？」何で知ってるんだよ」

「教室でのあなたは座席の都合上常に視界に入っているのよ」

「……さて、オレはまだ食べてすらいない。聞く義理はない」

「冗談でしょ？ あなたが舐め回した箸で一度掴んだお造りを私に返すつもりなの？」

「何でそんな汚い言い方なんだよ。普通に食べてただろ」

「友達のいないあなたにいいことを教えてあげるわ。女子の情報網つて「なんでもさせていただきます」最初からそう言えばいいのよ」

結局席替えを平田に打診することになったオレは、あまり行儀良くはないが携帯を取り出しチャットを送る。

しばらくして平田から45分経過したタイミングで行う旨の返信が来た。この打ち上げが90分のコースなため実質一度の席替えとということになる。

そして迎えた第一回にして最後の席替え。

最近はおみだくじのアプリなんてものがあるらしく平田の端末上で行われた厳正なる抽選結果がクラストークに共有された。

オレの脇を固めるのは平田と櫛田。そして正面には左から幸村、空条、軽井沢だ。

堀北とはというと、またしても須藤と隣で須藤は運命を感じていると叫んでいた。

今日に限って何故か普段ピクリとも動かない携帯が絶え間なくぶんぶん騒ぎ立てているのだが食事の席で携帯をいじるわけにもいかないのも電源を落とした。

それにしても、こんなにもクラスの中心人物が集まると場違いな気がして居心地が悪い。しかしながら、神様が決めた席なので甘んじてこの席で食事を取るとしよう。

「空条、この間の過去問だけど、空条が用意したんじゃないのか？」

席に着くや否やお堅い話を始めたのは幸村だ。

「はあ？　なにそれ、平田くんのこと疑ってるわけ？　むかつくんですケド？」

空条が答えるよりも先に軽井沢が食ってかかった。彼氏を軽視されているようで気分が悪かったのだろう。

「い、いや、そういうつもりじゃないんだが。どうなんだよ空条」

「終わったことだ。知ってどうする」

「俺たちは一緒にAクラスを目指す関係だ。それぐらい聞いてもいいだろう？」

「……やれやれだぜ。過去問を用意したのは俺じゃあないぜ」

「だ、だったら誰が」

「そこにいる櫛田だ」

一同がえつと驚きの声を上げた。櫛田も同じように声を上げていく。

「く、櫛田が？」

「え、えつと……確かに先輩からもらったのは私だけ……」

おどおどと空条を見ながら言葉を紡いでいる。表情から何かを読み取ろうとしているのだろうが、空条はいつもの彫刻顔で何を考えているのかさっぱりわからない。

それはコミュニケーション能力に長けた櫛田も同じなのだろう。

「そういうわけだ。ついでに俺からも一つ聞かせてもらおうぜ」

話をぶった斬ると空条は湯呑みを手に取り、唇を湿らせてから話し

始めた。

「最近Dクラスの生徒に付き纏われている。少なくともここの一週間。何をしてくるわけでもねえが、監視されているらしい。同じようなことに身に覚えはねえか？」

「実は僕もそれで少し悩んでいたんだ。まさか空条くんもだったなんて」

「あれほんと迷惑なんだよね。視線感じてキモいつてゆるーかさ」

平田軽井沢カップルは身に覚えがあるらしい。

オレは人の視線には敏感な方だと思うが今のところないな。つけられていても気付いていないだけかもしれないか？ もしこの場で監視されていないのがオレだけだったらそれはそれでシヨックだな……と思っていたが、幸村と櫛田も身に覚えがないらしい。

「Cクラスの目立つ人物の監視か……なにか仕掛けてくるつもりなのかもしれないな」

顎に指を当てて考えている幸村が須藤に視線を送った後、軽井沢を見た。

「でも、仕掛けるっていつても何を狙っているんだろう。クラスの運営方針を探る……みたいなことかな？」

「たしかに、クラスポイントのことがあってからは他クラスのことはいあんまりクラスの内情って話せなくなったもんね」

「それもなくてはならないだろうけど、体制を知っても何ができるわけでもないんじゃないか？」

「最も警戒すべきなのは、短気な生徒への接触。それに伴う学校が介入するような問題の発生だ」

空条の言葉に幸村は頷き、他の面々は生唾を飲んだ。そして、須藤に目をやる。

「学校裁判沙汰になった場合、過去の判決例を聞いた限りプライベートポイントだけでなく、クラスポイントにも影響することもあると聞くぜ」

「それってかなりまずいんじゃないか？ 挑発に乗って手を出したりしたら……」

「まずいね。みんなにもそういう行った行為があっても無視したり、先生に報告したりして反応しないように伝えたほうが良さそうだね」

逆に言えば、敵が攻めてくるポイントがわかっていれば対策もとれるというもの。根本的な解決は果たせないがさながら大阪の陣でいうところの真田丸のような働きを期待できるというわけだ。

髪も真つ赤だし、ちようど良さそうだ。

なんて考えてみたが、本人に注意喚起する以外に現実的に打てる手はない。二十四時間監視するわけにもいかないだろ？ 何より二十四時間須藤を見続けるってなんの罰ゲームなんだ。

その後テスト以外の学年行事が体育祭以外提示されていないことが不審だとか、ポイント変動する行事があるんじゃないのかなど話し合って解散となった。

打ち上げ解散後、まばらに寮へ戻っていく生徒たち。

一直線に帰っていく生徒が多い中、オレは無料支給のミネラルウォーターが販売されている自販機に向かう。

余計な糖分なども入っておらず、必要な水分補給に非常に優秀な飲み物が無料なのは体調管理の面だけでなくポイント節約の面からもとてもありがたい。

せっかく近くまで来たので一本購入して、夜風に当たりながら喉を潤す。

そういえば、最後まで堀北は機嫌が悪かったな。途中で帰らなかっただけ成長か？

解散後、何か言いたいことでもあったのかオレを探していたようだが、触らぬ神に何とやらだ。脱兎の如く逃げ出してオレは今ここにいる。

心穏やかに、星空に目をやっても東京の明るい空ではほとんど星は見えなかった。

「ん？」

ふと、背後から聞こえてきた足音にドキリとして振り返る。

「ホワイトルームつてのに、聞き覚えがあるんじゃないか？」

人影を捉える前に耳に届いた単語に思わず目を見開きそうになる。

そのまま振り返ると、そこにいたのは空条承太郎。

日本人離れした巨体が通路を防ぐ様に立っている。いつものように両手をポケットに突っ込んで、凜々しくもあり、涼しくもある彫刻顔だ。

ホワイトルーム。

オレの親父が設立した教育機関の一つだが、その存在を知る人間はごく僅か。

なぜ、空条が知っているのか。確かめたい事項は幾つもある。

そして、おそらく空条はある種の核心を持つての質問なのだろうが、まずはとぼけよう。

「な——」創立者は綾小路■、お前の父親だ。違うか?」……………」

同姓同名。偶然。言い訳ならいくらでも出来る。空条とて確信めいていようが、それを決定づける情報は持つていないはずで、この学校ではオレを通してしか情報を追加する事はできないだろう。

が、空条がわざわざオレに接触してきた意味を考える必要がある。

オレがこの学校に求めるのは自由と平穏な日々だ。言いふらされ、奇異な目で見られ目立つ可能性や関係者が接触してくる芽は可能な限り摘んでおきたい。

「……………」何がしたいんだ?」

「ふと思いい出したことがあってな。気になったから確かめた。それだけだ」

「思いい出したこと、というのを教えてもらえるか?」

「こつちの答え合わせに付き合わせているからな。構わねえぜ」

空条の返事を聞きながら、開きっぱなしだったペットボトルのキャップを締める。

「俺には随分と過保護なお袋とアメリカに住むジジイが居てな。そのジジイがお袋と俺をアメリカに移住させようと日本の粗探しをしては吹き込んできていたんだ」

確か、空条の祖父はジョースター不動産の理事か。入学初日に高円寺とそんなことを話していたな。

ジョースター不動産といえば、世界有数の財力を保持しており、加

えて世界最高峰の財閥であり医療、考古学を軸にした総合機関であるSPW財団との関わりが深いことはあまりに有名だ。

そして何よりも財団ひとつで世界規模の影響を与えるだけの存在と言われている。

スピードワゴン
SPW財団

創設者はロバート・E・O・スピードワゴン。彼の自伝では、ロンドンの貧民街で生を受けながらも、イギリスの貴族であったジョナサン・ジョースターと出会い、それを起点に人生が大きく変わるようになる。

ジョナサンの死後、アメリカ大陸に渡ったスピードワゴン氏は生命の危機に瀕しながらも石油を掘り当て、世界有数の大富豪になった。

それで得た莫大な個人資産全額を、全世界の医療や自然動植物保護のために使うことを決意し設立した組織だ。

そんな機関に関わりを持つ人間が近くにいたことが入学初日の一番驚いたことだった。

うちの親父とは権力の規模が違うからな。

「その中に、俺の進学に合わせて日本の教育の批判があったわけだ。その中に綾小路■■■の創設したホワイトルームのことがあった。つい最近まで、忘れていたわけだが」

「ホワイトルームのことは何て言っていたんだ？」

「綾小路が父親に対して尊敬とか敬愛とかしてるっていうんなら申し訳ないが、『時代遅れの新幹線教育』『人権侵害を認可する国』てな具合で散々言っていたぜ」

「心配ない。間違つてないからな」

「ジジイが俺と同じ歳の息子を被験体にしてると話していたこと。初日のコンビニ騒動の対応、水泳の授業、毎回きっかり同じタイムでゴールすること、中間考査の過去問を入手したこと。それでちと気になったところに綾小路という苗字で繋がったというわけだ」

ひらめくには些か証拠不十分気味だが至られてしまっただけはどうしようもない。

というか、さりげなく櫛田はオレを売ってたんだな……

「追加で調べさせてもらったが入試の筆記では全教科50点。随分と遊んでいるじゃあねえか」

「偶然って怖いな」

個人情報も買えるんだな。

「ジジイから聞いている情報が確かなら、綾小路、お前はとうに一般人の一生分以上の学習過程を終えているはずだが？」

「……流石にそれは言い過ぎだぞ？」

割と全部知ってるな、これ。

どうしたものか。

空条のやつ鼻で笑ってるし全く信用されていなさそう。

「なんにせよ助かったぜ、綾小路。これでぐっすり眠れそう」

「……それは、よかった……？」

空条はそのまま踵を返して歩き出した。

本当に確認だけして終わるつもりなのか？

「ああ、そう。今後、可能な限りの協力は頼むぜ」

「そう言われてもな。すでに毎日を全力で生きてるぞ」

振り返らずに言い放った空条だが、オレの返事を聞いて引き返してきた。

「賑やかな学生生活を送りたいってんなら、それでも構わねえぜ」

「それは……遠慮したいんだが」

なんだよ、賑やかな学生生活って。不穩でしかない。

「一応聞いておくが、協力って具体的には何をすればいいんだ？」

「そうだな。ひとまず、定期考査では85点以上をキープしてもらおうか」

「……善処する」

100と言ってこないあたりに性格の悪さを感じるな。と、失礼なことを考えていたのがバレたのか空条が間合いを詰めてくる。

「どうしたん——」

手を伸ばせば届く距離まで詰めてきた空条は、いきなり右腕を引き絞った。

須藤を殴り飛ばした時と比べるとかなり増して引き絞っていて、当

たればかなり痛そうだな。

オレは弓を引くような予備動作を取る空条の拳に吸い込まれそうになる視線を空条全体に向ける。

視線を一点に固定するのは戦闘中は時に命取りになるからだ。

空条はそのまま、腕を振り抜く——と見せかけて前に出ている脚で足払いを仕掛けてきたのでバックステップで躲す。

完全に死角を狙っていた。

かなり戦闘慣れしているようだ。

「つぶないな」

「ほう、今のを躲すか」

空条がニヤリと口角を歪める。

「なんだよ急に」

「ホワイトルームの教育つてやつがどれほどのものか気になってな」

「お前の好奇心でオレは死ぬところだったんだが？」

「てめえは猫って柄じゃあないだろ。やれやれ、どうやらジジイの言っただけでも全てが盛られた話ってわけでもないようだな。戦力が増えるに越したことはねえが」

「びびって後ろに飛んだだけだ」

オレの言葉が聞こえているのかいないのか、最後に言いふらす趣味はない。そう告げた空条は今度こそ真っ直ぐ帰って行った。

やれやれだぜ……

思わず空条の口癖がうつるぐらいには、消耗した日になってしまったな。

↑To Be Continued

買い物にいこう

中間試験の打ち上げから一週間ほど経ったある日の休日。
和のテイストに改装された落ち着きのある渋い趣味の承太郎は、コンコンとしつこくノックする音で目を覚ました。

若干の苛立ちを覚えながら体を起こし音の発生源に目をやり、驚いた。というのも、音が玄関からではなくベランダから聞こえてくるのだ。

まだ6時にもならない早朝に嫌がらせのようにノックする輩なら、しめることも考慮したが、ベランダからの侵入者であれば問答無用にぶちのめす。そう心に決めてカーテンを勢いよく開け放った。

「……鳩、だと?」

カーテンを開けると小刻みに鳴り響いていたノックが止まる。

承太郎が鳩を凝視すると罨にでもかかってしまったのか、脚に枷のようなものがついている。

「どれ、少し見てやるか」

野生動物に触れるつもりはないが、必要とあれば助ける。それが空条承太郎だ。

ガラス戸を開き、しやがみ込む。

「……これは、伝書鳩か」

何かと思った金属は筒状で物が入られる構造になっており、テレビや新聞で見るものより一回りほど大きい。訓練されているであろう鳩は承太郎が手を伸ばしても逃げ出そうという素振りはない。

承太郎は筒を開け、予想通り入っていた紙を取り出した。鳩は、それを確認したかのように一度承太郎の方を向くと大空へ羽ばたいていった。

「こんなことができるのはジジイ……いや、スピードワゴンSPW財団か」

小さく丸められた紙を開くと、やはり差出人は祖父ジョセフ・ジョースターだった。

『親愛なる我が孫承太郎へ。そろそろしみつたれた日本の教育に嫌気

が差してきた頃じゃあないかと思つて手紙を書いた。ホリイも随分と心配しておる、とつとと歸つてくるんじや。

アメリカならもつといい学校も腐るほどある。何も心配することはない、安心して自主退学すれば良い。……が、漢が一度決めた道、無理に退学させるつもりは毛頭ない。

わしの孫に限つて退学処分を受けることはないと思うが、万が一に退学すればアメリカの一流学校。Aクラスで卒業すればジョースター不動産のアメリカ本社への就職を約束しよう。

これから定期的に鳩を飛ばす。ホリイのためにもたまには手紙を書くんじやぞ？

『ジョセフ・ジョースター』

「やれやれだぜ。あのジジイ平然とルールを知つていて、その上破つてきやがる」

3年間の完全隔離をおこなっている高度育成高等学校は電話や手紙はもちろん、SNSへの書き込みなども監視し、写真等のアップロードを除きメッセージ全般を禁止している。

が、現代社会において伝書鳩は坂柳理事もびつくりの抜け道だ。スピードワゴンSPW財団にて特殊な訓練を受けている伝書鳩は事故にでも遭わな
い限り100%目的を達成する。

とはいえ、承太郎は返信を書くつもりは全くない。

時に王道でない手も使うことも厭わない承太郎だが、この学校のルールの中で戦うことに意義を感じているため外部からの影響は受けたくない。文面的にジョセフが介入してくることはなさそうだが、万が一手を出してこようものなら容赦するつもりはない。

一応、祖父からの手紙を丁寧に取り出しにしよう。

そして、目覚めの悪い朝になってしまったが、承太郎は朝の諸々の準備に取り掛かったのであった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——同日昼。

承太郎はポイント節約のため自炊をしている。必然的に材料の買い出しは定期的に行くことにはなるのだが、この日ばかりはいつも通りにはならなかった。

休日にもかかわらず制服を着込み気合の入っている承太郎。授業であれば別だがプライベートでは、彼は例え死者が出るほどの灼熱の砂漠であつても学生服を着ているだろうと言えるほど、学生という部分にこだわりを持っていたりする

肉やら野菜やらだけでなくペットボトルまで詰めたエコバックを軽々と片手で持ち、帰路についてしばらく承太郎の視線に一人の少女が映る。

銀髪の美しい小柄な少女は足が悪いのか杖をつき、重たい足取りで買い物袋を片手に少しずつ歩を進めていた。

買い物袋もなかなかの質量があるのか、体重を反対側に乗せて、全身を使って持っている有様だ。

寮までそれなりに距離はある。

それを見過ごすということは承太郎にとって後味の良くないものを残す。

空条承太郎は正義感もまた、それなりに強いのだ。

「貸しな。寮まで持ってやる。もつとも、アンタが迷惑じゃあねえっていう前提だが」

善意とて押し付けければ受けてからすれば悪意と相違ない。

突然声をかけられた少女は少し驚いたように振り向くと、身長差故に承太郎を見上げた。

「ご親切にありがとうございます。もし宜しいのであれば大変助かります」

柔らかな笑みを浮かべて少女はペコリと頭を下げた。

承太郎は特に何も言うことなく、手を差し出し買い物袋を受け取るうとする。

それに呼応して少女も荷物を差し出した。

「1年Aクラス坂柳有栖と申します。あなたはCクラスの空条承太郎さん、ですよね?」

「名乗った覚えはねえが?」

「ふふふ、空条さんは有名ですからね。お気を悪くされたのなら申し訳ありません」

悪戯っぽく笑う坂柳の笑みはどこか意味ありげな雰囲気纏っている。

「初日にこの学校のシステムを見破っていた、と。噂というものの広まる速度は速い物で、初月の答え合わせの際に小耳に挟んだのです。担任の真島先生も開校以来Dクラスが1か月でクラスを上げた歴史的快挙であると賞賛されていました。その立役者であるとも噂されていますよ?」

「なるほどな」

承太郎は歩みを坂柳に合わせて寮に向かう。

「こうして出会ったのも何かの縁。少し質問させていただいてもよろしいですか?」

「ああ」

「では、お言葉に甘えて。空条くんはこの学校どう思われていますか? 私としては現状では少し退屈しているところですよ」

『「これから」に期待しているっていうのは同じだぜ』

「ふふ、そうなりますよね。その時がきたらお手柔らかにお願いしますね」

「ああ、胸を借りさせてもらうぜ」

「あら、随分と謙虚なのです。やはり、噂は噂に過ぎないと言うことですね」

承太郎に荷物を持ってもらっている立場の坂柳だが、だからと言って会話の中で遠慮することなどはない。Aクラスは当然初日に学校のシステムにある程度勘づき、個々人の素の能力の高さと統率により、1000ポイントを丸々ほぼ残しており、現状Bクラスに大差をつけてトップを走っている。

その立場にいる坂柳の一連の発言は嫌味と取られても仕方のないものばかりだ。

しかし、承太郎はそんなものを気に留める様子はない。実際気にもしていなかった。

「ところで、空条くんはどうして私にお声がけを？」

坂柳有栖は生まれつき脚が弱く、杖を使用して生活している。いわゆる先天的疾患と呼ばれるものだ。

そのため、承太郎がしたように坂柳に声をかけるものは意外と多い。

見目麗しい坂柳に近づいたため、下心を持って近づく者。

周囲からの評価評判を意識し、善人を気取るための手段として近づく者。

弱者は助けるものと刷り込まれた日本の教育ゆえの自己満足のため近づく者。

純然たる善意でのみ動いている変人。

坂柳の経験上大きく四つに分けられるが、大抵は前者の二つだ。

もちろんそれは、直接的に見聞きしたわけではなく、人間観察能力に秀でた坂柳の観察眼を持ってして導き出された答え——坂柳の——主観ではあるものの、実際のところその通りである。

4種類に分類される人間性だが、答えは皆同じ『困っている人を助けるのは当たり前』これに尽きる。

言い回しに多少の誤差はあるものの、本質に差異はない。

短い時間の観察では、承太郎が異性として接触するため声をかけてきたとは思えないが、クラス間で対立するこの学校で何を考えて声をかけてきたのかが気になった。故の質問だ。

坂柳は好奇心に忠実な少女。並び歩く承太郎の顔を少し前屈みになり覗き見る。

「アンタを見なかったことにしてとっとと帰るってのは俺の心に後味のよくねえものを残す。それだけだぜ」

「ふふふ、随分ユニークな答えですね。ご自身のためとはつきり答えの方は初めてですよ」

表情ひとつ変えずに言った承太郎に嘘偽りはなさげだと驚きながら、坂柳は口元に手を添えて上品に笑った。

「私ばかり質問させていたと思いますが、空条くんは何か聞きたいことなどはないのですか？」

「ねえな」

「ない、ですか」

「ああ、Aクラスの二つの派閥の片割れのトップに立つアンタならわかるんじゃないか」

「ご存知だったのですか。空条くんも、案外お人が悪いのですね」

「それとこれとは別の話だ」

「確かに、その通りですね」

AクラスがいつからSシステムに気が付いていたのか、中間テストをどのように乗り切ったのか、クラスの現状はどうなのか。

坂柳に聞かずとも保有クラスポイントを見れば答えは明白だ。

加えて承太郎は特に坂柳という少女に興味があるわけでもない。質問がないのは必然といえよう。

これが櫛田や平田であればたとえ理解していても、会話を円滑に進めるために質問しているだろうが、承太郎は沈黙を気にしない。

静寂に包まれた帰り道。

煉瓦で舗装された綺麗な道を鳴らすのは、坂柳の杖。右手に己の、左手に坂柳の荷物を持つ承太郎の横をカツカツと一定のリズムでテンポよく歩く。

「おいおい、いつからCクラスの番長がAクラスの姫の荷物持ちになっただんだ？」

その後ろから野暮ったく声をかけてきた輩に反応することはなく、2人は歩みを進める。

「無視ってか？ クク、いい度胸してやがる」

声の主が、顎をしゃくるとサングラスをかけた男子生徒が承太郎たちの前に躍り出た。

「Our bosses is calling you」

「……やれやれだぜ」

留学生かハーフなのか、明らかに純粋な日本人の容姿ではない、目の前に立ちはだかった生徒が呼びかけると承太郎たちも脚を止める。かなりガタイの良い生徒だが承太郎には数歩及ばない。

承太郎は坂柳に荷物を返し、自分の荷物を手放して龍園へと向き直った。

「あなたは龍園翔くんですね」

「これはこれは、Aクラスの姫様は下々の名前まで覚えてるのか？ 大変だな上に立つつてのも。だが、今日はてめえに用はねえ、すっこんでな」

坂柳の表情が一段険しくなる。

「おい空条、こいつはどういう風の吹き回しだ？ 側から見りや組長の娘と世話係つてな構図だぜ。Cクラスの連中が知ったらどうなるんだろうな？」

「鬱陶しいぜお前、失せな」

「はっ、てめえに指図される筋合いはねえよ」

再び龍園が顎をしゃくるといつの間にか龍園の側まで戻つといった男子生徒——山田アルベルトが承太郎との間合いを詰めた。

アルベルトは手の届く距離になると、拳を引き絞った。

承太郎はただただ冷静にアルベルトと龍園の行動を見つめている。

龍園は不敵な笑みを浮かべ、坂柳は荒事には耐性がないのか目を見開いた後目線を逸らした。

その間に限界まで溜めたアルベルトの拳が承太郎に向けて放たれる。

ぶんと布切れ音により空を切ったかの如く感じるほどのスピードで振り抜かれた拳は承太郎が避けることもなく、顔の横を通過した。「番長つつても、アルベルトの拳にびびって動けないようじゃたかが知れてるなあおい。赤猿をぶっ飛ばしたって噂はガセか？」

挑発のためか油断からか、顎を上げ両手をポケットに突っ込んだままの龍園が煽り立てる。

「前言撤回するぜ坂柳」

まさか自分の名前が呼ばれるとは思ってもみなかった坂柳は一瞬

反応に遅れるが、承太郎からの呼びかけに応える。

「ひとつ質問させてもらうが、さつきそいつが俺を害そうと拳を振るったってのは間違いないねえな？」

「そうですね。確かに拳を空条くんに向けていました」

「だ、そうだ。で、だ。てめえら、当てなきやあ暴行にならない……なんて勘違いはしてねえだろうな？」

「はっ、何を言い出すかと思えばてめえの情けなさを柵に上げて法にかこつけてポイントを掠めようってか？」

龍園はあたりを見渡す。

「第一、監視カメラのないこの場でどう証拠を上げるつもりだ？」

「応える必要はないぜ」

「随分と臆病な番長だな。ええ？ 未だ脚がすくんで動けねえってか？」

「疎む？ 違うな。殺気も込められてねえ、見え透いた拳を避ける必要がなかったただけだ。フェイントにもなりやしねえ」

承太郎はポケットから両手を出し、アルベルトに徐に近づく。

「オラッ！」

龍園やアルベルトが承太郎が腕を引いたように見えた次の瞬間にはアルベルトの眼前に殺気の込められた拳が伸びてきていた。

その迫力は拳を向けられていない坂柳が思わず後ずさるほどだ。

誰一人反応できない拳がアルベルトの眼前、ほんの数センチの所で止められる。

龍園の額に脂汗が滲み、殺気を向けられたアルベルトはその場に尻もちをついていた。

「クク……バケモンかよてめえ」

龍園は一瞬で理解した。

アレをモロに受けて意識を保つことのできる人間はそうはいない。そして、自分達はその少数ではないことを。

承太郎は龍園たちに背を向けると坂柳と自分の荷物を持ち再び寮へと歩き始めた。

「個としてのてめえの強さは理解した。だが、ここでのゲームじゃあ

支配者じゃねえてめえを墮とす方法はいくらでもある。覚悟しとけ」

「宣戦布告？ てめえこそ随分と評判と違つて律儀じゃあねえか」

「まあそういうこつた」

龍園の指摘は実に核心をついている。そのことを理解していない承太郎では無いが、現状維持以上のことをしようとは動いてはいない。

帰路についてしばらく――

「空条くんは何か格闘技をやっていたらしたんですか？」

「いいや」

「そう……ですか」

格闘技を習得せず、どのようにアレほどの戦闘力を身につけたのか聞かずとも理解してしまつた故の間。

それから間も無くして寮に着いた。

「ありがとうございます。よろしければお茶でも淹れますよ」

玄関前で荷物を受け取つた坂柳は、ペコリと頭を下げた。

「悪いが用がある」

「そうですか、それは残念です。では、お礼はまたの機会に」

↑To Be Continued

審議会編

7月1日 その①

S i d e 堀北鈴音

Cクラスの朝はいつも騒々しい。

依然として私には理解できないけれど、真面目とは程遠い人種が多いからだ。

赤点筆頭候補組の池くん山内くん、須藤くんをはじめとした男子の集団や、軽井沢さんを中心とした女子グループがいつも騒がしくはしゃいでいる。何を毎日話すことがあるのだろうかと疑問に思うところもあるけれど、聞いたところできつと私には理解できないだろう。

そんな彼女らだけけれど今日はいつにも増して騒々しい。それと緊張している気持ちを誰かと共有することで和らげているといたところでしょうね。

かくいう私も少し落ち着いてはいない。

というのも、空条くんの忠言により最小限の損失でやり過ごしていた毎月のプライベートポイントの振込が滞っているのだ。

6月は5月とポイントの変動はほとんどなかったものの問題なく1日の朝の段階で支給されていた。変動はないと言っても私たちのクラスの場合、維持できたことを喜ぶべきだと思うけれど。

私は学校から支給されている携帯電話を取り出すと、プリインストールされている学校のアプリを起動し、表示された画面に学籍番号とパスワードを入力しログインを行う。そしてメニューの1つである残高照会をもう一度行う。けれども、昨日の段階から残高は減ることもなければ増えているということもなかった。

入学式のあの日、空条くんが質問をするまでにこの学校のシステムに違和感を覚えた生徒がどれだけいたのだろう。花の高校生生活を謳歌しようと浮かれていた人、支給されるポイントに目が眩んでいた人、人間関係の形成に一喜一憂している人、本当にさまざま人がい

る中彼は茶柱先生の説明に一石を投じた。

おかげで思考を始めることができた生徒も多いと思う。恥ずかしい話だけれど、私だってその一人だ。

兄さんに追いつくことだけを考え、そのことで頭がいっぱいだったあの瞬間に私が彼の思考に到達することはなかったと思う。

中間試験にしてもそう。彼は試験の説明を聞いた日から、正攻法以外の手段を模索し結果見事クラスから落第者を出すことなく乗り切られることができた。

学力をつけることは決して無駄なことでない。けど、あのタイミングで彼が平田くんを通して過去問を配布していなかったら正直須藤くんをはじめ何人かの生徒は厳しいものがあつたのも事実。

彼がいなければこのクラスはポイントもクラスメイトも失つていたかもしれない。

そうなれば、ある種騒々しいが全体として明るいこのクラスも雰囲気は格段に重く悪い空気になっていたことでしょう。責任転嫁を繰り返し内部崩壊していく未来は容易に想像できる。

何よりも生活費が確保されていることが大きい。

お金で買えないものもあるとはいうけれど、衣食住が満たされてからの話であり、お金がないというのはそれだけで精神的負荷がかなり大きい。

授業を真面目に受けるだけで精神をすり減らしている彼らにはとても耐えられないと思う。

私が携帯電話を片付けたタイミングでホームルームを告げる鐘がなり、茶柱先生が入室してきた。

「おはよう諸君。どうした、いつにも増して落ち着かない様子だな」

「佐枝ちゃん先生！ 今月ポイント振り込まれてないんですけどー？」

「0ポイント支給されたとかってオチじゃないっすよね？」

「クラスポイントが0であればそういうことになる」

「え……」

声を1トーン落とした茶柱先生の言葉に教室が静まり返った。

「お、俺たちこの一ヶ月頑張ったし、中間テストだって乗り越えました

よ？　なのに0ポイントなんてこと……」

「勝手に結論を出すな。池、まずは話を聞け。確かにこの一ヶ月お前たちは生活態度を見直し、学習面でも結果を残している。そのことは学校側も適切に評価している」

諭すように言われた池くんが席に着く。

茶柱先生は毎月1日恒例の筒から1枚の用紙を取り出すと黒板に貼り出す。手際よく四隅を磁石で止めると各クラスのクラスポイントが明らかになる。

Aクラス……1004	<small>クラスポイント</small>	c 1
Bクラス……732	<small>クラスポイント</small>	c 1
Cクラス……708	<small>クラスポイント</small>	c 1
Dクラス……565	<small>クラスポイント</small>	c 1

目に飛び込んできたのは入学段階での持ち点1000c1をわずかにだけ超えているAクラスのクラスポイント。入学段階での振り分けの影響もあるのだろうか、こうしてみるとやはりAクラスは頭ひとつ抜けているように見える。

私はAクラスのc 1に驚きつつも全体に思考を戻す。一通り眺めて、どのクラスも100c 1近く増えていることに気づいた。

どのクラスも目立った問題を起こすことなく、生活しているということだけがはつきりとしたけれど、c 1が0でないのなら今月振り込まれていないのは一体なぜ？

「おぉー！　7万！　7万超えてるぞー！」

「うっし、これでバッシュ新調できるぜ」

池くんたちがはしやぎ出すと、茶柱先生は一つ咳払いして落ち着くよう促す。入学当初ならいざしらず、今の彼らはそれで自重するぐらいの常識は身につけているため浮いていた腰を下ろした。

「どのクラスもポイントを増やしていることから理解しているものもあるだろうが、今回の増加は中間テストを乗り切った一年へのご褒美のようなものだ。各クラスに100ポイントが追加されている」

先月から綺麗に100ポイントが増加しているわけではない。

逆に言えば、加算された100をそのまま維持できたクラスはないということ。

まだどのクラスも一枚岩ではない……ということだといいのだけれどね。

「さて、お前たちはポイントが振り込まれていないことに戸惑っていたんだっとな」

「そ、そうっすよ佐枝ちゃん先生。0ポイントじゃないのになんで振り込まれてないんすか？」

「今回、少しトラブルがあつてな。1年生のポイント支給が遅れている。お前たちには悪いがもうしばらく待ってくれ」

「えーまじすか。学校側の不備なんだから、なんかオマケとかないんすか？」

口から先に生まれてきたのかと思う池くんだけけど、クラスメイトが聞きたいことを大きな声で聞いてくれることも多い。そういう面では役に立つと言つてもいいわね。

「そう責めるな。学校の判断だ、私にはどうすることもできん。トラブルが解消され次第ポイントは支給されるはずだ。なに、ポイントの支給額が減るわけでもない。気長に待つことだ」

毎回この先生は気になることを最後に吐き捨てて教室をさつていく。困ったものね。

お昼になると、いつものように友人関係に四苦八苦していた綾小路くんが行き場を失って声をかけてきた。もう諦めればいいものは友達という存在にこだわりがあるらしい。

私が手作りのお弁当を開くとなんだかんだと話しかけてきたので適当に返事をしておく。

これもいつもの流れ。

私はこれといって何かを成すわけでもなく空条くんや平田くんた

ちが作った大きな流れの中で、日々を過ごしている。

目の前で友達に置いていかれ、呆然と立ち尽くす綾小路くんに比べればクラスへの貢献度は高いと思うけれどそれでも私の納得のいくようなものではない。Dに配属されたことを抗議しに行っていた私だが、兄さんに叱られたように私は何一つ成長できていないのだろうか。

運動も勉強も人並み以上に努力し、成果を残している。

それで、兄さんに近づけるだなんて今はもう考えてはいない。

今、私は何をしていくべきなのか。

そんな命題について考えているうちに放課後を迎えた。

「須藤。お前に少し話がある、職員室まで来てもらおうか」

授業の疲れをほぐそうと両手を天井に向け伸ばして唸っていた須藤くんを呼ぶのは茶柱先生だ。

「まあ、そっだよな」

心当たりでもあるのか須藤くんは鞆を手にするると即座に立ち上がった。

「空条、お前もだ」

また空条くん……

私だけが知らないのか、誰も知らないのかわからないけれどまた何か行動しているのね。

平田くんや幸村くんも頭上に疑問符を浮かべて茶柱先生についていく二人を見送っている。どうやら後者らしいわ。

「大方、今朝話していたトラブルというやつなんでしょうね」

思わず独り言をこぼすと、自称隣人の事なかれ主義者がそれを拾った。

「だろうな」

「……別にあなたに言ったつもりはないのだけれど」

「……そうか」

「まあいいわ、あなたは今回の件どう思う？」

「ポイントの振込みが保留になったことか？」

「二人が連れていかれた件も含めてね」

「単純に考えたら、あの二人が関わるなんらかかのトラブルによってポイントの支給が遅れてる。となると思うが？」

「そうね。先生の言葉的に重大案件ということでもなさそうだけれど、あなた何も知らないの？」

「知らないな」

「はあ……」

「おい、こつちを見てため息をつくな。傷つくだろ」

「そんな繊細な心の持ち主なら、とうに友人関係を諦めているでしょうっ。」

「おまえな……」

↓↓

「この後生徒会室に入った後、加害、被害両サイドの関係者と担任。それから裁判官の代わりでもある進行役の生徒会役員での案件についての事実確認等が行われることになる。何か質問はあるか」

職員室前で茶柱が今後の流れを承太郎と須藤に説明していた。

「例のアレらは俺のタイミングで出せるんだな？」

「ああ、事前の提出は必要なものの今回の件に限らず、会議では生徒たちの主体性や自主性が優先されている。それも実力のうちというこ

とだ」

「俺は打合せ通りでいいんだよな？」

若干緊張気味の須藤は、気まずそうに承太郎に尋ねる。

「ああ、それで問題ねえぜ」

「ちよつと癪だけだよ、空条の話もわかるし今回は乗るぜ」

茶柱は二人を一瞥する。

「他に話はないようだな、では向かうとしよう」

職員室のある1階フロアから階段を3つ上がった4階。

教室の入り口には「生徒会室」のネームプレートが刺さっている。

茶柱先生は生徒会室の扉をノックした後、その中へと足を踏み入れた。承太郎たちもそれに続く。

生徒会室の中には長机が配置されており、ぐるりと長方形を作っている。

今回相手取るDクラスの面々とその担任、坂上先生はすでに着席していた。

「遅くなりました」

「まだ予定時刻にはなっていません、お気になさらず」

担任同士、短い挨拶を終えると両者間に立つように待っていた二人の生徒会役員が席についた。先ほどから眼鏡をかけた男子生徒の方の視線が承太郎を監視し続けているが承太郎は意に介することなく席についた。

「それではこれより、1年Cクラス須藤くんに対する重大事案——いじめ案件に関する確認を生徒会及び事件の関係者、担任の先生方を交え審議をとりおこないと思います。進行は、生徒会書記、橘が務めます。見届け人として生徒会長堀北が同席します。よろしく願います」

7月1日 その②

——数日前 side Dクラス

「小宮、近藤ツラかせ」

放課後を告げるチャイムが鳴り響き、授業という名の抑圧から解放された生徒たちが思い思いに行動を起こし始める中、暴君龍園に名指しされた二人は借りてきた猫のように小さく返事して付き従う。

この二人はバスケット部に所属しているため練習があるにもかかわらずだ。

その様は、Dクラスにおいて龍園がどのような立ち位置にいるのかを物語っていた。

龍園に追隨するのは小宮近藤だけでなく、常に付き従っている山田アルベルトと石崎大地、さらに今回は追加で呼ばれた紅一点、伊吹滯の姿もあった。

一向は目的地に到着すると龍園を中心に据えてソファアに腰を下ろす。

部屋の外からはポップな曲調の流行りのサウンドがこれでもかと言わんばかりの音量で鳴り響き、壁に触れれば大型のコンポから放たれる隣の部屋の音の振動がドンドンと伝わってくる。

そう、カラオケだ。

大所帯で訪れた一行の部屋は賑わう数々の部屋に反し、物音一つしない。部屋に入るや否やアルベルトがBGM等を操作する摘みで音を絞ったのだ。

「二ヶ月、Cを中心に監視を続けてきたわけだが1つ行動を起こすことにした」

石崎が鳴らした喉の音が響く。

「今回はCを叩く」

「叩くってどうすんのよ」

「クク、焦るなよ伊吹。ゆっくり説明してやるよ」

「あっそ」

青がかつた黒髪ショートの伊吹は、物おじすることなく発言していた。

「アルベルトは身を持って知っていることだが、Cの空条は確かにバケモンだ」

アルベルトは静かに頷く。

「他にも粒はいるが、基本は最底辺に配属された雑魚の集まり。学力も身体能力も社会性も欠く奴らが多いことは調べがついてる」

誰が何を言っているのだと言わんばかりに伊吹が鼻で笑うと、龍園が睨みつけ取り巻きは冷や汗を流す。

「どうやら伊吹は龍園に服従しているというわけではないようだ。」

「クラスとして見たときに、Cはたいしたことねえ」

実際、Cクラス以外の各クラスは形こそ違えど明確なリーダーを据え、その生徒を中心にクラスを運営していた。このDクラスでは暴力という形で龍園が制圧している。

「龍園さん結局誰を狙うんすか」

「チツ、黙ってるカス。お前はなんのために一ヶ月偵察してやがったんだ」

「す、すみません」

叱責された石崎は一般的に見てガタイが良い部類だ。入学初期には敗れたものの龍園やアルベルトとも拳を交えている。そんな彼がいまは小さく見えるほど体をこわばらせていた。

「須藤をやる。どんな手を使ってもいいとにかくあいつに殴られろ」

「は？ この監視カメラだらけの学校でどうやってそんなことするのよ。煽って殴られても大した罪になんないどころか逆にこつちがペナルティーくらうんじゃないの？」

「伊吹、石崎に比べりゃ幾分かマシだがお前もいちいち割り込んでくるんじゃない、ぶつ飛ばすぞ」

龍園の制止に悪びれる様子もなく舌打ちをすると、伊吹は組んでいた脚を組み替えてそっぽを向いた。

「小宮、近藤。てめえらで須藤を特別棟に呼び出せ」

「特別棟……ですか？ どうしてあんな何もないところに」

「わかってんじやねえか、あそこには何も無い。階によるが監視カメラもな」

「それマジ？」

「てめえらがくつちやねしてる間に行動してる奴がいるってだけだ。特別等の、そうだな4階に奴を呼び出せ。適当ないちやもんでもつけてな」

実行を命じられた二人の血色はすぐれないが首を縦に振った。

「石崎、てめえもだ。4階で待機しとけ」

「俺もつすか？」

「荒事はお前が担当だ。やり方は任せるがとにかく煽ってボコられる。派手であれば派手であるほど良い」

「う、うっす」

「決行は明日の放課後だ。やられ具合が足りなくてもあざぐらい増やしてやるから安心してヤレよ？」

実行部隊は引き攣った歪な笑みを浮かべた。

「で、それでなんのメリットがあるわけ？ 暴力事件ってゆっても停学とか退学とかにしかないんじゃないの？」

「おい伊吹、俺はセンコーじゃねえ。聞いたら全部解決するなんて義務教育の代表みてーなことしてんじやねえぞ」

「リスク背負って実行するんだからそれぐらい聞いても良いでしょ」

「お前がやるわけじゃねえだろうが」

「チツ……話は済んだでしょ、あたしもう帰るから」

支払いをしなかった伊吹は一抜けと帰宅する。その後解散となり、石崎が立て替えたことを伊吹は知らない。



——決行当日

「あぢい……」

特別棟の4階、部活でも使用されることのない使用頻度が限りなく低いこの校舎は監視カメラもなければ、本校舎にあるような空調設備も一つもない。

6月も終わりに差し掛かり、夏が顔どころか肩下ほどまで出てきている今日この頃。特別棟は言うまでもなくうだるような暑さ、それも風通しの悪い居心地最悪な蒸し暑さのなか龍園に待機を命じられた石崎を襲っていた。

シャツの端をつまみ、パタパタとはためかせ服の中の汗ばんだ空気を入れ替える。温度は変わらないが風が起こる分多少はマシに感じる。

もうしばらくすれば、小宮と近藤が須藤を連れてやってくる手筈だ。

二人は1年生にしてレギュラーを獲得しそうな須藤にその件でいちやもんをつけて呼び出すと話していたが、大丈夫だろうかとため息を漏らす。

普段から小競り合うことも多いらしいが、ここに連れてきてもらわねば龍園に殺されかけるのは自分も同じだ。

暑さと不安だけでなく恐怖のトリプルパンチを受けながら、念の為に周りに人がいないことを確認すると、階段に腰を落として待った。

「しっかし、ほんと龍園さんは色々やってるよな」

もとは、単純な暴力に屈して服従した関係だが、仮に喧嘩に勝って自分が上に立っていたとしてクラスをまとめてこの学校の仕組みを探りながら他クラスと戦っていくことができただろうか。

石崎は想像するまでもなく首を横に振った。

龍園は腕が立つだけではない。

やり方はともかくとして、思考を巡らせ行動を起こす力。そしてなによりも、執念深さ。Cクラスだったあの頃、クラスをまとめようと動いていた頃の龍園を見てついでいくと心に決めた。

今回も実験の一環で、クラスにどんな影響があるのかは自分にはわからない。けれども、任務は遂行しよう。その決心を持ってこの場に来たことを再確認するとバラバラと階段を登ってくる音が聞こえ始める。

「きたか」

腰を上げ階段からほんの少しだけ歩いたところにある踊り場に出る。

「だれだてめえ」

赤髪のバスケットマン須藤は石崎を見るなり啖呵を切った。どうやら既にかなり苛立っているらしい。

「別に誰でも良いだろ」

「こいつらまで使って呼び出しといて挨拶もなしってか?」

「何勘違いしてんだよ、馬鹿かお前。話があるのは小宮たちだっつての、はっ、すまねえ元Dクラスは学校から不良品の烙印を押されたカスばっかって話だったな」

一瞬で頭に血を昇らせた須藤の顔に怒筋が浮かび上がり、拳を力ませる。

本題に入る前にキレさせられるかもしれない、あと一押しだ。石崎は畳み掛ける。

「空条ってやつも可哀想だよな、本人がどんだけ優秀でもお前みたいな馬鹿がいるだけで足引っ張れてCクラスどまりだもんなあ!」

「……………」
成功を確信した石崎。

だが、予想に反して須藤は拳を震わせつつも唇の端を噛んで耐えていた。

「……………話ってなんだよ」

なぜか少し冷静さを取り戻した須藤の態度に困惑する石崎だが、それを悟られるわけにはいかない。焦る気持ちを内面に押しとどめ、嫌味な笑みを浮かべる。

「この2人がよ、お前が普段からバスケがちよつと上手いってだけで威張ってくるのが迷惑だつて相談してきたんだよ」

「ああ？　なんだよそれ、そんなの勝手な被害妄想じゃねえか！　俺の知ったことじゃないぜ！」

「そういう態度だろ？　必死に努力してる小宮たちを見下して悦にいつてんだろ!?」

「はあ？　意味わかんねえよ。さして努力もしてねえそいつらが勝手に僻んでそう思ってるだけだろうが。んなことで練習時間割いてまで呼び出したのかよ」

「お、俺たちだつて必死に練習している！」

「知らねーよんなこと。俺の邪魔すんじゃねえ」

須藤の主観では完全なとぼちりであった。かなりの苛立ちを覚えてはいるものの己のプライドを貶されるような話ではないと言いつて聞かせて冷静に努めようと試みている。

「付き合つてられっかよ、もう帰るぜ」

須藤の様子に焦るDクラスの面々。

失敗すれば自分達がどんな目に遭うか想像もしたくない。単純な煽りが効かなかった場合のためある程度煽る手段を話し合っていたこと実行に移す。

「だいたい、言うほどお前バスケット上手いのかよ」

「ああ？　んだと？」

「1年生でレギュラー？　2年3年がよっぽど下手なだけでお前も大したことないじゃねえのかよ？」

「てめえ」

「それとも、顧問に金払ってレギュラーの枠を買ったとかか？　はは、

笑えるぜ」

怒筋が再び須藤の額に浮かび始めた。

石崎が小宮に視線を送ると、カバンから一束のバツシユを取り出し石崎に手渡した。

「んでてめーが俺のバツシユ持つてんだ小宮ッ！」

「そんなに欲しけりゃくれてやる」

石崎は須藤の顔面目掛けてバツシユを投げつける。

須藤は避けようともせず、靴とはいえそこはかなり硬いバツシユを顔面に受けた。

鈍い音と共に床に落ちるバツシユ。当たりどころが悪かったのか須藤の口の端が切れ血が流れている。

須藤が床に落ちたバツシユに目をやると、見るも無惨に靴紐が切られている。

自分の素行のことなら辛うじて堪えることはできた。しかし、真摯に向き合っているバスケに対しての数々の侮辱に対し須藤の中で何かが切れる音がした。

「おい、なんだよ拳握りしめて。まさか、殴るつもりか？ はっ、良いぜやってみろよ」

かかった。勝った。そう確信して石崎がダメ押しの一言を言い放つ。

須藤は無言で拳を振り上げた。

その目にはニヤリと笑う3人の表情は映っていない。

「待ちなッ！」

須藤が拳を振り下ろすよりも早く、喧騒渦巻く教室ですら一瞬にして沈黙をもたらした凄まじい声量の一言が特別棟の廊下の端から端まで反響し伝わってゆく。

そんな声を自分達が上がってきた階段から聞こえてきた4人は驚愕の表情を浮かべながら、視線を向ける。

そこに立っていたのはもちろん、承太郎だ。

須藤はこの場に承太郎がいるという純粹な驚きから、Dクラスの3人は計画の失敗をほぼ最悪の形で悟ってしまったことで啞然とした

様子で承太郎を見て固まっている。

「随分と須藤を可愛がってくれたようだな」

「く、空条！ どうしてお前がここに!?」

「どうして？ それはこっちのセリフだぜ。Dクラスの3人が寄ってたかって須藤に一体何をしているんだ？」

「そ、そんなことお前には関係ない……だろ」

食ってかかった石崎だったが、計画の失敗と承太郎の迫力に気圧されて尻すぼみだ。

「失せなッ！」

承太郎が一括すると怯えた3人は尻尾を巻いて逃げていった。

「空条……なんでここに」

3人がさったあと、須藤はバツが悪そうに尋ねた。

「絡まれているためーを見つけて跡をつけた」

「……そうか」

須藤は自分の様子を見て先ほどのような事態になることを想定されていたのだなど、怒りを通り越して自己嫌悪する。

何かしでかす。その点を信用されていたのだと。

「先に1つ言っておく。よくあそこまで耐えたじゃあねえか。最初に煽られた段階で手を出すんじゃないで俺を妬んでふっかけてきやがった」

俯きがちだった須藤が耳を疑うように顔を上げた。

「須藤、今回の原因はなんだ？」

「あいつらが大した努力もしないで俺を妬んでふっかけてきやがったんだよ」

「やれやれだぜ」

承太郎は須藤の返答に深くため息をつく。

「なぜお前が狙われた。偶然？ いいや違うね『Cクラスで最も崩しやすい生徒』あいつらがそう判断したから近づいてきた。そしてまんまと罠にかかったと言うわけだ」

思い当たる節がある須藤は、何も言えなかった。

「だが、てめえが真摯に向き合っているバスケを貶されたんだ、手を出す気持ちは痛いほどわかる。俺とて場合によってはぶちのめしてい

ただろうよ」

承太郎は須藤をまつすぐ見据えた。

「とはいえ、てめえがバスケに本当に真摯に向き合っているのなら手を出した後を考えるべきだ。あそこで手を出しては奴らの思うツボだぜ。奴らの狙いはなんだ？」

「狙いつつわれても……」

「可能性はいくつかあるが、停学及び退学。ポイントの支払い……どれも結果的にてめえから部活を奪うものになっただろう」

「……たしかに……そう、だよな。キレてそんなこと考えられてなかったぜ」

「バスケに明るいわけじゃあねえが、スポーツ全般安い挑発に乗る選手に未来はねえ」

「それは……」

どれだけの技術が高かろうがファールやら反則を取られてしまつては勝負のフィールドに立つことすら許されない。

「何度も言うようにクドイが本当に護りたいモノが何か、考えるんだな」

その後もお説教をされた須藤は精神を大きく削られたものの、承太郎の話に納得してしまつたが故に複雑な心境であつた。

何よりも空条の話を大人しく聞いている自分に驚いたことは生涯誰にも語らないだろう。

「さて、須藤。いろいろ話したが俺は売られた喧嘩はきつちりと買う。やられたままなんてことはこの俺のプライドが許さねえぜ、しっかりとお礼しねえとなあ」

「……お前、さっきまでの話と……」

「場所を変える。行くぞ」

承太郎は携帯を取り出し須藤の顔とバツシユを撮影して、歩き出した。

「お、おい、なんだよいきなり！」

「ちよ、待てよ」

いきなり近距離で顔写真を撮られた須藤が若干照れながら抗議す

るのを無視して承太郎は歩いていく。そしてどこかに電話をかけた。

『これはこれは空条氏。間に合ったでござったか?』

応答したのはCクラスの博士こと外村だ。

「ああ、助かったぜ」

『ほほう、それは何よりでござる。報酬を期待しても?』

「搾れるだけ搾ってみるぜ」

『オーキードーキー。ではでは、サラダバー』

承太郎は須藤に一つ嘘をついていた。

それは、偶然見つけて跡をつけていたということだ。

承太郎は外村から携帯端末のフレンドGPS機能を聞いた段階から発想し、プログラミングができることを聞いて依頼をしていた。特定の間が承太郎が敷地内を歩き回って作成した監視カメラのない危険エリアに入った際に自動でメールを送信し危険を通知するというものだ。

特定の人間に該当しているのは三馬鹿と軽井沢などだ。

そしてこの特別棟は危険エリアに該当しており須藤が入った段階で外村の自作PCから携帯にメールが送られてきていた。まだ校舎に残っていた承太郎は現場に急行したのだった。

——そして承太郎の自室。

「須藤、お前には少し酷だがいじめに遭ってもらおう」

「は? どういうことだよ……ま、まさかボコ……」

須藤は承太郎に殴られる未来を想像してゾツと言葉を失った。

「今回のことをいじめとして学校側に訴える」

「あんなんでいじめになんねーだろ?」

須藤の認識では殴り合いにこそ発展しなかったがただの喧嘩だ。

「それはお前次第だ須藤。お前が心身に苦痛を感じているかいないか、それが全てだ。そして、今後心身に苦痛を感じていることを表明する。それがお前の役割だ。協力してもらおうぜ?」

「……俺もあいつらにはムカついてるし協力するってのは良いんだけどよ……ほんとにそんなことだけでやり返せんのかよ」
「リターンは未知数だが、必ずダメージは与えられる。ここは『学校』だからな」

その後打ち合わせをし、二人は決戦を迎えた。

↑T o B e C o n t i n u e d

7月1日 その③

「失敗しただと?」

バブル時代のクラブを彷彿とさせる派手な作りのカラオケボックスで計画決行の報告を受けた龍園は眉を顰めた。前回よりも集まっているメンバーは多い。生徒たちの視線が3人に刺さっていた。

「ち、違うんです——「俺は言い訳が聞きたいんじゃないやねえぞ石崎。お前から、一発ぐらいは殴られたんだろ?」」

東京のチンピラが要求してくるような直角に腰を曲げ頭を下げている3人は重くなる雰囲気冷や汗、いや脂汗を流した。

「そ、それは」

「す、すみません。殴られてないです」

小宮が言い淀むと即座に石崎が謝罪する。

龍園は舌打ちすると顎をしゃくる。すると、いつものようにサングラスをかけた後ろで手を組んでいた近衛兵アルベルトが前に出る。

「Bad boys」

「おい、顔はやめとけよ? 目立つからな」

頭を下げたままの3人はこれから起こる事柄を察し目を閉じて歯を食いしばる。それでも悶絶するような衝撃を腹部に受け一瞬体を浮かせたかと思えば、地面に倒れ込んだ。

「あ、ありがとうございます」

「ねえ、監視カメラなかったなら殴られたことぐらい偽装できるんじゃないの?」

「クク、伊吹、お前を送るべきだったのかもな。だがそれはもうできねえ」

「どうしてよ……ってあんたが答えるわけないわね」

「いいや? 今日特別に教えてやるよ。状況によっては特別棟内で身内で殴り合っているりや偽装もできた。が、この間抜けどもは無傷の顔を晒してノコノココこまで逃げてきたわけだ。証拠で監視カメラの映像でも出されてみる、虚偽申告をしたって一発カウンターK Oモンになりかねねえ」

「なるほどね」

「てめえらの言い訳になんぞ毛程も興味はねえが、今後のためだ。何があったかありのままを経験したまま話せ」

石崎たちは恐る恐ることの経緯を龍園に報告した。

説明を終えるとすつかりと場は静まり返っていた。そこに、龍園の陰湿な笑い声がこだまする。

「偶然見つけてつけてきたか？ ククク、いいや、あのデカブツ、クラスメイトを監視してやがったのか？ 宣戦布告からずつと？ そんな非効率なことは流石にしちやいねえだろうが……ククク、ハハハハハハハツ、最高だぜ空条承太郎」

「そんなタイミングよく……ありえないでしょ。漫画じゃあるまいし。あんたたちつけられてたんじゃないの？」

「少なくとも俺が4階で待っていた時はいなかったし、須藤を呼び出してからも物音ひとつしなかった！ 本当です龍園さん！ あの野郎いつの間にか後ろにいて……す、須藤も固まってたからあいつが呼んだってこともないと思うんですけど」

伊吹に過失を追求され、焦って食い気味に弁明する。

「一番可能性が高いのはソレだ。が、大前提として部活もしてねえ空条が体育館周辺にいるなんてことがあるか？ ケヤキモールに行くたって逆サイドだ」

「じゃああんたの言う通りクラスメイト使って監視させてたとか？」

「さあな、これは考えても仕方ねえ。結果、空条に止められた。重要なのはそれだけだ」

「まあ、そうね」

「にしても伊吹、普段愛想ねえお前が空条の話題になるとやたら口を挟んでくるな。惚れてんのか？」

「は？ バカも休み休み言つて。アルベルトが寸止めで怖気付いたつてのに興味あるだけ」

「クク、そりゃ残念。ハニートラップでも試そうかと思っただがな」

伊吹がハニートラップを仕掛ける姿を想像してクスリと笑った石崎の腹に伊吹の手加減の全くない強烈な蹴りが刺さり、地面をのたう

ち回る。

内心笑いかけていた小宮たちは石崎という尊い犠牲のおかげで真一文字に口をつぐんだ。

「おい、いつまで腹押さえてやがる。空条にはどこまで知られてんだ」「すみません。わかりません……急に止めに入ってきたんで終始監視されてたつてことはないと思うんですけど」

「だからバカなんだよお前は」

石崎はアルベルトからもう一発ありがたい右ストレートを受ける。

「あの階段を駆け上がってきたら、ソレもあの巨体が走ってきたら普通は足音の反響音で気づくだろう。ソレがなかったんなら最初から見られている可能性を考慮しやがれ」

「す、すみません」

「おい、石崎と小宮をもう2、3発やつとけ。それから、今回の件学校側に何か聞かれたら下手に言い訳せず認めとけ」

アルベルトに言い残すと龍園は退室した。

「ちっ……バツシユがネックだな……いや、ソレ以前の問題か。ククク、今回はしてやられたつてわけだ」

龍園は己の詰め甘さを痛感しながら、実行に至るまでの反省を行う。

「だがな、勝者つてのは最後に立ってる奴のことを言うんだぜ」

己の信念を呟いた龍園の瞳は到底敗北者とは思えないほどギラついている。

そしてそのまま喧騒の中へと消えていった。

キングクリムゾンッ！



——7月1日 生徒会室

「それではこれより、1年Cクラス須藤くんに対するいじめ——重大事案に関する事実確認を生徒会及び事件の関係者、担任の先生方を交え審議をとりおこないたいと思います。進行は、生徒会書記、橘が務めます。見届け人として生徒会長堀北が同席します。よろしくお願ひします」

お団子頭が特徴的な小柄な女子生徒、橘が見通しを伝え審議内容を確認していく。

「訴えは1年Cクラス、須藤くんからです。同じバスケット部に所属されている1年Dクラス小宮くん、近藤くんに練習前に話があると呼び出され、特別棟の4階に向かいそこで同じくDクラス所属の石崎くんが待っていた。ここまでで双方異議はありますか?」

関係する生徒たちが首を横に振り、進行を促す。

「次に、須藤くんに対して石崎くんから『バカ』など罵りクラス配置のことや部活動のことに関し彼の名誉や人権を犯す発言を行い、須藤くんのバツシユを顔面に投げつけ怪我を負わせた。この点はいかがですか?」

「間違いねえぜ。ご丁寧に靴紐まで切ってあったしよ」

席に腰を下ろしたまま、須藤は冷静に答える。

Dクラスの生徒も異議を申し立てることはなかった。

そんな中1人の男が挙手し、名を呼ばれてから発言した。

「いかがしましたか坂上先生」

「随分と曖昧な表現でしたが、彼らの発言について照らし合わせる必要はあるでしょう。生徒たちも反省はしている様子、本当に重大事案に該当するのかそれを確かめる必要があるのではないですか？」

自分のクラスを擁護するような発言だが、証拠が無ければ相手方の要求を鵜呑みにすることも無い。

「おいおいおいおい、坂上センサー。あんた、何か？ 聖職者たる教師でありながら重大事案——いじめの範囲って奴すら知らねえとでも言う気か？」

「な、なんだね君、それが教師に対する口の聞き方かね。大体、発言も許可——」そいつらの発言がどうであれ須藤の心は深く傷つき、怪我まで負わされている。これがいじめでなくなんになるんだって？
ええ!!?」

「な……大体彼の素行は日頃から目に余るものがあるそうじゃないか」

「全く……やれやれだぜ。いじめは誰にでも起こりうる問題、確かそれが教師の基本認識のはずなんだがな。おかしな話だぜ」

「空条、そこまでだ。次に許可なく発言した場合は退席してもらおう。坂上先生、本件は看過することのできない重大案件である事はCクラスから提出された音声データおよび現場写真からも明らかです。速やかに事実確認を終え、然るべき処理を行います」

理詰めしていく承太郎に堀北生徒会長が待ったをかけた。

証拠の提出があったとは露知らず地雷を踏み抜いた坂上先生は窮地を脱したと胸を撫で下ろした。

「そ、そうでしたか。これは失礼した」

これでCクラスサイドの訴えは認められることが確定し、状況の細かい把握へと段階が移る。

ちなみに音声データとは承太郎が携帯で録音していたものだ。

「石崎くんはバスケット部ではありませんね。直接須藤くんと関わることもなかったと聞き及んでいます、なぜ現場に立ち会っていたので

しょうか」

「お——私は、バスケット部の2人が須藤くんから試合中にパスを回してもらえなかったり、高圧的な態度を取られていると相談され、自分達からは言い出しにくいからと代弁を頼まれていました。そして、日頃の仕返しをと考えていた2人の意を汲んであのような言動をとつてしまいました。今は行き過ぎていたと反省しています」

「Dクラスのお2人もこの内容に間違いはありませんか」

「ありません」

「では、次に須藤くんにお聞きします。試合や態度について触れられていましたが、そのことについて何かありますか？」

「試合はあい——小宮たちがいる位置がわる——いる所じやカットされると思つて出してなかつただ——です。態度は、いつも小言言われてムカついていたのは事実——です」

身の丈に合わない、辿々しい敬語（笑）を使い言葉を紡ぐ須藤。

その様子を池や山内が見ればおそらく笑つていただろうが、何とか場に相応しくあろうとする彼を笑うものはこの場にはいない。

「分かりました。次はトレーニングシューズについてですが——」

その後も今回の一件に関することを事細かに確認していく橘。その多くは両者共に認めており、Dクラスの面々は隙あらば反省しているという旨を述べている。

話を聞き終わると橘書記と堀北生徒会長がしばらく決議について話し合う時間を設けた。

今回は示談にならなかつたため、学校のルールに基づいた対応がなされるとの事だ。

「お待たせ致しました。それでは、審議の結果を言い渡したいと思ひます」

一同がごくりと喉を鳴らすなか、承太郎だけはいつもの彫刻顔だ。「本件は重大事案に該当すると認めます。また、呼び出しを行う、無断で所有物を持ち出し破損させ使用するなど計画的な面が見られ悪質な行為であることを鑑み、加害側であるDクラスに対して50クラスポイントをCクラスへ譲渡、及び名誉毀損、傷害に該当する行為を

行った石崎くんに1ヶ月。器物損壊に該当する行為を行った小宮くんに対し3週間、近藤くんは2週間の停学処分を行います。また、Dクラス3名のプライベートポイントの没収及び監督不行き届き等で学校から須藤くんに対し30万プライベートポイントの賠償を行います。また、個人情報保護の観点から本審議会の内容を口外することは固く禁じます。以上です」

言い渡される判決に苦渋に満ちた表情をする石崎たち。それに対して坂上先生はというと、妥当な制裁と受け止めたのか静かに目を閉じていた。

学校のルールに則った対応という以上、今までにもこの手の判決を見聞きしてきているのだろう。

仮に異議があれば先ほどのように申し立てているはずだ。

それを行わないということが、生徒たちにもこれが妥当な判決なのだということを物語っていた。

審議会終了後の廊下。明らかにテンションの高い須藤と平常運転の承太郎、そしてやや微笑んでいるように見える茶柱先生がいた。

「よくやった空条、これでお前たちは今月からBクラスに昇格することになるだろう」

「よくやった？ 俺はアンタに褒められるためにやっているわけじゃあないぜ。アンタはアンタの仕事をきっちりやすることに専念しな」
依然として茶柱先生を信用していない承太郎は一蹴して帰路に着く。

「にしてもよ、マジでこんな結果になるなんて思ってたぜ！
な！ おい！」

勝手に隣を歩く須藤は判決に面食らっていたものの現実に戻ってからかなり賑やかで到底心身に傷を負っている生徒には見えない。

「この際だからもう一度言わせてもらう。お前の弱点は短気さ。そして今わかった『すぐに調子に乗る所』だ。せいぜい努力して克服するんだな」

「お、おう……」

「やれやれだぜ」

どこまでも冷静な承太郎に圧倒された須藤は、足を止めるがすぐに我に帰ると追いかける。

「待て、空条」

生徒会室の方向から聞こえてきた、声の主は承太郎の渋さから学生とは思えない声に對し、重低音とも言えるだろう声質から学生とは思えない凄みを放つメガネの生徒。生徒会長堀北学だ。

当然聞き覚えのある声に二人は足を止める。

「須藤だったな、悪いが君は席を外してくれ」

承太郎に視線を送った須藤は、頷きを返されたため渋々先に部活へ向かうことにした。

「ほんと助かったぜ空条」

澆刺とした笑みを浮かべ去っていった。

「今回の審議会、一部の隙もなかったように思う。事前の見通し、証拠集めから切り返し、見事だ。Dクラスが素直に認めたことで手札を切るタイミングは失ったようだがな」

実際、最高のケースとして承太郎が考えていた作戦は石崎たちが暴言や傷害を否認したタイミングで証拠を突き出し絞れる額を限界まで引き上げるといふ作戦だったが、龍園がただのバトルジャンキーではないことが今回の一件で理解できたことを手土産にすることにしていた。

「用がねえなら帰らせてもらうぜ」

「生徒会に來い。空条承太郎」

生徒会長が力強く言い放ったタイミングで、書記の橘が生徒会室から出て来て目を見開いている。想定外だったようだ。

緊張感のある間が一瞬、場を制圧するが承太郎の一言であつという間に霧散する。

「断る」

「なぜだ？」

「俺は運営側に回るつもりはこれっぽっちもねえ。それだけだ」

「ええ!??断るんですか!??会長直々にスカウトなんて初めてののこと何ですよ!??」

「——そうか。生徒会はいつでも門を開いている。覚えておいてくれ」

状況について行けていない橘書記を残し、二人は背を向け歩き出したのだった。

↑T o B e C o n t i n u e d

協力者 その①

協力者たち その①

— Side 松下千秋

7月2日。

まだまだ暑くなるはずの夏の大本命、8月を控えているにも関わらずエアコンをつけないと寝苦しいどころか命の危険があるほどに暑い今日この頃。全寮制のこの学校が光熱費や電気代を支払ってくれていることに感謝して私は夜通しエアコンを稼働させている。

空調関係は電気代もバカにならないと聞いたことがある、少なくともはいえ、決して潤沢ともいえない月々の支給ポイントを電気代に費やすととなるとかなりの痛手だと思う。

私たち生徒からしてみれば感謝しかない話だが、学校側としても生徒が空調を使えなくて自室で熱中症で倒れました、なんてことになったら困るのだろう。win-winの関係ということなのかもしれない。

「んん〜」

私はベッドから身体を起こすと両手を組んで思いつきりに伸びをする。

そのまま、洗面所で顔を洗い歯を磨いて朝食の準備を始める。といつても、トースターに食パンをセットするだけだけど。

本当に贅沢さえしななければ、現状不自由することは何もない。

退学のリスクが隣り合わせの普通よりも厳しい学校かもしれないけれど、その他の待遇も普通の学校とは一線を画している。

その最たるものの1つのクラスの評価に応じて支給されるプライベートポイント。

4月の入学と同時に10万円分のポイントを支給され、毎月1日に同額支払われるとのミスリードにクラス中が騙され、私自身引つかかっていた。

クラスの様子から想像するに、空条くんがいなかったらどうなっていたのか想像もしたくない。

空条承太郎くん。

櫛田さんのように誰に対してもフレンドリーに接しているわけでもなければ、平田くんのような気配りや気遣いができる人ではないのかもしれないが注目度No. 1の生徒だ。

体格もいいし、顔も整ってるけどぱつと見は須藤くんや龍園くんを超えるヤンキーでしかない彼だけど、間違いなく1年Cクラスの中心人物だ。

それを支えるのがこの学校のシステムで表したところの実力の凄さだ。

学校のシステムに早々に感づいて行動に移す思考力と観察力。もつとわかりやすいテストではクラス同率トップの学力と、圧倒的な身体能力の高さ。まだあるとは思うけど、クラスの男子でいや、今まで出会った人間でこれだけ秀でた存在は彼以外にいないと断言できるほど人間離れたまさに超人だと思う。

男子にはいえないが女子が掲示板を悪用して作った数々の好印象なランキングで空条くんは上位にランクインしている。もちろん、いくつかのランキングでは1位輝いてる。ネガティブ——といつても怖そうとか、不良っぽいとかのランキングでも首位なのは口が裂けても言えないことだよな。

他人からの評価なんて気にしていなさそうだけど。

インスタントコーヒーの封を切り、電気ポットで温度を保たれていたらお湯を注ぐと鼻腔を香ばしい香りがくすぐる。

チーンと焼き上がりを告げたトーストを取り出し、サクツとこんがりとした焼け目をかじる。

食卓について、少し行儀は悪いと思うけど誰に見られているわけでもないで私は携帯を取り出して、昨日振り込まれていなかったポイントが振り込まれているか残高照会画面を開いた。

「……あれ？」

液晶画面には確かに7万ポイントほど数字が増えた私の貯金額が表示されている。

「確か……708c1だったよね……増えてない、これ？」

クラスポイント

振り込められている額は私が昨夜記憶にない浪費をしていないのであれば75800 プライベートポイント p rだ。

クラスポイント c 1の計算と合わない。

この学校では クラスポイント c 1を100倍した額の プライベートポイント p r が支給されることになっている。

この誤差は一体何？ 考えて真つ先に浮かぶのは昨日の放課後、空条さんと須藤くんが呼び出されていた一件。

というか、それしか思い当たる節がないんだよね。

須藤が起こした問題を逆手に取って利益を上げたのか、はたまた須藤くんが巻き込まれたトラブルを見事に解決したのか。

何一つとしてわからないけど、水面下で空条くんが動いていたことは多分間違いないと思う。

「空条くん、か……」

謎の多いこの高度育成高等学校。

私がここに入学を決めたのにはそれなりに理由がある。

親に恵まれたおかげである程度レーンをひかれそれを辿つて来た私は自分で言うのもなんだけど周りの子たち以上に比べたら優秀だ。

学年上位10%に入る程度には勉強も運動も頭も切れるつもり。

でも、目立ちすぎると女子特有の余計なやつかみを買うかもしれないし、事実私が仲良くなったグループはどうにもレベルの低い女の子ばかりでカーストも気にしている子達が多い。過剰に頼られたりしても面倒だと思つて日々の授業は適当に加減してる。

私としては、もともと積み重ねて来たものを活かして国際線のCAや大手一流企業に就職するのも悪くないと考えていた。

けど、この学校に入学できた今。海外の一流大学に進み、将来は大使館に勤めてそこから国連……そんな夢も持てるようになった。

順風満帆な私の、沿うだけのルール。

一度も躓いたことのなかった人生。

そこに立ちはだかったAクラスでの卒業が希望進路幹旋の条件という壁。

もちろん、Aクラスの特権がなくてもある程度自力で希望する進路

を獲得する自信はある。ただ、国営のこの学校がバックアップしてくれるというのはあまりにも魅力的だと思う。

やっぱり、Aクラスを目指すのを諦めるなんてことはしたくない。ただ、今のCクラスは酷く脆い。

明確なリーダーの不在。

これは致命的だと思う。これからポイントがかかってくるだろう。体育祭や文化祭を迎えるはずだから。

団結は最低限の条件なんじゃないだろうか。

女子の情報網はすごいもので各クラスのリーダーは割れていて、他クラスは派閥こそあれど明確な先導者がいる。

うちのクラスにも空条くんという圧倒的な実力者は存在するけど、困ったことにクラスをまとめ上げて引っ張っていくという動きは見せていない。システムの共有に際して前に出ることもあれば、中間テストの時のように静観したり水面下で動いていたたりすることもあってリーダーとは少し違ったポジションにいる。

他にも平田くんや櫛田さんみたいにリーダー気質も備えた優秀な生徒はいる。

普通の学校だったならきつとアニメや漫画のような理想的な学級委員長なんかになってくれると思う。けど、自分が代わりをすることもできないのに、この学校ではそれだけでは足りないんじゃないかなと私は思ってしまったている。

きつとある他クラスとの競争、駆け引き。

あの二人は良い人すぎてダメな気がする。

本気で上を目指し、維持することを考えた時浮かぶのはやっぱり空条くんだ。

「私も私なりに頑張ってみますか」

少し冷めてしまったコーヒーを呷って、私は気持ち新たに登校した。

「やっぱりだ、Bクラスになってる」

1年のフロアまで階段を登ると、各クラスのC^{クラスポイント}1が掲示されているボードがある。登校一番確認するとCクラスのC^{クラスポイント}1に758と刻まれていてBクラスへの昇格も記されていた。

反対にDクラスは50^{クラスポイント}C1減っていた。

本当に空条くんは何をやったのだろう。仮説は立てられるけれど実際に何があったのか知りたいと好奇心が疼き始めてしまう。

私が早くも遅くもない8時15分ごろに教室に着くと、話題はBクラス昇格のことで持ちきりだった。でも、何か知っているであろう二人がまだ登校していないのか歓喜の盛り上がりというよりは動揺や困惑の色が濃い。

「おはよ、松下さん。掲示板見た？ あたしたちBクラスだった」

「おはよう、軽井沢さん。みたいだね、何かあったのかな？」

「んー、それが平田くんも何も知らないみたいなんだよねー」

このクラスのカーストトップの軽井沢さんだ。

そして私たちの歪な関係のグループの顔でもある。だいたい女子って、仲良くなるとすぐに名前呼び合ったりするものだと思うんだけどこのグループは何故かいまだに苗字呼び。誰かが名前呼び出せば変わるかもしれないけど、誰もしない。

カーストの保持という利害関係で結ばれたような危ういグループ。

だから今まで派手に結果を残したりはできなかった。

けど、私は覚悟を決めた。空条くんについて彼にはクラスを引っ張っていってもらおう。大変だと思うけど今まで積み上げてきた友達を失うのは嫌だし、人間関係も両立する。

空条くんには指揮をとって欲しいと思っっているのは何も私だけではないはず、少なくとも幸村くんはあからさまだし、平田くんもその気がある。あと小野寺さんとかかな、彼女は惚れてるっぽいし。

他力本願じゃないけど空条くんを前に出す、それができなくても話し合いや彼の意見を平田くんや櫛田さんを通してクラスに共有する。

それくらいはできるはずだ。

そのためにまず、実力を示し、彼の信頼を獲得しなくてはならない。

「おい健！ 昨日何があつたんだよ!?？」

須藤くんが登校してきたらしく、池くんをはじめとした賑やかし男子たちが即座に取り囲む。

「な、なんだよいきなり」

「Bクラスになってんの昨日の呼び出しとなんかカンケーあるんじゃないかねえの？」

「あ、ああ、それか。関係はあるんだけどよ、内容は話せねえんだわ、わりい」

「なんだよそれー」

「なんか言ったら罰則？ あるんだとよ」

「ちえつく、まあ良いけどな！ ポイント増えてるんだし！」

「だよなー」

お気楽な男子たちの態度を見て思わずため息が漏れる。空条くんの爪の垢でも煎じて飲めばいいのに。

ついでに、あの遠慮ない卑猥な視線を放つ目を潰してほしい……なんてね。半分冗談。

しばらくして空条くんも登校し、幸村くんたちが駆け寄っていたが結果は須藤くんの時と同じだった。

「騒がしいな、席につけ」

チャイムが鳴ると同時に入室してきたのは茶柱先生だ。

「佐枝ちゃんせんせー、俺たちもうBクラスつすよ！」

「Aクラスにあがるのも時間の問題だよな」

調子の良い男子たちに彼はどんな反応をしているのかとちらりと覗きみるが、前の席に座っている綾小路くん同様に無表情だった。

横の堀北さんは頭痛でもするのか額を抑えていた。全くもって同じ気持ちだ。

「本当にお前たちの実力に対応しいのかはさておき、実績だけ見れば当校開校以来の快挙続きなのは確かだ。それにしても……まあいい、クラスポイントの増額について概要を説明する」

茶柱先生の言葉に生徒たちは口をつぐんだ。

「昨日、CクラスとDクラスの生徒間にトラブルが起きたことに対する審議会が行われた。結果、お前たちにはDクラスから50クラスポイントが譲渡された。審議の内容については個人情報保護の観点から話すことは出来ない。以上だ」

思考停止して、いや、思考することすらなくポイントが増えた事実だけを喜ぶ者。

審議会の内容について答えの出ない思考の海に旅立つ者。

反応は様々だけど、一部の生徒は気づいているだろう。

今回はプラスになっただけ、と。

空条くんの警告から生活態度の悪さがあからさまな生徒は居ない。けれども、須藤くんは体育の授業とかでもキレかかっている場面をよく見るし、池くんたちは罾を掛けられれば嵌ったことに気づかないまま囚われていそうだ。

男子だけの話じゃない、うちの軽井沢さんだって身内鬣屑をなしに見るとえつと思う行動を数々取っていたりする。

今回の審議会の結果からクラスのリーダーが今一度生活態度の重要性を説いて守れと統制を取ってくればな……なんて都合が良すぎるかな。

さて、問題はどうかやって接触するか。

教室にみんながいる中私単独で話しかけるのは悪目立ちする。

次に数度、平田くんがランチに誘うから一緒した事はある。当然グループ絡みであり、私単独ではない。

なので当然無しだ。

今後協力関係が築けたとしても、無闇な接触はしなないと思うし。

となると、やつぱりメッセージを送って人目のないところで落ち合うのがベストかな。

私は昼休みに『放課後に屋上で少し話したい』という旨を伝え、放課後になって屋上へ一人向かう。

「……あつつ」

状況だけ見れば愛の告白をする5分前、みたいな場面だけでもし夏

場に屋上での告白をしたいと思っっている人がいるなら考えを改めるよう忠告してあげたい。

エアコンに慣れた現代人にこの暑さはダメだ。

もし、呼び出された側が期待のあまり5分も早くきたのなら告白される前に帰宅するまでである。

一応、信頼を勝ち取ろうとしている私は10分前に到着しもうすぐ5分が経過しようとしているがもう乙女的にはNGな量の汗を流している。

「なんで日陰なのにこんなに暑いんだよ……」

ぼやいた瞬間、校内へと続くドアがギギと鳴りながら開かれ大きな人影が現れる。壁にもたれていた私は、背中を離して佇まいを整える。

「突然ごめんね空条くん。きてくれてありがとう」

事前に了承をもらってたから来ないことはないと思っただけ、ちよつと安心した。

「用件は？」

いきなりそう切り出されるとちよつと話にくかったりするけど……私は30センチ以上は身長差のありそうな空条くんの目を見て話す。

「私、将来のためにAクラスを目指したいと思ってるの。それで空条くんに協力できたらなって。私のこと全然知らないと思うし、すぐに信頼して欲しいなんてことはなくて、まずは私に協力できることがあつたら声をかけてくれると嬉しいかなって」

柄にもなくちよつと緊張してしまい、一方的に話してしまっただけで言いたいことは言え、ほつと一息つくわけにもいかず、空条くんの反応を固唾を飲んで見守る。

「松下、お前の考えはわかつたぜ。その上でちと聞かせてもらう。Aクラスを目指すというのならクラスに貢献するのは当然という話だ。俺にでなく、クラスへのものであるはずだ。ちがうか？」

さっきの切り出し方もそうだけど空条くんは前振りとか探り合いを好まない節がある。ここはある程度正直に話そう。

「たしかにそうだと思うけど、空条くんへの協力は結果的にクラスへの貢献にもつながると思う。空条くん、根回しとかしないでしょ？今後クラスがまとまって行動していくには必要だと思うし、そういう役回りをするポジションとかで役に立てたらなと思ってる。特に女子の意見調整とか。悪い話じゃないと思うんだけど」

「尤もらしい理屈はどうでも良い。目的を単刀直入に言ってもらおうじゃあねえか。今の言葉に返事をするなら前にも言ったが合議制で意見のあるやつで話し合って方針を決めれば良い。根回しつてのが有効なのはわかる。だが、本当にそれを狙うなら平田か櫛田に頼むつてのが最も効率的だと思うんだがな」

本当にはつきり言ってくれ……

無表情の空条くんの考えが読めない。そもそもこの提案自体に嫌悪感を抱いているのか、何か試されているのかすらわからない。

「なにもお前が憎いってわけじゃあない。Aクラスに上がることはおろかクラスがどんな評価を受けようと気にしないやつがいる中で1人でもAクラスを指摘すつてやつが増えるのは俺としても願ってもない申し出だぜ。しかしな松下、お前は『協力関係』を築きたいって言っていたが、そのとっかかりに重要なことはなんだ？」

信頼、利害関係、クラスの利益……いくつかの選択肢が浮かんでしまう。いつそのこと1つしか思いつかなかった方が気が楽だったかもしれない。

これ、多分外したらダメなやつ……だよね。

私は恐る恐る口にした。

「……信頼、だよね？」

「そうだ。人が人を選ぶにあたって最も重要なのは信頼だ。ならばそれを持ちかける立場の人間はなんの目的があるのか、腹を割つて話すことは筋だと思わねえか？ そこんとこが聞きたいんだぜ」

あまりにも真っ直ぐに私を見据えて言う空条くんに面食らつてしまうが、私はここで引いたりはいしない。

「……空条くんが指揮を取るのが1番Aクラスでの卒業の可能性があると感じたの。だからあなたをサポートして、意見を通りやすくした

い。そう思ってる」

「そこまでの信頼を置かれるいわれはねえが」

「ううん。基本的な実力は言うことないし、昨日の須藤くんのことも彼がいずれ問題を起こすと踏んで準備してたんでしょ？ そうじゃないと咄嗟に須藤くんを守るなんて事できないだろうし。勉強会を開いて学力を高めるなんて事はある程度発言力がある人なら誰でもできる。けど、あなたの冷静な判断力と頭の回転は誰にでもあるものじゃないと思う。だからこそ前に立って欲しい」

「そうか。さっきも言ったが俺としても嬉しい申し出だぜ」

「じゃあ——」最後にひとつ聞かせてもらおうぜ。場合によっては意にそぐわない方針や指示を出すこともあるだろう。あんたはその時どうする？」

色良い返事にホツとしたのも束の間、割って入ってきた空条くんにドキリと心臓が跳ねた気がした。

だけど、この質問に対して私は何ひとつ迷わない。

「私に取ってより良い結果を残してくれる限り、私はついていくよ」

「大した覚悟だ。よろしく頼むぜ」

即答した私に感心したのか、少し口角が上がった気がする。

その空条くんはポケットから右手を出すと差し出してきた。

握手を求めているらしい。

私がそれに応え手を取ると、分厚くて硬い手から揺るぎない覚悟と底知れない精神力を感じた気がした。

「よろしくね。空条くん」

協力者 その②

協力者 その②

学期末の試験を1週間後に控えた週末。

Bクラスに昇格した承太郎たち元Cクラスの面々は中間テスト同様に平田、堀北、幸村たちを中心に大中小グループを形成して勉強会を開く形で対策を行なっている。

一つだけ違う点を挙げるとするならば、承太郎によって今回は過去問などの抜け道はおそらく用意されていないから死ぬ気で勉強しろとクラスに対してハツパをかけられている点だろう。

須藤を中心に赤点組は青ざめ堀北に教えを乞うている。

放課後を迎えると今日も今日とて生徒たちは各勉強会へと向かう。

「私たちもいくわよ」

須藤たちが揃って出ていくのを見た堀北が、綾小路に呼びかける。

綾小路は今回も赤点組の教師役だ。堀北と櫛田ではなく綾小路に教えられている沖谷はともかくとして、山内は不満を漏らしている。

本当に失礼なレベルの悪態のつき方に沖谷が気を使うほどだ。

「すまない。さつき茶柱先生に呼び出しをくらったんだ。先に行っておいてくれ」

「あなたまさか……」

「不祥事を起こした覚えはない。安心してくれとは言わないが、オレにもなんで呼び出されたのかさっぱりなんだ」

「そうね。あなたは誰かと事を構えるに至るコミュニケーション能力がなかったことを失念していたわ。ごめんなさい、もう3ヶ月もボツチをしていたのに」

「納得のされ方が納得いかないぞ？ まあとにかく、オレは遅れて参加か欠席だと思っておいてくれ」

「その分はどこかで挽回してもらおうわ」

堀北は踵を返し、髪を靡かせ図書室へと向かった。

「さて、オレも行くか」

綾小路は本当に心当たりがなかった。

何かを質問するような事もなければ、誰かに関わったこともない。あるとするならば、なんらかの目撃証言を持っている可能性に該当して呼び出されたとか、堀北のことを随分と気にしている兄が現状を探ろうと何か仕掛けてきたか。

それぐらいだろうと考えていた。

しかしそれは、昨日までのこと。

綾小路を呼び出した茶柱の様子を見て一つの可能性がよぎっていた。

来なければ退学にする。

そう脅されては行かざるをえない。

荷物をまとめた綾小路はスクールバックを担ぐと廊下で待つ茶柱に続く。

茶柱は綾小路がついてきているのを確認しながら職員室を通り過ぎる。

「一体どこへ行くんですか？」

「応接室だ。時に綾小路、お前は空条と仲は良かったか？」

「どうしてですか？」

「いや、忘れてくれ。それより、お前の父上がいらっしやっている。今は校長が対応しているが、お前が中に入れば私と共に退室する手筈だ」

「この学校はたとえ保護者でも訪れる事はないのではなかったですかね？」

「よほどのことがない限りはない。それがこの学校のルールだからだ。……しかし、綾小路お前が1番理解しているだろう」

茶柱先生は悔しげに唇の端を噛み締める。心なしか額にも汗を滲ませているように見えた。落ち着きがないどころか明らかに焦りが見える。それを見逃す綾小路ではない。

「引き返したらどうなりますかね」

「担任が変わるかもしれんな」

「それは良いですね。それでは「待て、綾小路。冗談だ。もう着いたぞ」

自分の想像通りの人物が来ていることを確信しながら、ノックし入室する茶柱先生に続いた。

「校長先生。綾小路清隆くんをお連れしました」

「入ってください」

柔らかくも、年齢の貫禄を感じさせる声が聞こえ綾小路に室内が見えてくると入学式や終業式で何度か目にしていた校長がソファに腰掛けていた。しかし、行事の時のような落ち着きはなく、額に汗を浮かべハンカチでそれを拭っている。

「では、後はお二人で話していただく、ということ……かまいませんか」

「無論です」

「私どもは席を外しますので、どうぞゆっくりと。失礼いたします」

校長の向かいに座るのは綾小路の父親だった。

校長よりも二回り近く年齢が低いにも関わらず、校長は徹頭徹尾物を腰を低くし逃げるように応接室を後にした。茶柱先生もそれに続く。

「挨拶もなしか」

本来校長が座っているはずの椅子に腰掛け、肘をついた父親が鋭い眼光を向けるが、綾小路は気にした様子もなく表情ひとつ変えない。

「それが何か問題が？ あんたに挨拶する必要があつたのか？」

「わざわざ出向いてやった父に対する態度ではないな清隆」

「オレがあんたに対してそんな感情を持ち合わせていないのは知っているだろう。何をしに来た」

「それこそ愚問だ」

「オレは退学はしない」

「いずれ、こんな退屈な場所お前は自分から退学の道を選ぶだろう。しかし、お前は1分1秒でも早く戻らねばならない。来月にはホワイトルームは再稼働する。人材も確保し今度は完璧な準備を整えた。お前に拒否権はない」

言う綾小路父は一枚の紙を取り出した。

「校長に話をつけた。あとはお前がここにサインをするだけだ」

机上に置いたのは自主退学届だった。ご丁寧に綾小路が記入する

必要のある箇所以外全て記入済みだ。

「二度は言わない。帰れ」

「随分と偉くなったものだな。仮初の自由に触れて気でも大きくなったか？ 忘れるな、お前は俺に命を与えられ育てられた、俺の所有物だ。所有者が全ての権利を持っていることは言うまでもない。いかすも殺すもこちらが決める」

およそ普通の親が口にするのではないがいつさいの迷いなく言い切る様が本心からの言葉であると何よりも雄弁に語っている。

「オレにも人権があるはずなんだけどな」

平行線。

両者共に一步も譲ったりはしない。

無益な話し合いの中で先に仕掛けたのは父だった。

「この学校の存在をおまえに教え、入学するよう入れ知恵した松雄がどうしているか気にならないか？」

「興味ないな」

その後の松雄一家の顛末を聞かされるが綾小路は微塵も動揺することはない。

「松雄が言っていた。ここは日本で唯一あんたから逃れることができると。そしてそれはあながち間違っただけじゃないなかつたらしい」

「俺がただお前を待つだけでも思っているのか？」

「政府の息がかかったこの学校に、今のあんたが介入できるとは思えないな」

「おかしな話だ。ここにすることが何よりの証拠だろう」

「あんたはわざわざオレに交渉をしに来た。それが全てだ」

強引な手段をとることができるのであれば既におこなっているはずと綾小路は考えている。事実、権力を削がれた現状では国営の学校に対して強硬手段に出ることはできないでいた。

「何故お前ほどの個体が道から外れた行動をとる。不要なものを学んでいる時間などないと理解しているだろう」

「それはオレ自身が決めることだ。自分の道は自分で決める」

「くだらん。私が用意した以上の道などこの世に存在せん」

「それはあんたの中での話だろ」

「やはり話にならないようだな」

「ああ、同意見だ」

ピリついた空気感の応接室。

そこに乾いたノック音が響いた。

「失礼します」

2人の視線がドアへと向く。声を聞いた瞬間綾小路は父親の表情が少し険しくなったのを見逃さなかった。

自身も声という曖昧な情報で脳内検索をかけるが該当する者はない。

温和な雰囲気の男性はこの学校の理事、坂柳だ。

二人は既知の中のようにでしほしの間牽制にも似た会話を広げているのを綾小路は無言で聞いていた。

「先生、こちらを」

理事長は封筒を手渡した。それもよく目にする茶色の定型型ではなく海外からのものだ。

池たちが読んだのなら一文目で投げ出すであろう内容に綾小路父は目を通し、末尾にある財団の印をしばらく眺めると坂柳理事を睨みつけ、肘をついた。

「ひとつ聞かせろ坂柳。何故お前がこれに関われた」

「運が良かったとでも言いましょうか」

「そんなもので関わることはできません」

「私には守るべき生徒たちと先代から引き継いだ貫きたい理念があります。そのためなら何でもしましょう。日本の教育に関心があるそのうでしたので、利用させていただきました」

「話をすり替えるな。さっさと答えたらどうだ。なぜ医療や考古学が中心のアレが日本の教育に関心を持った」

「清隆くんが懇意にしている友人がジョースター氏のお孫さんなのですよ。書面にない理由があるとすればそれぐらいでしょう」

「どうやら緊急の仕事が入ったようだ。俺は帰る。坂柳、それはしばらくお前に預ける」

「ええ、3年間しつかりと預からせていただきます」

「清隆。学習を止める事は許さん」

綾小路父は言い残すと怒りを扉を閉める際にぶつける。

「あの男が本気を出した場合、学校は対抗できるんですか？」

「流石は先生のご子息と言ったところかな？ 清隆くん、君にはこの

学校で学友と共に学び成長して欲しいと願っているよ」

窓の外を見やる坂柳理事の表情は窺えない。

「一応答えとおくと、無傷というのは難しいだろうね、私たちだけでは。良い友人を持ったね」

「あいつが何かしたのですか？」

「いいや、彼はゲームの公平性を望んだだけだよ、名前は貸してもらったけどね。先生の動きはこちらも注意してきたからね、色々と手を回して先手が打てたというわけさ」

「あの男が負けるとは思えませんが」

「はは、随分と信頼しているんだね」

「負の信頼ですけどね」

「権力を行使する先生が1番戦いにくい相手だ。いくら先生とはいえ一筋縄では行かないはずだよ」

含みのある笑みを綾小路に向けた理事長。父親への対応への罪悪感でもあるのかと綾小路は読み取る。

「そうですか。じゃあオレはこれで」

「最後にひとつ。と言ってもただの伝言だけだね。『よろしく頼む』だそうだよ」

綾小路は足を止める事なく応接室を後にした。

「色々と断り辛くなっちゃったな。……やれやれだ」

将来の道が大きく開かれたことを感じて綾小路は勉強会へと向かう。その足取りは人生で初めて軽く感じるものだった。

——翌日。昼休み side綾小路清隆

「綾小路、少し頼まれてくれねえか」

昼休みを告げる電子音が鳴り響くと後ろの住人が声をかけてきた。背もたれに腕をかけて振り向くといるのは当然空条だ。

昨日の今日であまりにタイミングがいい。もしかしてあいつの接触を知っているのだろうか。

昨日の件に恩を感じているなんてことはないが先々のことを考慮すればある程度の協力はおこなっておいて損はない。

理事が言っていた奴が戦いにくいというのはさらに上の権力のことだろう。武力でも学力でも同じことだが格上の相手にはまともに戦ったところで勝ち目はない。その権力との結びつきのある空条とは必要がなくなるまで良好にしておく必要がある。

「オレにできることなら別に構わないが」

「ここじゃあなんだ、食堂にでも行くぜ」

オレが首を縦に振って席を立つと空条は先に歩いていった。それについて行くオレになにやら堀北の鋭い視線が突き刺さっているが気にせずに廊下に出る。途中何人かがこちらを見ていた。やはり、空条といると目立つな。

食堂へ着くと空条は山菜定食を注文したのでオレもそれに倣う。

「それで、たのみごとってなんなんだ？」

「まずはこれを見な」

空条から2枚の紙を受け取る。1枚目は地図、2枚目はスレと呼ばれるものだ。

1枚目の地図は寮からケヤキモールにある家電量販店へ往復した軌跡が記されていた。

「これは？」

「佐倉という女子生徒のここ数週間のGPS情報だ。見ての通り妙な挙動をとっている。彼女が何も購入せずに毎回帰宅していることは

確認している」

流れ的にその理由が2枚目なのだろうとスレに目を通す。

368：雫ちゃんを応援する名無し 20xx/6/25 21：
24：00

雫ちゃんひっさびさの更新きたンゴ『画像』

369：雫ちゃんを応援する名無し 20xx/6/25 21：
26：00

>>368 よくやった

370：雫ちゃんを応援する名無し 20xx/6/25 21：
27：00

もう夏なのに布面積多いんだが？

371：雫ちゃんを応援する電気屋店員 20xx/6/25 2
1：27：30

>>370 俺の雫ちゃんを下卑た目で見んな

372：雫ちゃんを応援する名無し 20xx/6/25 21：
28：00

>>371 おっと勘違い野郎が現れたぞおまいらww

373：雫ちゃんを応援する電気屋店員 20xx/6/25 2
1：28：10

>>372 哀れw現実受け止めなw俺、運命の出逢いしてるから

374：雫ちゃんを応援する名無し 20xx/6/25 21：
28：15

>>373 寝言は寝て言えよww

375：雫ちゃんを応援する名無し 20xx/6/25 21：
28：16

>>372 妄想乙

「それはほんの一部だ。どうやら佐倉は界限ではある程度認知されているらしい」

「これは空条が調べたのか？」

「協力者がいる。調べたのはそいつだ」

うちのクラスなら機械に強いで真つ先に思い浮かぶのは博士だが……まさかな。

追加で渡されたスレには犯罪の匂いがするものばかりだった。

「佐倉が置かれている状況は理解したがオレに何をしろと？」

「解決だ」

「随分と無茶振りするな」

「無理とは言わねえんだな」

空条は薄く笑う。

オレのことをはかりたいというわけか。自分でできないことでもないだろうしな。

「あまり賑やかな生活をするつもりはないからな」

「やり方は任せる」

「わかった」

「しかし、快諾するとは思わなかったぜ」

「協力するよう脅してきたのはそっちだろ？」

「そうだったな」

空条は口角を上げて言う。

その後教室に帰ると堀北から質問攻めにあつたのは言うまでもない。

——3日後

「この間の件だが解決したぞ。男は逮捕、佐倉には100万 プライベートポイント p r
が支払われるそう。あと、カメラが壊れた原因はお前が特別棟で大声を出したことに驚いて落としたことらしいぞ」

空条はオレの報告を無言で聞きとどけたのだった。

↑ T o B e C o n t i n u e d

夏休み編

無人島に行こう その①

無人島に行こう その①

「遅刻している者はいないようだな。早速だが学期末試験の結果を発表する」

もういくつ寝ると夏休み。ココロオドル学生のみには許されたビツクイイベントを目前に退学をかけた試験が立ち塞がる。今日はその結果発表日だ。

己の進退がかかっている試験だけあって、『勉強してない』なんて嘯く生徒はおらず、三馬鹿すらも堀北の指導のもと真剣に取り組んでいた。

松下や綾小路など周囲に本気で頑張ってみるなど宣言する面々があり、それぞれの所属グループに良い刺激を与えていたこともある。

茶柱先生は例の筒から用紙を取り出すと黒板に貼り出す。

「よくやった。今回も退学者は0だ」

「うっしー」

茶柱先生の言葉に須藤は盛大にガッツポーズをとった。他の生徒たちも安堵し表情が和らぐ。

全教科の成績が張り出されているのを全員が一教科ずつ目を通して行く。全教科同率1位に承太郎と高円寺が名を連ね、平均90点越えに幸村や堀北など、綾小路は85〜87点に収まっていた。

松下はというと少しずつ本領を發揮して行く算段のようで今回は75〜80点程度に加減をしている。

「松下さんスゴいじゃん」

「今回がんばったからね。結果出て良かったよ」

同グループの軽井沢が振り返り話しかけている。同時に堀北も訝し気な視線を綾小路に向けていた。

「さて、試験前に伝えた通りお前たちは無事に夏休みのバカンスを獲

得できたというわけだ。喜べ？ 平均年収程度の財力ではよほどの覚悟がなければできない体験だ。それに無料で参加できるんだからな」

茶柱先生の言葉に教室が揺れる。男子の発狂に普段なら引く女子だが今回ばかりは女子も声を出して喜んでいるものが多い。

日程的には夏休みの3分の1以上の拘束日数があるが豪華客船での無人島リゾートツアーといわれれば文句を言う生徒は少ない。

これで文句を言うのは外出そのものを嫌う千葉愛に溢れたひきぼつちぐらいなものだ。

「まあ落ち着け。客船は4人一部屋になっている、このホームルームの間に決まらなければ各グループごとに教室後方に掲示しておく用紙に記入する様に」

茶柱先生の説明を受けて挙手する生徒が1人。それも承太郎でもなければ平田でも無い。もちろん綾小路や高円寺でもない。

山内だ。

茶柱に当てられると山内は立ち上がる。

「男女混合はありですか!?」

場が凍りついた事が気にならないのか気づいていないのか山内は茶柱先生をまつすぐ見て返事を待つ。

「……無しだ」

「……まじか」

男子たちからガヤが飛びなんとか場の雰囲気回復したところで手を挙げる生徒がもう1人。

同じように指名されると彼は立ち上がる。誰であろう承太郎だ。

「バカンスとやらの中で クラスポイント c 1、もしくは プライベートポイント p r が変動する事はあるか」

「愚問だ。ハメを外してやらかすなどいくらでも可能性はある」

「生徒が問題を起こす場合を除いて、っていうのはどうだ？」

「何が言いたい?」

茶柱先生は確信した答えを持ちながらあえて空条に口にさせるように促す。

実際多くの生徒は現段階では承太郎の質問の意図が見えていなかった。

「俺はc l、もしくはp rを賭けてクラス間の競争を学校行事でさせるのかと思っていた。体育祭や文化祭がそうだ」

定期試験と生活態度以外に気を張っていなかった生徒たちが息を呑んだ。

「しかし、長期休暇にわざわざ学校側が設定したバカンス。何か仕掛けてくる、そう思うのは自然なことじゃあねえか？」

「面白い仮説だ。確かに修学旅行ですらいちおう学習目的が存在する。学校側が設定するものは全てにそれがある。これ以上は話す事はできない」

床が揺れるほどの熱気を帯びていたとは思えないほどの緊張感に包まれる教室には、物音を立てれば隅から隅まで響くのでは無いかというくらいの静寂が降りていた。

「だが、バカンスはある。その点は素直に喜んで楽しめよ？ 本当に豪華だからな」

他に質問がないことを確認して茶柱先生は教室の隅にもたれ腕を組む。

それを合図に生徒たちはルームメイト獲得戦を開戦する。

軽井沢グループの様に一瞬で決まるグループがある中、席から動こうともしない生徒もちらほらと居る。

「なあ空条、良かったらどうだ？」

綾小路は振り向いて後ろの席に居る承太郎を誘う。

「構わねえぜ」

「俺もいいか？」

ふたりの会話に近づき入ってきたのは幸村だ。ふたりは了承すると頷きを返す。

残り1人となり周りを見るとほとんどの生徒は既に4人で固まり用紙に記入しに行っている。

「後1人どうする？」

「見る限り残ってしまったひとりに入ってもらおう形になるんじゃない

か？」

承太郎の協力者こと外村は三馬鹿と、平田は沖谷たちと組んだようだ。

「となると……まあ、そうなるか」

「だな」

3人の視線は手鏡を見ながら櫛で髪を入念に整える高円寺にとまった。

他の面々が記入し終え最後に回ってきた用紙に3人がサインすると承太郎が高円寺の元まで渡しに行く。

「書きな」

「おやおや、静かに過ごせそうな顔ぶれだね。安心したよ、私の休暇を邪魔する事はギルティだからねえ」

高円寺は相変わらずの態度だが、用紙を受け取ると素直に名前を書いた。

「それにしても承太郎、随分と手駒を増やしている様じゃあないか」

どこから知ったのか、はたまた人間離れした観察眼で承太郎に対する態度などからそう予測したのか高円寺は自信満々に言い切った。

承太郎としても否定したり聞き返したりはしない。

時間の無駄と理解しているからだ。

「協力する、そういう関係だ。駒じゃあないぜ」

「これは失礼、言い方を違えたかな。私としてはAだのDだの誤差でしかないがポイントが増える分にはなんの問題もないからねえ」

個人戦では承太郎に張り合っている節があるが試験では両者満点が基本のため一切決着がつく気配はない。

「お前が貢献すればより増えると思うがな」

「フハハ、私は私の心向くままさ。私を動かすに足る条件を提示できる者などそうはいないからねえ」

「……やれやれだぜ」

高円寺との会話を切り上げるとそろそろ1限目が始まるため席につき始めた生徒たちの波に逆行して承太郎は教壇に立った。

承太郎の行動を見て教室中の視線は自然と集まり、声を張らなくて

も全員に聞こえるほどの静けさに包まれた。

「次のバカンスは十中八九ポイントの関わるものになるだろう。仮に特別試験とでも呼ぼうか、そして学力だけが求められた試験とは一線を画すものになるんじゃないかと思っている」

「今までよりも直接的な対決になるかもしれないと言うことだよね？」

平田は即座に質問という形をとり、クラスメイト全員の理解を促す。承太郎はそれに答えて続けた。

「前にも話したが意見のある奴が表明し、その上で方針を決めるつてのが理想だと俺は考えている。なぜならば『納得』は全てに優先されるものだと考えているからだ。納得がいかねえことに全力を尽くすつてのはかなり精神を削るし、得てして全力を出せねえ」

しんとした空気の中クラスメイトは承太郎の話聞き、須藤に至つてはメモを取っている。

「その上で、矛盾したことを言うが協議している時間のない抜き差しならねえ事態つて奴があるのも事実だ。特別試験でも瞬間の判断を求められる場合があるだろう。その時が来れば俺は勝利に必要なならば独断で動くぜ」

若干の動揺から漏れる声で教室がざわめく。とはいえ、承太郎ならば大丈夫ではないかと思わせてくれる実績と纏うオーラ故に頭ごなしに否定してくる輩はいない。

「まあ俺らがBクラスまで上がったのは空条がいたからつて感じもあるし別にいいんだけどさ、勝手にやって失敗したらどうすんだよ？」

こういう時の池は強い。クラスの総意を代弁する。

『正しい』と信じて行動し、結果クラスをマズい状況に追い込む様な事があれば当然取れるだけの責任は取る。賠償か非干渉か退学か、俺が勝手にやった事だからな。そいつは当然の義務だ」

「た、退学つてそこまでしなくても」

承太郎の覚悟にたじろぐ池をよそに承太郎は続ける。

「Aで卒業する。そのために自分の信じた道を歩く、それだけだぜ」

揺らぐことのない自信。明らかにそれは過去の積み重ねから来る

ものであり、多くの生徒には眩しいとさえ思わせている。

承太郎の宣言を待ってましたと歓喜する者、流れに身を任す者は居ても現段階では疑う者など居なかった。

Dクラスという肥沃だが荒れ果てた畑に植えられた種たちは、承太郎という圧倒的なエネルギーを放つ太陽に照らされ、Aクラスという目標に向けて発芽し始めている。

Aクラスを射程距離圏内に感じられることで仮にDクラスのままであれば纏まる事は絶望的だとも言えたであろうクラスが承太郎を中心に纏まりつつある。

しかし、光が強ければ強いほど陰は濃く、深くなるのもまた世の常であった。



「うおおおおお！ 最高だあああああああああ!!」

常夏の海。広がる青空の下で池寛治が豪華客船のデッキから高らかに両手を挙げ叫ぶ声が響き渡る。それはかなりの音量で多くの生徒がいるデッキの1つ上にある展望デッキに向かう承太郎の耳にも届くほどだった。

馬鹿でかい声を上げた池を誰かが責めると言うこともなく、一面に広がる海の大きさをからくる開放感にあてられ大らかだ。

普段ならすぐに食ってかかっていたであろう軽井沢たちも真横で

絶景に感動している。

無理もない。オフシーズンでも数十万の費用がかかる豪華客船に無料でそれも二週間。レストランやシアター、プールやスパに至るまで全て無料での利用が可能と来た。これに感動しないのは一般人には無理というものだ。

一週間は無人島でのペンション生活。残りはクルージング。

前者はBクラスは試験が用意されている可能性が高いと覚悟してきているが、それでも残り一週間は真正銘のバカンスがついていると期待している。

朝5時に集合したとは思えないハイテンションでじき到着というところまで進んできている。目的地は学校所有の南の島、無人島だ。

承太郎は程なくして展望デッキに到着した。

少し開けた空間にリゾートプールなどに設置されている横になれるタイプのベンチが6つ設置されていた。人影は一つ。

ベンチに横になり、透き通る緑色の美しいドリンクを片手に日光浴をしている高円寺だ。相変わらずブーメラントタイプの水着を着用している。

「太平洋の真ん中でライトアップされる私。実に美しい」

「北西の間違いだぜ」

「フハハ承太郎、君もナンセンスなことを言うのだね。地理なんてものは問題ではないのだよ。私がおりにいる、それが全てさ。それにしてもこんな時にも学生服を着るとは君も相変わらずのようだ」

皆が衣替えし夏服に袖を通す中、承太郎はいまだにジャケットをきつちりと着ている。

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まりください。間も無く島が見えて参ります。しばらくの間、非常に意義ある景色をご覧いただけます。』

奇妙な放送に従い多くの生徒がデッキに集まるが、放送に従っているので承太郎たちがいる展望デッキには誰も来なかった。

「始まったようだな」

「君が熱を上げている抗争には興味はないが、どれほどの自然が待つ

ているのか多少は期待ができる。フハハ、自然と私の対話。この学校ではできないと思っていたがなかなか学校もわかっているじゃあないか」

どこまでも自分を中心に据えて話をする高円寺を無視し、承太郎は水平線から姿を現した島を見遣る。

島がはつきりと肉眼で確認できると瞬く間に距離が詰まって行き、生徒たちの熱気と興奮も高まって行く。

栈橋をスルーすると島の周りをぐるりと高速で回り始める。面積約0.5平方km、最高標高230m。承太郎たちは無言で島の全貌を観察した。

「期待はずれもいいところだね。アマゾンの密林でサバイバルをした私たちからすれば開墾された島なんてテーマパークも同然とは思わないかい?」

「嫌なこと思い出させるんじゃないぜ。俺はあれを機にジジイとは二度と飛行機に乗らんと決めたんだ」

「今となつては良い経験だよ。確かに、初めて生命の危機を感じたものだがね」

↑次回、高円寺六助、肉体改造計画（仮）

無人島へ行こう その②

無人島へ行こう その②

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まりください。間も無く島が見えて参ります。しばらくの間、非常に意義ある景色をご覧いただけるでしょう』

奇妙な放送が流れているのを承太郎たちが展望デッキで聞いているのと時同じくして船内のレストランでフレンチを味わっていたAクラスの二大巨頭が一人、葛城康平も耳を傾けていた。

承太郎ほどではないが高校生にしては大きな躯体、そして何よりもスキンヘッドという容姿ゆえに人目を引く。お洒落としてではなく病気のための髪型のため本人はいじられても相手にしたりしないがわざわざ口にするものは一学期共に過ごしてきた生徒たちの中にはいない。

椅子に腰掛けている姿勢やテーブルマナーに至るまで実に美しく彼の人となりを物語っていた。

「葛城さんの読み通りでしたね」

葛城に反して背伸びをしている雰囲気か否めない様子の男子生徒戸塚弥彦が嬉しそうに話す。

彼は葛城派筆頭の生徒であり、周りからは腰巾着と揶揄されていたりする。というのも戸塚は虎の威もとい葛城の威を借りる言動を取ることがままあるのだ。

しかし、Aクラスに配属されているだけのことはあり文武ともにそれなりにこなせる。

「行儀が悪いぞ弥彦。しかし、我々も早々に向かう必要があるな」

手早く残りの食事を済ませると二人はアナウンスに従いデッキに向かうことにした。

「それにしても流石です葛城さん。まさかこのバカンスが試験になるだなんて思っていませんでしたよ」

「そんなことでいちいち浮かれるな、まだ何も確定したわけではない。ただ、妙な放送が流れただけだ」

「そ、そうですね。まずはしっかりと意義ある景色とやらを見ないといけませんよね」

デツキに出るとしばらくして島が全貌を現し、船はその外周を高速旋回する。

多くの生徒が他の景色やなんとなく島を眺める中葛城の目は上陸する無人島の構造を的確に捉えていた。

人の手が入っている事を感じさせる開けた道に、それが続いていく先には洞窟が見える。

漫画の考察班が論点を探すために不自然に感じるところを探す様に、葛城は大自然の中での人為を感じさせる違和感を探し、それらを見つけた。

「葛城さん何か分かりましたか？」

頼ってくれるのは嬉しくもあるが、完全に全権を委ねてくる戸塚にもうすこし頼もしくなってくれればと思った葛城はフンと鼻を鳴らした。

犬の様に爛々とした目を向けられている葛城は「ここで話すことではない」と区切ると船内に戻った。

葛城が試験の展開と洞窟への道のりを何通りもイメージしながら自室へと歩いていると唐突に呼び止められる。

「葛城くん、意義ある景色は見る事ができましたか？」

我々はこのロリ銀髪を知っている！

いや！

この黒いベレー帽と絶対領域を飾るガーターベルトを知っている杖をつきお付きの者を従えた坂柳有栖だ。

「……坂柳か。勿論だ」

坂柳の登場に葛城の表情が曇った。

派閥として双壁を成すふたりはその性質が大きく異なる。

坂柳が矛、葛城が盾といった具合だ。

そもそも葛城は他の誰かが立候補するのであれば、自らがリーダーとして率いていこうとは考えていなかった。

小学校、中学校と学級委員や生徒会、それも長として務めてきた自負はある。

しかし、葛城はそれを威張る様な男ではなく基本は温和で協調性のある男だ。

この学校の競争にも真摯に取り組むものの、他クラスを見下したり貶めたりするつもりは毛頭ない。

それに真っ向から反するのが坂柳だった。

好戦的で狡猾。クラス内でも過激な言動を取り、手段を選ばず勢力を広げている。

坂柳の言動には内心穏やかではない生徒も多い。

それを守るために立ち上がったのが葛城というわけだ。

「私はとても残念ですが今回、無人島へは上陸することができません」

「そうか、それは残念だ」

「フッフ、心にもない事を言わなくても構いませんよ？ 同じクラスの仲間ではないですか」

どの口が、と喉元まできた言葉を葛城はぐつと飲み込む。

「無人島で何かあれば全て葛城くんの判断に任せます。ここにいる2人に話を通してもらえれば他の方々も動くでしょう。よろしくお願いますね、葛城くん」

「もとよりクラスでの協力は必要なもの、言われるまでもない」

「フフ、そうでしたね。果報をお待ちしています」

終始にこやかだった坂柳はそれではと葛城たちを横切り歩いて行く。

「葛城さん、これはチャンスですよ！ この試験で結果を残せば坂柳派も黙りますよー！」

完全に声が聞こえないだろう距離を取ると戸塚は興奮気味に言った。

「弥彦、前にも話したが派閥などというものをクラスに作りたいわけではないのだ。そういう発言は控えてくれ」

「……あ、はい」

「しかし、一方でお前の言いたいこともわかる。Aクラスの生徒たち

が平和に笑っていられる様に全力で当たるともりだ」

「俺もどんなことでもしますよー！」

葛城が戸塚からの厚すぎる信頼を感じている一方、坂柳たちもお付きの者が尋ねていた。

「本当にいいのあいつに任せて。結果残されたらあんたの立場も悪くなるんじゃないの？」

心配する様な言葉をかけたのは側近の神室真澄だ。サイドテールが特徴的なかなりの美女だ。

坂柳に能力を買われたという訳ではなく、万引きを目撃され、通報しない事を条件に脅され働かされている。

「ま、そうだったら俺は葛城につかせてもらいますよ？」

金髪を短く束ねた男子生徒、橋本正義だ。総合的にバランス良くないんでもこなす男で世渡りがうまいと豪語している。

坂柳についたのも価値を見込んでのことだ。

「葛城くんでは勝てないとは思いますが、私が勝たせてあげるとでも？」

坂柳は2人にいくつか指示を出し一週間ひとりで過ごすことになる自室に戻った。



船上にいた生徒たちは無人島に到着すると体操服への着替えと持ち物の持ち込み制限を受け灼熱の砂浜に並んでいた。全体的にだらけた様子ではあるが、特にAクラスとBクラスの生徒は引き締まった表情で急に設置された壇上に登る真嶋先生の言葉を待った。

プロレスラーのような体格からは意外という声がよくきこえてくるほど頭も良く優秀な教員らしく複数の免許を持っているらしい。

その真嶋先生はメガホンを手にして話し始める。

Dクラスの王、龍園翔もまた試験を予期し真剣に耳を傾けていた。

「今日、この場所に無事つけたことを嬉しく思う。しかしその一方で1名ではあるが、参加できず船上待機である者がいることは残念でないらない」

「いるんすよねえ、イベントに参加できない残念なやつって」

龍園にそつと語りかけるように石崎がつぶやくが相手にしない。

真嶋先生は直接的な発言は避けていたが、今回欠席しているのは坂柳だ。身体的な理由であり、プライベートに配慮してのことだ。

裏では作業服に身を包んだ大人たちがテントの設営に取りかかり、無人島にはふさわしくないPCの類を搬入している。

「ではこれより——本年度最初の特別試験を行う」

聞き馴染みのないワードの登場に生徒たちはざわめくが覚悟してきた者たちの面構えは違う。冷静に続く説明を待っていた。

「期間は今から一週間。8月7日の正午に終了となる。君たちはこれから1週間、この無人島で集団生活を行い過ごすことが試験となる。なお、この特別試験は実在する企業研修を参考に作られた実践的かつ効果的な者であることを先に言っておく」

「無人島で生活って……船じゃなくて、この島で寝泊まりするってことですか?」

CかDクラスのあたりから疑問の声飛び真嶋先生は毅然とした態度で答える。

「そうだ。試験中の乗船は正当な理由なくして認められることはない。この島での生活は寢床から食料まで全て自分達で調達確保する。それら全てを考える必要がある」

はつきりと言い切られヤジを飛ばしていた輩も押し黙ると詳細説明に入った。

「スタートの時点でクラスごとにテント、懐中電灯をそれぞれ2つ、マッチを1箱支給する。また、日焼け止めや生理用品は無制限、歯ブラシも一人1つずつ支給する」

淡々と説明を続ける先生にくっついてかかる生徒もいたが正論を返され黙り込んだ。

そもそもどれだけ泣こうと喚こうと学校行事というものは行われるのだ。

与えられたテーマは『自由』

友人と遊ぶのも、バーベキューするのも泳ぐのも何をしても自由らしい。

「この無人島における特別試験では大前提として、まず各クラスに試験専用のポイントを300支給することが決まっている。このポイントを上手く使うことで1週間の特別試験を旅行のように楽しむことが可能だ。そのためのマニュアルも用意している。このマニュアルには、本試験のルール詳細やポイントで入手できるモノのリストが全て載っている。生活で必需品な食料や水などもある」

若干緊張していた雰囲気は弛緩して行く。

「この特別試験終了時には、各クラスに残っているポイントがそのままクラスポイントに加算されることになる」

弛緩したはずの雰囲気は何処へやら、浜辺を吹く風が音を巻き込んでいったのか一瞬の静寂が訪れ、どよめく。

最大でクラスポイントが300増える。それは月の配布額が3万円増えることだ。

生徒たちがやる気のギアを上げる。

「マニュアルは1冊ずつクラスに配布する。紛失などの際には再発行も可能だが、ポイントを消費するので大切に保管するように。また、今回の旅行を欠席した者はAクラスの生徒だ。特別試験のルールでは、体調不良などでリタイアした者がいるクラスにはマイナス30ポイントのペナルティを与える決まりになっている。そのためAクラスは270ポイントからのスタートとする」

真嶋先生はルール詳細を各クラス担任から聞く様に言うと一度解散の宣言をした。

「ククク、おもしろくなってきたじゃあねえか。おい坂上、マニュアルをよこしな」

奪い取る様に図書室にあるどのハードカバーよりも分厚いマニュアルを手にした龍園は早速目を通し始める。

「りゅ、龍園さん、俺たちは何をしておけばいいですか？」

「全員集めて坂上から説明を受けとけ」
「了解っす」

坂上先生がDクラスに説明をする最中、龍園は聞き流しながらマニュアルのページを捲り続ける。

マニュアルには真嶋先生の言うとおりルールの全てが記されていた。
た。

ペナルティとして

『著しく体調を崩したり、大怪我をし続行が難しいと判断された者はマイナス30ポイント。及びその者はリタイアとなる』

『環境を汚染する行為を発見した場合。マイナス20ポイント』

『毎日午前8時、午後8時に行う点呼に不在の場合。一人につきマイナス5ポイント』

一番重い罰に『他クラスへの暴力行為、略奪行為、器物破損などを行った場合、生徒の所属するクラスは即失格とし、対象者のプライベートポイントの全没収』

と記されている。

追加ルールとして

『島の各所にあるスポットを占有する事で1ポイント獲得。更新は8

時間ごととする。このポイントは決算時に加算されるものであり、試験中に使用する事はできない』

付随して

- ・ スポットを占有するには専用のキーカードが必要である
- ・ 1度の占有につき1ポイントを得る。占有したスポットは自由に使用できる

- ・ 他クラスが占有しているスポットを許可無く使用した場合50のペナルティを受ける

- ・ キーカードを使用することが出来るのはリーダーとなった人物に限定される

- ・ 正当な理由無くリーダーを変更することは出来ない

- ・ 7日目の最終日、点呼のタイミングで他クラスのリーダーを的中させたクラス1つにつき50 クラスポイント c 1、当てられてしまうとー50 クラスポイント c 1 増減する。

- ・ リーダーは必ず1人決める

ルールの詳細を理解した龍園は不敵に笑うとDクラスの中心人物だけを集め、他には待機の命令を出す。

呼び出されたのは頭脳派の金田、武闘派のアルベルト、石崎、伊吹の4人だ。

龍園が自らの考えをある程度詳細まで共有しようとしているのは前回の承太郎の敗北から学んだために相違ない。

現場の人間の判断が不味かったのは、指示が抽象的かつ当事者に思惑が伝わりきっていなかったからと判断した龍園は実働部隊には直接指示を出すことにしたのだ。

「今回の試験、まず俺と石崎、金田、伊吹以外は全員リタイアする」

「はあ!? 何言ってるのあんたふざげんのも大概にしなさいよ!」

龍園のぶつ飛んだ発言に伊吹がキレた。それをアルベルトが抑え付ける。

「まずは龍園氏の考えを聞きましょう」

頭脳派の金田が冷静に話を進めようと切り出す。

龍園はマニュアルにある白紙のページを千切り何やら契約書じみ

た物を書き上げた。

「これは？」

「200のポイント分の物資と引き換えに、毎月クラスの人数×2万
プライベートポイントのP r を振り込む事を契約させるものだ」

「なるほど、そう言う事ですか」

メガネを人差し指でくいとあげる金田。クエツションマークを浮かべる石崎、吠える伊吹、抑えるアルベルト。

「とても面白いアイデアだと思います。しかしながら、このままではあまりに詳細に欠く内容ではないでしょうか」

「ああ、その通りだ。あえて抜け穴は多い文言で書いたからな。この契約が成立すれば実質的な勝利を獲得した上で、ゲームでもポイントを獲得する」

「そううまく行くでしょうか？」

「いかせるのさ。そのためにお前たちがいる」

「全くわかんないけど、そんな契約どこが受けるのよ。まさかB？」

龍園が承太郎を意識している事は知っているので伊吹の中では真っ先に候補に上がる。

「アイツがこんなマヌケな契約結ぶ訳ねえだろバカが」

「今なん——「bad girl」」

アルベルトが喚く伊吹の口を手で抑える。

「でも、だったらどのクラスにやるんですか？」

「Aだ」

「Aクラスですか？ 1番ポイントには困ってなさそうですねけど……」

「クラスポイントは多いが、アイツらは内部抗争中だ。そしてその片割れ坂柳は今回欠席、当然葛城は全権を持ち結果を残して統一を図ろうとするだろう。そして、なによりもBクラスの急激な追い上げに焦っているはずだ。そこを狙う」

「な！ なるほどー！」

「まずは交渉次第だが、上手くいった場合の話をするからよく聞きやがれ」

ここまで丁寧に解説してくれる龍園に驚いている4人をよそに龍園は話し始める。

「残りの100で必要物資と俺たちが豪遊してリタイアしたと思わせる工作を行うためポイントを使い切る。その後、金田をC、伊吹をBに送り込んでクラスリーダーを探る。俺と石崎は島に潜伏だ」

「Oポイント作戦ですか、面白いですね」

「いや、他クラスのやつなんて受け入れてもらえないでしょ？ あんたバカなの？」

「お前の煽り方がワンパターン過ぎて心配だぜ伊吹。俺は今からお前らを殴る。運営方針の違いでモメて追い出されたと話しておけば馴れ合いのCクラスは確実に入れるだろう。その後は上手くやれとしか言えねえな」

「Bは？」

「空条が指揮をとるなら十中八九追い出されるだろうな」

「ど、どうするんすか？」

「追い出されれば潜伏して、妨害に徹しろ。物の場所を変えたり、可能なら盗んだりしてな。疑心暗鬼で内部崩壊してくれば最高だ。空条以外はカスだからな」

「入れたらどうすんのよ」

「警戒するのはむしろその場合だ。スパイと見越して泳がされる可能性が高い。その場合、俺たちの潜伏がバレかねない。人間関係の観察を中心に証拠を残さない様に妨害しろ。無理なら居るだけでいい。居るだけで食料やらでポイントを浪費させられる」

理解度に差こそあれど皆領いて話を聞いていた。

「連絡はマニュアルにあったトランシーバーで行う。お前らはどこかに埋めてリーダーを探し当てたら連絡しろ。それから伊吹でめえはリーダーを探さなくていい」

「は？ なんで？」

「空条なら俺と同じ事は思いついているはずだからだ。今は気にしなくていい」

「あつそ」

「ところで龍園氏、肝心の葛城氏がどこに居るのか心当たりはあるので？」

「ああ、やつなら洞窟に向かっているだろうよ」

「なんでと尋ねる伊吹を無視して龍園はひとり森の中へと姿を消していったのだった。」

「そしてしばらくして洞窟から降りてきたであろう道で葛城を発見した龍園は接触する。」

「おいおい、Aクラスのリーダー様がこんなところで何してんだよ」

「お前は龍園！ 葛城さん、こいつは色々と黒い噂の絶えない危ないやつです」

「外野が煩いが葛城の顔色が優れないのを龍園は見逃さない。」

「お前こそどうした龍園」

「ククク、その様子じゃ洞窟はBに取られたか？」

「ど、どうしてそれを……」

「弥彦！ 黙っているろ」

「凶星かよ。ま、そんなお前らを救済してやるべくきてやった訳だが」

「……何を言っている」

「龍園の思惑通り葛城は焦っていた。」

「しかもここにきてBクラスが先回りしていた事で拍車をかけている。」

「平常時の彼であれば聞く耳すら持たなかっただろう。」

「巡り合わせが悪いのか、はたまたこれが運命というものなのか。」

「葛城は悪魔の提案に耳を貸してしまったのであった。」

無人島へ行こう その③

無人島へ行こう その③

龍園が坂上先生からマニュアルを受け取るとほぼ同時刻、承太郎もまた茶柱先生から鈍器になりうる分厚さのマニュアルを受け取ると目を通し始めた。

他のBクラスの面々は茶柱先生先生からの追加ルール説明に傾聴している。

綾小路も承太郎の横に立ち、マニュアル内容を確認している。

その様子を窺っている松下だが、指示があるまでは待とうと決めて説明に集中することにした。

「先生、わりいんだけどさトイレってどこにあるんすか?」

下船時に済ませておくようにアナウンスが流れていたが、須藤は聞いていなかったらしい。

茶柱先生がクラスに一つ配布される簡易トイレを取り出すと場が凍りついた。

「もしかして、私たちもそれを使うんですか!?!?」

驚愕を通り過ぎて怒気を孕んだ声を上げたのは軽井沢グループの篠原だ。

篠原は物事をはつきりと言う性分で、彼女自身一定の支持を集めている。

篠原の叫びに茶柱先生は男女兼用で災害時に使用される優れものだとだけ返したのだが、それが呼び水になり篠原のボルテージが上がって行く。

しかし、多くの女子は篠原に同意見のため止めることもせず、櫛田、平田も無理に抑え込む事はできないと静観している。

「トイレくらいそれで我慢しなよ。揉めるような事じゃないだろ篠原」

「ふざけないで! 男子には関係ないでしょ! 段ボールのトイレなんて絶対無理だから!」

茶柱先生に向いていた篠原の矛先が池の発言により男子に向いて

しまう。

それにより不毛な言い争いが始まってしまう。

段々と試験内容から逸脱し、単なる誹謗中傷へと発展して行く最中、呆れ混じりに見守る茶柱先生の元に承太郎が向かい話をしていることに気が付いていたのは綾小路を含めて数人だった。

「おい、お前たち今はそんな事で言い争っている場合じゃないだろ？

まずはルールをだな「あんたは黙ってて！」——っな……」

冷静に状況を判断し、白熱して行く池VS篠原を止めようと始めに動いた幸村は篠原に撃退されてしまう。

明らかに冷静さを失っている渦中の二人はしばらく落ち着きそうもない。

今まできつかけがなかっただけで相容れることがなかっただけで、互いに積もり積もった不満もある。それに引火してしまっていたのだ。

尚も続く言い合いの最中、承太郎は必要なくなったマニュアルを平田に手渡しとあるページを開かせた。

「これは……」

「俺はアイツらを止めるつもりはねえ。せつかくの機会、膿は出し切っておいて損はないからだ。だが、お前が止めると言うのなら俺はそれを止めやしねえ」

平田が視線を落とした先にはポイント消費して購入することができる物品が一覧になっており、仮設トイレのあるページだった。

平田は承太郎を見て静かに頷くと声を張る。

「ちよつといいかな？ マニュアルの中にポイントを使って購入できる商品の中に仮設トイレがあるんだ」

「それ絶対いる！……っっていうか、ほんととはそれも嫌だけどダンボールよりは全然良い！」

写真付きのマニュアルのため、一部女子が平田の元に殺到する。

「平田、ポイントっていくら必要になるんだ？」

「えつと……20ポイントだね」

幸村の質問に少し弱々しく返した平田自身、20というポイントの

額がまた物議を呼ぶだろう事を察していたのだろう。

「は!? 20!? いやいやいや、もうちよつとで俺たちAクラスなんだぜ? 我慢しようぜそれくらい」

池の長所でもあり短所でもある声のデカさが悪い方に働く。

「あんたが決める事じゃないでしょ、大体あんたみたいなバカに何がわかるのよ」

「今そんな事カンケーないだろ! だいたいさつきからカンケーない事ばつか言いやがって。女子のそーゆーとこマジで意味わかんないぜ!」

派出所勤務の警官と婦警のように睨み合いがみ合うふたり。

「いいから落ち着けよッ!」

口数の少ない幸村が普段からは想像できない叫びをあげる。

「やつかみあつてる場合じゃないだろ。まず第一にポイントは個人の判断で使うのは良くない。決を取るべきだ」

「そうだね」

平田はせっかくだけできた流れを切らないよう合いの手を入れることに専念し始めた。

「茶柱先生、野外で用をたせばペナルティがありますよね?」

「当たり前だ」

「それに加えて、体調不良者が出れば30の損失。無理な節約は1週間、全員が健康維持して行くことに支障が出るんじゃないか?」

「1人でも体調不良者が出たらそれだけでかなりの痛手になるね」

「はつきり言うと、俺は池と同じ意見だ」

「だよな! ほらみろし——」だが、目的は1でも多くポイントを残す事だと思う。必要経費は払うべきなんじゃないだろうか。女子の肩を持つわけじゃないが、トイレやシャワーは衛生管理的に購入を検討してもいいんじゃないか?」

もし、クラスのポイントが0であれば、承太郎と出会っていないければ幸村は池に加勢し真っ向から戦っていた事だろう。

しかし、現状のクラスポイントと承太郎に感化された彼は早くも殻を破りつつあった。

女子サイドには当然異論などない。

池と共に戦っていた男子は釈然としない様子だが頭では理解できたのか渋々引き下がった。

幸村は彼らをケアできるほど器用ではないし関わりもない。

そこを担うのは櫛田桔梗だ。

すぐに池たちに駆け寄るとポイントを残そうとクラスのことを思ってくれてたんだよねと共感を示しながら愛想を振りまいていく。

池と篠原の間にかなりの亀裂を残しながらも、トイレ事変は幕を下ろした。

次の演目と言わんばかりに茶柱先生が追加ルールについての解説を始めていく。

「なあ堀北、お前は今回の試験どう思う？」

話がひと段落した段階で綾小路が隣にいた堀北に声をかけた。

「方針の事なら幸村さんと同じよ。Aクラスでの卒業の可能性を高めるには1ポイントでも多く残す事が先決。誰だってそう考えるんじゃないの？ あなたは？」

「概ね同意見だ」

「妙な言い方ね。何かあるならはっきり言いなさい。気持ち悪いわ」

「それは含みがあることに對しての気持ち悪いだよな？」

「そんなことより、私は今回の試験では役に立てそうもないわね」

「おい、話をそらすなよ。気になるだろ」

男として気になる点を追求しようとする綾小路だが堀北だけでなく周りにも見放されたのか葛城率いるA、一之瀬率いるCクラスが動き出したことにより喧騒に巻き込まれ真相を聞く機会も掻き消えた。

スタートダッシュで遅れまいと焦りが伝播するのを悟った平田が日陰へ移動することを提案してBクラスも森の中へと入っていった。

「こんな森、入って大丈夫かよ……」

ビックマウス山内が珍しく弱気だが無理もない。木々は生い茂り霧が立っているわけでもないのに少し奥は暗がりになり見通しが悪い。

緊急時には助けが来る腕時計をしているとはいえ、アウトドアに慣

れていない生徒からすれば恐怖でしかないだろう。

「それにしても凄いね空条くん」

「平田くんも最初は戸惑ってたけど、結局テント2つとも持つてるんだもんね」

平田がかなりの重さのあるテントを重そうに持ち上げているのを見て、承太郎は既に片手にテントを一つ持っていたにも関わらず「貸しな」とまるでスクールバックを担ぐように軽々と持ち上げる歩いていったのだ。

須藤が俺も持つぜと声を掛けていたが、別のトイレや配布物を持つよう伝え共に先頭集団を歩いていた。

須藤は承太郎に認められたいのか、肉体派が活躍できそうな内容を聞いて張り切っていた。

その少し後ろを歩く集団のさらに後ろ、綾小路と堀北は最後尾にいた。

「凄いわね、彼」

「プロレスラー並み、いやそれ以上のパワーかもな」

「あなたはクラスのために荷物持ち程度の貢献をしようとは思わないの?」

「いや、あの重量を担いであんなペースで歩くのは無理だろ」

「そう、あなたも役立たずね」

「さつきから随分と憂鬱そうだな」

「ええ、こういうのは私向きじゃないもの。島での原始的な生活も、1人じゃないところもね」

「えらく弱気だな」

綾小路には心なしか堀北の顔色は優れていないように見えた。

気が滅入った故かはたまた。

「少なくとも私が初めは軽んじていた須藤くんの方が荷物を持っていく分役に立っているわ」

「気にしすぎだろ」

自己肯定感が著しく低下している堀北を適当に慰めつつ歩くと先頭集団が開けた場所を見つけたらしく一旦休憩となった。

「これからどうするんだー?」

池が全体に呼びかけると承太郎が立ち上がった。

「ちよいと歩くが北に洞窟がある。まずはそこを目指す」

「ど、洞窟!?!?」

どうしてそんな事がわかるんだという疑問の声に船から見えていただろうと当然のように答える承太郎に一同が引いている。

「洞窟なら雨風凌そうだし最高じゃん」

「スポットもあつたりしてな!」

探検家気分の男子生徒たちのテンションが上がり、全体として明るい雰囲気に含まれつつある。

「そこんとこなんだかな、既に高円寺を先行させてスポットがあるならば占有させているぜ。勝手なことをしたようで悪いが、時間がなかったんでね」

「こ、高円寺が!?!?」

「あいつがクラスのために動いたのかよ!?!?」

「あの高円寺くんが!?!?」

クラスメイトの反応からどれだけ自由人として認知されているのかがよく分かる。

「空条、どうやってあいつ動かしたんだよ」

素朴な疑問を口にしたのは須藤だ。

「頼んだ、それだけだ」

「マジかよ」

時は遡りトイレ事変が始まった頃

承太郎は高円寺に話しかけていた。

「高円寺、ひとつ俺に貸しを作るってのはどうだ?」

「フハハハハ、GOOD。しかし承太郎、そのカードは3年間で切れる

のは一度だけだ。先の長いこの状況で切るのは得策ではないと、親友として忠告しておこう」

「今後直接的に^{クラスポイント}C1が増える試験が何回ある？ 2回か？ 3回か？ そこん所はわからねえ、だがな、捨てるポイントを捨てるってのは俺の主義に反するぜ。何もせず速攻でリタイヤしようなんてのはもつてのほかだ」

力強い承太郎の眼差しが高円寺を貫く。

「いいだろう、他でもない君からの頼みだ引き受けようじゃあないか。条件はS P Wの紹介、^{スピードワゴン財団}どうかね？」

「それで良い。しっかりと働いて貰うぜ」

「働く？ non non、私の興味が赴いた先に向かった結果、クラスにも恩恵があるだけなのだから。私は私の意志によって過ごさせ貰うよ」

「……やれやれだぜ。最低限、要所を抑えるのならそれで良い」

「交渉には高円寺六助の名を掛けて応えようとも」

承太郎は宣言を聞き、茶柱にリーダーを高円寺にすると伝え、直ぐにカードを受け取りマニュアルに付属していた地図とペンと共に高円寺に手渡した。

そして現在に至る。

5分後に出発することだけが決まり、各々足を休める事になり休憩に入る。

一部の生徒は承太郎の独断に困惑していたが以前の宣言と承太郎の実績を鑑みて後には納得していた。

「堀北、顔色が優れねえようだな。無理にペースを合わせる必要はない、ゆっくり洞窟を目指すと良い」

突然承太郎に話しかけられた堀北は困惑した。

横にいた綾小路も承太郎が訪れた事には少し驚いていた。

「そ、そんな事ないわ。それに迷惑はかけられない」

堀北は動揺しながらも返すが、承太郎はそれを無視して右手を堀北の額に当てた。

伸びてきた手に思わず目を閉じた堀北は、その感覚にびっくりして

目を開けた。

「な、なにを」

「37度2分といったところか。さつき迷惑がどうか言っていたな？ 迷惑というのなら、リタイアすることのないように体力を温存するんだな。綾小路、洞窟までの道のりはわかるな？ 堀北はお前が連れて来な」

「了解した」

「ちよつと、綾小路くんまで」

「ただ休むだけで引けば良いが、引かなければ薬も必要になるだろうな。まあ、回復に努めてくれ」

「……あなたに心配される日が来るなんて」

「本当にお前は俺をなんだと思っているんだ……」

承太郎が去ると堀北が一段と強く綾小路を睨みつけるが、体調不良ゆえに迫力に欠ける。

「あなたいつから空条くんと話すようになったの？ それに洞窟への道のりにしても……」

「浜辺にいた時に教えてもらったんだよ」

「だとしても道のりなんてすぐわかるものじゃないでしょう」

「ボーイスカウトをやったから森とか方角には強いんだ」

「また適当な事ばかり言うのね」

「ボーイスカウトと空手とピアノだけだぞ？」

「またひとつ増えてるわ」

「まあなんにせよ。お前は体調管理に努めるんだな。そろそろ出発するみたいだな、オレたちもゆつくり行こうか」

Bクラス御一行様が洞窟に着くと椰子の身を割って喉を潤している高円寺が出迎えた。

「どうだね諸君、私が確保したSPOTSは」

「スツゲエ……」

岸壁にぼっこり空いた穴は見た目以上に深く、中の空洞はクラス全員が過ごすのに十分な空間が広がっている。

男子たちは感嘆した後にはばくね？ と騒ぎ始め女子は暗さに不

安感を示したり、それを神秘的と捉えたりと様々だ。

承太郎が成果を尋ねると高円寺は海外映画の小切手を渡すシーンのように承太郎から受け取っていた地図を返す。

「自然としての魅力はかけらもなかったが、なかなか面白い造りをしている島だったよ」

地図には高円寺が抑えたスポットの位置と農作物が育っていることを示す視点がいくつも記されていた。

そう、いくつもだ。

スポットの数16、作物確認地点5。

承太郎としても想像以上の成果にほうと感心の声が漏れた。

移動時間や睡眠時間を度外視した理論値では8時間ごとの更新で1スポットにつき1日3ポイントを1週間で21ポイント。計336ポイントになる。

洞窟はほぼ島の北端に位置するが、その後ろにスポットが多数設置されていたらしく、この位置を抑えられるかどうかという学校側の意図を感じる作りになっていた。

それを抑えた結果とも言える。

「そこにある程度収穫したものは置いてある。自由に使いたまえ、フハハハハ」

見ればトウモロコシなどの穀物やスイカなどが置いてある。

「ところで承太郎、私として十分な成果と考えるが何か異論はあるかな？」

「異論が無いと聞かれれば有ると答えるぜ。当たり前の話だ、ここでお前がリタイアすれば30の損失が出る」

「しかし、だ。私が築いたものを活用し切れば300以上の利益が生まれる。私はそろそろいとまを頂くとしようじゃあないか」

「……やれやれだぜ」

↑
T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

無人島へ行こう その④

無人島へ行こう その④

「此処からはいくつかのチームに別れてうごく。まずは高円寺が抑えたスポットを確認、8時間ごと更新する最もハードな班、更新時以外は次の二つに入る事になる。ひとつは生活に必要な食料や材料の調達班、残るはホームを守り、料理なんかを中心に行う班だ」

洞窟の入り口に近い日の光のある場所に円陣を組みBクラスは会議を行っていた。

奥まで空間が続くが寝床以外の用途で使うのであれば灯りが必要になる暗さだ。

洞窟内で火を焚き続ければ一酸化炭素中毒の危険があるためランタンなどの備品の購入も検討せねばならないだろう。

Bクラスの面々は承太郎の話を聞き首を縦に振る。各々が希望を考える間を置いて決を取る。

「更新組は他クラスへのカモフラージュと確実な更新のために固定メンバーでそれなりの速度で移動する。体力に自信のある奴に頼みたいぜ」

ハードルを一気に上げる承太郎だが、実際1日に3回の更新と夜中に起きることも考えるとスタミナという体力面以外にも精神的な体力も必要だ。

目の前に置かれたハードルを見て尚拳手をするメンバーに言い出しつぺの承太郎、静かな武闘派三宅、承太郎の視線で渋々挙げた綾小路、ムードメーカー平田、そのほかに運動部の男子3人だ。

須藤は実働時のみ参加予定で、この場は池達と行動を共にすることにする。

「平田は残った方がいいんじゃないか？」

名乗りを挙げたメンバーを見て意見したのは幸村だ。

「ホームにいるべきとまでは言わないが、女子のこともある。居てくれた方が助かると思うんだが」

「確かに平田くん居たら頼りになるよね」

「さんせー」

平田はどうしたものかと承太郎を見る。人数的には充分だった事、幸村の意見の妥当性を鑑みて承太郎は首肯した。

「ありがとう、残る方がクラスに貢献できるならそうさせて貰うよ」

その後、解散後の行動班が決定され購入物品厳選が始まった。

事前に洞窟内を抑えられたことと男子の強い意志により配布されたテントを2つとも女子に、追加購入で1つ10ポイント使うテントではなく男子は10人分3ポイントのエアマットを2個購入する事にした。

衛生管理品として20ポイントの仮設トイレとシャワー、5ポイントの調理器具セット。その他に1ポイントの救急セットや洞窟内を照らすランタンなどの購入を全体で確認し、ホーム待機班が他に有用性の高いものが無いか検討する運びになった。

「まずはこの先だ」

地図を見ながら承太郎を先頭に歩いていく。

スポットの数を全体共有はしていない。高円寺の大きすぎる功績に胡座をかかれるのは困るといふ承太郎と平田の判断だ。

そのためこの更新班にも緘口令が引かれている。

「つて、おいここ崖じゃねえかよ！」

確かに地図には続きがあるが、一見するとサスペンスドラマのラストシーンばりの崖。

一寸先は闇ならぬ海だ。

「あそこにあるのハシゴじゃ無いか？」

一同で周囲に何かないか探すと綾小路が何かを見つけたらしい。

そのハシゴを降りるとログハウスというよりは物置小屋といった風体の建物があつた。

中にはBクラスが占有していることを示すパネルと2本の釣り竿と投網が置かれていた。

「これは使えるんじゃないか？」

「そうだな、持って帰るとしよう」

「しかもルアー付きか、経験者が居れば心強いが」

「問題ねえぜ、そこにいる綾小路が趣味でやっているらしいんでな」

「それは頼りになるな」

「……やれやれだな」

三宅たちの期待の眼差しを一身に受け、流れに身を任せる綾小路であつた。

承太郎一向がスポット巡礼を行なっている裏側、探索班のひとつ三馬鹿班は森に入り、焚き火用の薪拾いをメインに活動していた。

「大量だぜー」

須藤は手当たり次第に長短、大小関係なしに落ちている枝や木片を拾い、ジャージを巻いて作った薪入れに差し込んでいく。

「おーい健、そんな折れたばっかみたいなのは水分多くて燃えにくいんだよ」

池は手頃な枝を拾い上げ折ってみせるとパキツと乾いた音を鳴らした。

「こういう乾いたの優先で探してくれー」

「まじかよ、詳しいな寛治」

「ちよつとキャンプ行ったことがあるぐらいで全然自慢できないけどな」

「いやいやすげえって、頼りにさせてもらうぜ」

「お、おう」

照れ隠しに俯きながら薪を拾う池だが、そのペースは確実に上がった。

男とは得てして実に単純な生物なのである。

男三人和気藹々とだべりながら薪を拾い三人とも抱え切れなほどの薪が集まった。

「こんだけあれば充分なんじゃね？」

山内は額の汗を腕で拭う。

「んー、料理とかするならもつと要るかな。薪って太いの以外マジで秒で無くなるんだよ」

「何往復でもしてやるぜ！」

「すごい気合だな」

活力に溢れる須藤に2人は若干引くと同時に心強く感じた。

「往復するなら多少湿ったやつも持って帰って干せば使えるだろうし、良さげなのあったら持って帰ろうぜ」

三往復もする頃には時間も程よく過ぎており、4時30分を回ろうとしている。

圧倒的な体力を誇る須藤とキャンプに慣れている池は意気揚々と薪を拾ったり生っている果実を回収したりしている。山内は「明日は女子と班組みて〜」と何度も呪言のように呟きながら野山を練り歩いていた。

その帰り道、3人の視界に大木に背中を預けるようにして座り込んだ女子生徒が一人写り込んだ。他クラスの生徒だが始まったばかりの無人島試験、一人でいること自体が異様な光景で視線を引く。

女子生徒の方も三馬鹿に気づくと、一度視線をあげ来訪者を確認するが興味でも失せたかのように俯いた。特徴的な青がかったショートカット、三馬鹿は知らないことだがCクラスの伊吹だ。

送り込まれてきた際、同情をかい潜入しやすいようにするためか痛々しく頬を腫らしている。龍園かアルベルトに打たれたのだろう、かなり機嫌も悪そうだ。

「おい、あれ……」

誰が漏らしたのか声にすると「どうする？」と3人顔を見合わせた。まだ声をかけるには距離がある。戸惑いがうまれ、誰も駆け寄ろうとはしていなかった。

「ほつとくのはやばいよな?」

「もし道に迷ってるとかなら確かにほつとくわけにもいかないよな」
「でもよ、なんか怪しくねーか? 普通こんなところ独りでいるかよ、迷うたってガキじゃねえんだから」

「いやいやいや、健。女の子が怪我して座り込んでんだぞ? 漢なら助けるべきだつて」

須藤が疑い出したことで山内は主人公ムーブを決めようと考え始めていた。折衷案とはいかないが池はふたりの話を聞いて「まあ、とりあえず声はかけてみてもいいんじゃないやね?」と提案し可決された。

「なあ、どうしたんだよ。大丈夫か？」

「……ほつといてよ。なんでもないから」

「あ？ こっちは心配して声かけてやってんだろ、なんだよその態度」
疑いがかかっている須藤は伊吹の態度が慓に触れたらしく、一歩前に出て凄んだ。

「誰もそんなこと頼んでない」

「なっ……寛治、春樹もう行こうぜ。なんでもねえらしいしよ」

「なんでもないっても、全然そんなふうにはみえないなあ」

頭に血がのぼったことを自覚した須藤はフツと息を吐くと気持ち切り替えようとする。しかし、山内は伊吹が気になって仕方がないと言った様子で話しながら何度もチラ見している。

「おや？ 野営のための薪拾いとはご苦労だねえ君たち」

「げ、高円寺」

考えるより先に声が出たのはやはり池だ。高円寺はまるでランウェイでも歩くかのような姿勢で山道を歩き近寄ると伊吹に声をかけた。

「そこにいる森ガールはどうしたのかな？ 見たところ誰かに打たれたようだねえ」

「別に大したことない。クラスの中で揉めただけ、気にしないで」

「ふむ、それは由々しき事態のようだが私にはこれっぽっちも興味がない。ちやうど浜辺へ向かうところなのだよ、エスコートしてあげようじゃあないか」

「は？ エスコート？ なんて？」

突飛ない高円寺の言葉に呆気に取られる面々、疑問符を浮かべていないのは高円寺だけだ。

「森ガールとはいえ、この程度の森だが独りで行かせるのは些かきばかりだね。リタイアするのなら船に戻るのだろう？」

「リタイアなんかしないし。あと森ガールっていうのやめろ」

「では、クラスに戻るのかな？」

「それもなし」

「リタイアもしない、クラスにも戻らない。随分とわがままじゃあな

いか。無論、後のことは彼に任せておけばなんの問題も無い。だがね、私は私が進んで関わった事柄にしようもないちよつかいや因縁をつけられたくは無いのだよ」

「あんたさつきから何言ってるの？ ウザいんだけど」

伊吹が睨みつけるが高円寺は全く気にせず続ける。

「今ここで君を見逃してホームに潜伏させることを許すというのは美しくない。スパイの君をね」

「……スパイ？ 何言ってるんのアンタ」

内心では目的を言い当てられ焦る伊吹だが、表情には出さず反対に高円寺の目を見て言い返した。

「私は国語のティーチャーでは無いのでね言葉遊びをするつもりはない。私と共に浜辺まで戻りリタイアするか、クラスに戻るか君が選べる選択は二つに一つ。選びたまえ」

「なんでアンタにそんなこと決められなくちゃいけないわけ」

「他クラスへの暴力行為は即失格だそうだが、自クラスではどうなのだろうね、私が確かめることになるのかな？」

「……っち、クラスに戻る。独りでいいから付いてこないで」

「最もツマラナイ解答だが君がそうしたいというのならそうすればいいとも。私もこれで失礼するよ、アデュー」

人差し指と中指を合わせ星が飛びそうなウインクを決めながらそれを振る。むかつく態度ではあるが絵になるから何もいえない。

伊吹は荷物を手に取ると森の中へ姿を消した。三馬鹿はただ舞台を見る観客のように二人のやりとりを見ているだけだった。

浜辺に向かうと言っていた高円寺が二度と戻らなかつたのはいうまでもない。

三馬鹿がベースキャンプに戻ると池は早速設置されたトイレに行き、残る二人は洞窟の手前でマッチ箱を平田から受け取り薪を組み始めた。

海外映画で見る豪快豪華なキャンプファイアーのような太い薪木を井の形に4段ほどバランスを崩りながら組む。見た目それっぽく仕上がったことに二人は満足げに頷くと山内がマッチ箱を開封し一

本取り出した。

勢いよく側薬に頭薬を擦り付ける山内だがなかなかこれが難しく着火しない。

「おいおい春樹だっせーぞ。貸してみろ」

得意げにキャンディーを食べる女の子のように舌を出した須藤と納得いつてなさげな山内が選手交代する。

須藤が力強く擦る。瞬間マッチが見るも無惨に中程で折れてしまった。

「……まじか」

「健もかわんねえじゃねえか。いや、ダメにしてない分俺の方がマシだな」

「るせえ」

「来たー！」
どんぐりの背比べをしながら再び選手交代すると今度は着火した。

嬉しそうに山内が薪をマッチの火で炙るが燃え移る前にマッチが燃え尽きてしまった。

「あれ？　つかなくね？」

「あれだろ？　火は下から上にあがるから一番下の木からもやすんじゃねえか？」

「なんかそんなんあつたな、よしもう一回やってみるか」

「薪なんか組んで何やってんだ？」

「何って寛治、決まってるだろ焚き火だよ焚き火」

「こんな太いのマッチで火つくわけないじゃん、まあキャンプファイアーとかする時は灯油とか撒いて着火させたりもするけど」

「え、つかねえのこれ？」

「なんのために最初細い枝拾ったんだって話。あれとカラっカラの葉っぱとかを組んで……ちよつととつてくるわ」

帰ってきた池は手頃な材料を持ってき空気の通り道を確保しながら器用に焚き木を組んでいく。慣れた手つきで作業する池を感心しながら見守る二人。

池が枯れ葉に火をつけると枝葉に燃え移り徐々に火が大きくなって

ていく。

「とまあこんなもんだ」

「すっげ」

「普段と違って頼りになるぜ寛治！」

全く他意はないのだが須藤は一言多い。

「一言多いわ。でも実際、基礎の基礎だから覚えたら誰でもできるぜ」

漢3人火を囲み、薪をくべる。そんな非日常の雰囲気感化された山内はほんの少し自分に酔ったような雰囲気話し始めた。

「俺、佐倉狙おうと思ってるんだよ」

「誰だよそれ」

佐倉は目立つ生徒——影の薄い生徒だ。クラスメイトにさして関心のない須藤は顔がパツと浮かばない。

「メガネの根暗な感じの子だよ、おっぱいやばい子」

「あー、わかったわ」

「でさ、このキャンプ中かっこいいとこ見せて告ったらイケるかな？」

「俺的には桔梗ちゃんねらうやつが減るのはありがたいけどさ、さすがに告んのは早くね？ 喋ったことあんの？」

「ないけどさ、一回告られて振ってるし、イケるかなって」

山内は以前ついた嘘を重ね掛けた。ふたりも冗談と捉えていた一件だったが、この場でもう一度出されたことで現実味が増す。

「あれ、まじだったのかよ。ふつーに嘘だと思ってたぜ」

「俺も」

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ。協力してくんね？」

山内の真剣な眼差しに二人は頷きで返す。

「俺が桔梗ちゃんにアピんのも協力しろよ？」

「俺も堀北に……………」

「お前ら……………やっぱ持つべきものは友だよな」

山内がしみじみいうと焚き火の上に手を差し出す。それに続き手を重ねると3人は手を空に掲げたのだった。

5時を回ると大量のトウモロコシを抱えた承太郎一行と果物類を手にした女子チームが焚き火の煙を目印に帰ってきた。

承太郎一行は確実に食用になるもののみを持ち帰ってきていたが、女子さんは多少危険にも思うが食べれそうという基準で様々な果実を持って帰ってきており、平田が介入しているが仕分けに難儀していた。

「お、これクロマメノキじゃん。桔梗ちゃんが見つけたの？」

焚火付近にいた池がやってきて、果実を一つ掴み言った。

「寛治くん、これが何か分かるの？」

「ああ。クロマメノキって果実だよ。昔山でキャンプしたとき食べたことあるよ。見た目通りブルーベリーっぽい味がするんだ。

こっちはアケビだな。これも甘くて美味しいよ。いやー、懐かしいなー」

別に格好つけようとしたわけじゃない。懐かしい果実を見つけ子供のような笑みを零す池の姿を見て誰もが感心した様子だった。

承太郎もそのひとりだ。

そんな池に対し篠原も別の果実のことで質問をぶつけ、それに素直に答えていた。

火種は無数にくすぶっているものの、ちよつとしたことでクラスが今日一番まとまっている。

「寛治お前マジですげえな。火もつけてくれたしよ」

須藤が素直に感心し、言葉にする。

「煙を見れば、森で迷ってもキャンプ地に戻って来られるだろ？」

「あ、それで私たちもすぐ戻れたんだよね。寛治くんのお陰だったんだ！」

その分、別のクラスに見つかるリスクも抱えることになるがリタインの方が大きい。

櫛田だけじゃなく、他にも思い当たる生徒が居たのか感心したように頷いた。思わぬ注目と尊敬の眼差しに天狗になるかと思っただが、池は櫛田ではなく篠原と向き合った。

「……………なあ篠原。今日一日考えてみたんだけどさ。こんな何も無い島で、トイレのない生活なんてキツイよな。ポイントを守るためだ

からって言い過ぎた。悪かったよ」

「な、なんで急にそんな謝んのよ」

「思い出したんだよ。俺が初めてキャンプした時のこと。その時は酷いトイレでさ、虫が這ってるのは当たり前、汚れ放題だった。だから用を足すのが嫌で嫌で、親に帰ろうって文句言ってた自分を思い出した。まして女子なんだから尚更だよな。」

池は自分で状況を把握して冷静になることが出来る様だ。承太郎もこのやり取りを少し離れたところから見守っている。

やがて篠原もバツが悪そうにこう続いた。

「私も……………ごめん。感情的になり過ぎてたと思う」

互いに視線は他所を向いていたが、互いを少し認め合うことができた。

「やるじゃあねえか池」

承太郎に声をかけられびくりとした池だが、たいしたことねえよと気負わずに返す。

「さて、一度全員で集まってくれ」

承太郎の呼びかけで39人の生徒が洞窟の入り口付近に集合した。「現状Bクラスが使用しているポイントは55ポイントだ。そして食料と飲料水がクラス単位で1食6ポイント、セットなら10ポイントだ。1日2食として日に20ポイント、最終日はちと腹が空くかもしれないが抜くとして110ポイント、締めて165ポイント。これが現状使用する予定のポイントだ」

承太郎が話し終えると幸村が手を挙げた。

「食事は採ってきた野菜とかで代用すれば更に節約できるんじゃないか?」

何人かの生徒は賛成の意を示している。三宅もそれに続いた。

「スポットに釣竿と投網もあったし、明日からは魚も獲れるならいいんじゃないか?」

歓声が漏れる。

無理もない、全てがうまく運んでいるのだから。

「そのところは専門のやつに聞くのがいいんじゃないやあねえか?」 篠

原、何かわかることはあるか？」

「え？ わ、わたし？？」

突然の名指しにテンパる。

専門と言われた篠原は料理部、調理は当然だが高度育成高等学校では栄養学についても多少学んでいる。

落ち着きを取り戻した篠原は恐る恐る口を開いた。

「ん〜、1日2日なら大丈夫だと思っただけだけど炭水化物がないとお腹もすぐ減るし、エネルギーが足りなくて体調管理が難しいかな？」

……多分」

「さすが篠原さん！」

「篠原詳しいな！」

「助かるよ篠原さん、食事はセットで買った方がいいかもしれないね、リタイアになると元も子もない。とはいえ充分な量の食糧とも限らないから魚や野菜は間食用に調達するのがいいかもしれないね」

男女問わず褒められて篠原は頬を朱に染める。

平田が出した意見にクラス中が賛同する。

まとまりを見せつつあるBクラスの雰囲気は夜間の点呼実、高円寺のリタイアを知り士気が下がると思われたが逆境に立たされより強固なものになったのだった。

無人島へ行こう その⑤

無人島へ行こう その⑤

無人島生活2日目、早朝。

慣れない環境に適応しようと無理した身体を労うかのように全員が爆睡している。夜間に起こされスポーツ更新に付き合っていたメンバーは尚のこと眠りが深い。

承太郎が洞窟外に出ると、まだ日が昇り始めたばかりの薄暗い空が出迎える。

夏真っ盛りとはいえ、大地が吸収した熱を放出しきった早朝の空気は澄んでいて実に居心地が良い。

承太郎は大きく息を吸うとバケツと投網を持って島の最高標高近くにある小さな水源に向かう。

「おはよ、空条くん」

振り返って見ると松下が小走りで元へ駆け寄ってくる。

承太郎が挨拶を返すと、松下がついてくると言うので了承し歩き始めた。

「私にできること、何かあるかな？」

「体調を崩さず最後まで過ぐす、それで充分だ」

「それはほら、みんなそうだよ？ わかるでしょ？」

「……3日もすれば疲労によるストレスから皆気が立つ頃だろう。女子サイドのメンタルケアに気を遣ってくれ」

「クラス内の対立はもう避けたいもんね」

「そういうことだ」

ストレスを緩和するような評価や活動、男子やその他に関する不満への適度な同調と抑制。

抑え込むだけではない、溢れかえるだろう感情の波のコントロール。

容易なことではないが、松下は自分ならできると確信に近い自信を持っていた。

何せ最も重要な軽井沢グループの機嫌取りは内部からであれば案外簡単だからだ。

森に入ると少しじめつとした空気を肌で感じる。

日の当たらない分涼しいのかと思えば、風通しが悪い分少し暑い。

「初日を終えて女子の方はどうだ」

「みんな疲れて即寝ちゃってたからなんとも。力仕事とか男子に頼ってる仕事多いでしょ？ だからまだ不満とかは少ないかな」

「少ない？」

「まあどうしても共同つてところに引つ掛かっちゃう子はいるんだよね。でも、その辺りは上手くやってみるよ」

険しい道のりを進み、水源に着くと承太郎は顔を洗った。この水源はBクラスが抑えたスポットのひとつだ。

上流というだけあり非常に透明度の高い綺麗な水質をしている。そのままでも飲めてしまいそうなほどだ。

溪流の王者イワナの姿もあることから、水質の良さが窺える。

「ところで空条くん、それ投げられるの？」

松下が指差すのは当然投網だ。

一般の男子高校生のうち適切に扱える事ができるのはほんの一握りだろう。

「問題ないぜ、何度か見たことがある」

「え？ てことはやったことないの？」

松下は承太郎が首を縦に振ると苦笑いを返す。

しかし、恐ろしいのは承太郎の観察眼と身体操作感覚の鋭さ。

投網を打った時に網が手から離れないように、手縄を固定する輪を作ると、利き手と反対の手首に輪を通していく。

流れるように段取りをしていく承太郎はあつという間に投擲の姿勢に至った。

そのままフリスビーでも投げるかの如き美しいフォームで放たれた網は綺麗な縁を描き水面に落ちる。

「すごい綺麗ー」

思わず大きな声を出してしまった松下はハツとして少し照れたように身をよじり魚が掛かったのかを楽しみだと伝える。

承太郎が網を回収すると3匹の食べ頃なサイズの魚がかかってい

る。

松下がバケツで水を汲みそこへ放す。

「こういうのって本当にかかるんだね」

「小池程度のサイズしかないこの水源ではそう何度も捕れないだろうがな。場所を変えるぜ」

投げた後の紐解という最も大変な作業もテキパキと終わると川を降りながら何度も網を打つ。

数にして20匹ほど確保してベースキャンプへと戻ると慣れた手つきで火を起こす。

「食べるか？」

食べると答えた松下の分を含めて2人分、枝を研いで作った串に魚を刺し、火にくべた。

承太郎が火を管理し、火加減を調整していると向かいの茂みが揺れた。

「松下、少しここを頼む」

「え？ いいけど、どうかしたの？」

「野暮用というやつだぜ」

承太郎が真っ直ぐ茂みへ向かうと、揺らぎの正体が明らかになる。

「てめえは神崎隆二だな？」

「そういうお前は空条承太郎」

神崎はCクラス、一之瀬のクラスの生徒だ。

「Cクラスの参謀が朝っぱらから偵察か」

「気を悪くしたのならすまない。1日経って他クラスがどうしているか気になってな。それにしてもBクラスはいい場所を抑えたな、万が一天候が悪化しても全員が入れる大きさを雨風を凌げるじゃないか？」

素直に話す神崎に好感を持った承太郎は多少話してもいいかと判断した。

「そうだ。ひとクラスは収容できる広さになっているぜ」

承太郎の回答が意外だったのか神崎は驚いたように承太郎を見ると口角を上げた。

「俺たちはこの先山を降った先にある折れた大木沿いの湖の辺りをベースキャンプにしている。興味があつたら来てもらって構わない」

「随分と余裕があるようじゃあねえか」

「互いに有益な情報があるなら交換するのも手だと考えている。別に余裕があるわけじゃない」

神崎は真つ直ぐ承太郎を見て続ける。

「耐えのしのぶこの試験、より良い形で終えられるのならそれがベストというのがCクラスの考えなんだな」

「そうやすやすと方針を晒すつてというのはどういう要件だ」

「本音を言うと、攻めを捨てた分そちらも捨ててくれるとありがたい。そう考えている」

「簡単に返事することは出来ねえな」

「それで構わない。ただ、俺が伝えたかっただけだからな。これで失礼する」

神崎は先程説明していた方向へ歩いて行つたのだった。

様子を気にしていた松下に説明をするという具合に焼きあがつていた魚を食す。

匂いに釣られてか起きてきた生徒のうち希望者には同じ焼き魚を振る舞いBクラスは2日目を始動するのであった。

昼下がり、盗賊団の団長がコーヒープレイクをするにはちようどいい時間帯。鬱蒼と茂る森の中、高さのある木に登り望遠鏡を構える人影が1つ。

「特に動きはないわね」

器用に木の別れ目に腰をかけていた伊吹は望遠鏡でBクラスの動向を観察していた。身軽に飛び降りると結果を下で待つ龍園に報告する。

「で？ お前のプランはどうなってる」

「近づけないから全部ペアにきまつてんでしょ」

「ペアってお前そんなんでどうすんだよ」

「は？ 食って寝るだけのアンタに言われたくないんだけど」

石崎は作戦上明日から何もすることができない。

「女子の下着でも盗んで男子のカバンに突っ込んでくれば揉めるかなとは思ってたけど、女子は洞窟の奥っぽいし、トイレとかの破壊は外部をまず疑うだろうし。偉そうにいうならなんか案があるなら出しなさいよ」

伊吹と石崎はいがみ合う。お似合いと言えればお似合いな様子を見て龍園は不愉快そうに口を開いた。

「少し黙れ」

一言で制すと続けた。

「空条どもがスポット更新に出たら石崎、洞窟に2、3人連れて豪遊を見せてつけろ。不満を煽るだけ煽って引き上げてこい。間違っても失格ペナルティには触れるなよ？」

「う、うっす」

「そんなんでなんか効果出るわけ？」

「不便を不満をなんとか呑んで、耐えているやつにはこたえるはずだ、日が経つに連れな。伊吹、お前はDクラスのリタイアを奴らに教えて……いや、リタイアに乗じて潜伏だ」

「言わないわけ？」

「いいや、どのみち俺たちのリタイアは全員ではないにしても耳に入るはずだ。なら、試験の後半であればあるほど望ましい。わざわざ今日教えてやる必要はねえ」

「あっそ」

「後は石崎と待機しとけ。こつから覗いて空条の人間関係を掴めりやAクラスとの契約、リーダー当て……俺の勝ちだ。Bはお預けだな」

「さすがです龍園さん」

「落とし物拾わせて窃盗とか、暴力沙汰起こさせて失格誘うとかない

わけ?。」

「簡単にできるならやってんだろがタコ」

「いや、窃盗の方とか割と現実的でしょ」

「腕時計を破壊して森に置いとくってか? 相手が否認して学校側が争った形跡を捜査し始めたら終わりだ。無理矢理取ったならその後が地面と服に残る。どっちにしても単独行動を基本しないこの試験で起こすのは容易くはない」

論破され若干機嫌悪そうにしながらも伊吹は大人しく下がった。

Aクラスとの契約は成され、金田はうまく潜入を成功させた。龍園の策略は順調に展開されている。

「B There's a guest on the beach.」

「あ? 招いた覚えはないが、誰だ」

草木をかき分け進んできたアルベルトが先導し道を作っていく。

ビーチにつけばバーベキューやマリンスポーツを楽しむDクラスの姿がある。その一角、パラソルが立っている場所に男は待っていた。

側頭を刈り上げた金髪を短く束ねたヘアスタイルが印象的な優男。坂柳派の橋本正義だ。

「取り込み中だったか? 突然悪いな」

「Aクラス様が何のようだ」

「そう邪険にするなって」

龍園が舌打ちすると橋本は要件を話す。

「知っての通りうちのクラスは一枚岩じゃない。で、コレを渡しにきた」

取り出された紙切れを受け取ると、龍園は目を通す。そこには一人の生徒の名前が書かれていた。

「そいつがうちのリーダーだ」

「クク……正気かてめえ」

「ま、そういう方針なもんでね。特に見返りもいらぬ、好きに使ってくれ」

橋本はキザつぽくウインクして去っていく。

「罨なんじゃない？ リーダー教えるとかありえないでしょ」

「そうですよ龍園さん、リーダー当てられた時のデメリット考えたらこんなこと出来ないっす」

「Be quiet」

口々に話す取り巻きをアルベルトが黙らせる。龍園は少し考えて伝えた。

「最大値を出したい葛城にすり替えはねえ。坂柳派の肩を持つようで癪だが使えるものは使わねえとな。使える物は親でも使えというやつだ」

龍園が不敵な笑みを浮かべている頃、Bクラスにも坂柳派の生徒が訪れていた。

「はい、これ」

焚き火のそばに向かい合うのは承太郎とAクラスの神室真澄だ。

神室は橋本が龍園に手渡したものと同じものを取り出した。承太郎は一読して向き直る。

「何の真似だ」

「そんなこと私に聞かれてもね。何かあるなら坂柳に聞いて」

「坂柳はこの試験には参加していませんじゃあないか」

「そうね、事前に出された指示に基づいてるだけ。じゃ、渡したから」

神室はすぐにその場をさろうとするが、承太郎に呼び止められた。

「こいつを受け取ることはできないぜ」

指で挟んで差し返す。

「そんなこと言われても困るんだけど。いらなら捨てると燃やすならすれば？」

承太郎は焚き火に紙を投げ入れる。

「坂柳に伝えな。つまらねえ真似をするんじゃないとな」

↑
T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

無人島へ行こう その⑥

無人島へ行こう その⑥

「佐倉」

「は、ははは、はいっ」

「どんどん糸出てるぞ。魚掛かってるんじゃないか？」

「え、ええと、えいっ」

無人島生活5日目。

3日目から釣り担当というポストに収まった綾小路は山内の猛アピールから逃れるように立候補してきた佐倉とペアを組んでルアーフィッシングに臨んでいる。

初日こそ投げては絡め、巻いても絡めと散々な佐倉だったが流石に慣れてきたのかそこそこの釣果を挙げていた。

綾小路の横顔に見惚れていた佐倉はラインが出ていくほどの大物がヒットしたことに気づいていなかったが、綾小路の指摘を受けて遅れながらも一応合わせてみる。

そもそもロックしていないことにもびっくりだが、ほぼ呑み込みに近いかかり方をしていたのかバレることなくリールを巻くがハンドルが重く苦戦する。

断崖絶壁で釣りをしているわけでは無いが、防波堤に比べれば幾らか高さのある岩場から投げているため引っ張られるようでは危険だ。

いち早く察知した綾小路は自分の竿を巻き上げて放置すると佐倉の手を取った。

密着する身体、重なる手。

佐倉の頭上には絵に描いたように蒸気が抜けていくようなぷしゅーとした湯気がたつ。

そのまま綾小路は竿を受け取るとファイトに入る。

流石はホワイトルームの傑物。ここ数日、持ち合わせの深すぎる知識をひとつひとつ試した結果、もはや達人と呼ばわれる域に到達している。

用語や技術について解説しても佐倉が理解しきれないことを察し

て途中から教えてはいない。

あたりを取って巻き切れば釣れるからだ。

ただ、大物とのファイトはその限りではない。

綾小路は魚の呼吸を読みきって釣り上げた。

「すごい、おつきいね。なんて言う魚だろう?」

「シーバス、鱸だな。こんなのを掛けるなんてすごいじゃないか」

「わ、私は投げただけで何も……」

ビギナーズラック、ただ投げて巻いてを繰り返していたら偶然かかった大物だ。

バケツに魚を移すと綾小路は竿を振る。

様になったその姿は凛々しく感じる。

「カメラあつたらな……」

「どうかしたのか?」

「な、なんでもないよ。そ、それにしても空条くんって凄いよね。勉強も運動も出来て、頭も切れるなんて、本当漫画の主人公みたいだよね」

バレていないつもり恋心を隠そうと矢継ぎ早に佐倉は言葉を紡ぐが、観察力が石仮面を被った帝王の域に達している目の前の男には隠し通せるはずもない。

「そうだな、あいつは別格だな」

「どうしてDクラスにいるんだろうね。私たちとしては居てくれなかつたら……とは思うけど」

「中学時代結構やんちゃだったらしいぞ……知らないが」

「はは、知らないんだ」

「同じ学校に通っていたわけではないからな」

「このまま終わればかなりポイント残せるんだよね?」

「何もなければな」

クラスとしてのまとまりを見せているBクラスは、プロデューズby龍園の豪遊を見せつけるという嫌がらせを不愉快に思いつつも、受け流し順調な無人島生活を送っている。

一方その頃、Aクラスホームキャンプの一角。

金髪くんとサイドテールガールはフライパンを振りながら歪みあっていた。

「いくらなんでもあんたスポットの誤使用はやりすぎでしょ」

「いやいや、うちの姫さまから葛城の完全失脚計画が施行されたんだからそうでもするでしょうよ」

「それは、まあ……て言うか、なんであいつの言いなりなのよあんた」

「俺は勝ち馬に乗りたいただけ。葛城じゃちときついでしょ、今後」

「そ?」

「龍園の契約内容ちゃんと見たか? あれに心から賛同した奴らにも正直マジかよって感じだけども、あんな穴だらけの裏切られても支払いだけするプランに気付けない奴だぞ?」

「……そ……れくらいわかってたけど。冷静で手堅い葛城がそんな判断するほど追い込んだのも坂柳でしょ?」

「まあね、手を取り合ってたら結果は違ったかもな。でも、それはないでしょ。あの2人だぜ?」

「確かにね」

「そういや聞いたことなかったけど、神室こそなんで姫さまの従者やってんのよ?」

「訳ありっただけ」

「ありや、心開いてくれてないのね」

「あんたみたいな蝙蝠を信用しろって方が無理でしょ」

「ははは、そりやそうだ……と、葛城動いたね。んじやま、行ってきますと」

あとよろしくと橋本は魚と野菜を炒めていたフライパンから離れ葛城の後をつけた。

葛城はどこへ向かっているのかある程度地ならしされた道では無く、ほとんど獣道の様な鬱蒼と木々が生い茂る森の奥へ奥へと歩いていく。

なんとなく葛城の目的に見当が付いている橋本は、鬱陶しい虫を払

い十分な距離を空けてつける。

しばらくして葛城の足が止まった。

「画像を確認させてもらおうか」

「おいおい、挨拶もなしかよ」

「お前と馴れ合うつもりは無い」

「ククク、そうかよ。Aクラス様ってのは傲慢だなあおい」

葛城の密会相手は橋本の思った通り全員リタイアしたはずのDクラスの王、龍園翔だった。

まばらな髭を携え、髪はボサボサだ。

龍園はデジタルカメラを投げ渡す。葛城は受け取ると操作して撮影された画像データを確認する。

「Bクラスの方はどうなんだ」

「さあな、知りたきやてめえで探れや」

「Cクラスにはスパイを送り込めたらしいが、Bクラスではうまくいかなかったというわけか」

「だったらどうだってんだ」

「いいや、どうということはない。しかしこれでAクラスの勝利に大きく近づいた」

「ククク、たかだか1000や2000ポイントのために必死だなあ、おい」

「そのたかが1000ポイントに何を見ることもあるかもしれんぞ」
「誰が誰に忠告してやがんだ？」

突っ掛かる龍園を意に介することも無く、葛城は折り返してくる。

橋本は息を殺してそれをやり過ぎした。――が
「奇遇だな。坂柳の尖兵が何のようだ？」

「げ、龍園」

「人の顔見てそんなこと言うなよ、殺したくなつちまうじゃねえか」
「勘弁してくれよ。こっちとしては葛城監視してただけで何の用もないんだ」

両手を上げながら橋本は茂みから立ち上がる。

「だろうな。ここであったのも何かの縁だ、手土産にうちのクラスの

リーダーを教えてやろうか」

「いや、そんなおつかない情報いらないね。んじゃ俺はそろそろお暇させてもらおうわ」

龍園は足早に場を後にする橋本を見ることもなく、自らもベースキャンプもとい秘密基地に帰った。

「お疲れさまです、龍園さん」

石崎は川の水を煮沸処理した物を初日に使ったグラスを再利用した物に注ぎ渡す。

龍園は一息に飲み干すと空いたグラスを石崎に投げ渡した。

「何であんた律儀に教えてるわけ？ どう考えても損でしょ」

惰性なのかキャンプがしたいだけなのか未だ無人島に残る伊吹はむさ苦しい男たち同様に乙女的にはノーとどこぞの生徒会副会長が叫びそうないでたちをしている。

「伊吹、いい加減ないなりにその空っぽのオツム使って考えろ」

「あ？」

「お、おい伊吹」

「龍園氏は契約内容を履行した、それだけでしよう。もっとも、その後の支払いを見越してではありましようが」

1人だけ場違いな清潔さを保ったおかつぱ眼鏡が端的に説明するが伊吹はいまいちピンときていない様子だ。

「では、私は薪拾いの途中ですのでこの辺りで」

おかつぱはCクラスから分前でもらった食料を横流しして寄生先に戻る。

「にしてもBクラスの方はガード堅いつすね」

「ガードも何もすげ替える気なら偵察は無意味だ。仮にBのリーダーが割れたとしても指名なんざしねえよ」

リスク管理はする龍園である。

「ククク、収穫はあった。今回の試験結果の順位なんざくれてやるさ」

龍園は悪役じみた笑みを浮かべる。

「仕掛けるのは今回じゃねえ」

「負け惜しみ？ だっさ」

「そいつは違うぜ伊吹。今回、AとCクラスのリーダー指名に加えスポット占有ポイント。それに加えて来月から120万のポイントが流れてくる。これだけでも俺の勝ちといえる」

「そうですよね!」

「が、収穫はもうひとつある」

「何よその収穫って」

「Bのリーダーは空条承太郎だ」

「は?」「え?」

2人は龍園の突飛な発言に呆気にとられる。

「どうやって知ったのよ」

「ここで聞いたことは忘れてもらうが、これ以上はいえねえな」

だが、と龍園は続けた。

「こんな情報クソの役にも立たねえ訳だが……何とまあBクラスも一枚岩じゃないって事だ。ククク……女って奴はどいつもこいつもイカれてやがる。おっとつい口が滑り過ぎたようだ。お前たちは何も聞いてない、だろ?」

↑To Be Continued

それぞれの結果

それぞれの結果

無人島試験最終日。

最終点呼を10分後に控えた午前7時50分。各クラスは点呼時に確認される各クラスのリーダーについて情報をもとに予想を立てたり、全く気にせず最後の朝を過ごしたりしていた。

「よお、奇遇だな」

レッドカーペットに近い紅の床が船首から船尾まで続く豪華客船の乗り込み口。

そんな豪華絢爛な設備には場違いとしか言えない身なりの汚い男が呼びかけた。

しかし、その呼びかけに応える者は居ない。

「おいおい、無視かよ。冷てえじやねえか空条承太郎。ククク、お前が他の雑魚とは違ったことが証明されて嬉しくてちよつとばかりテンション上がってんだぜこつちは」

予定通り直前でリタイアし、他の生徒にリーダー権を移行した承太郎と龍園は船に戻ってきていたのであった。

「何のことだ。俺は見ての通り体調が優れねえんだ。部屋に戻らせてもらうぜ」

「おっと、そうだったな。俺も体調が良くねえんだった。つい忘れてたぜ」

自分と同じ行動を取っている龍園に対して警戒レベルを引き上げた承太郎だが、わざわざ話す事は何もなかった。

龍園の余裕に満ちた笑みが気掛かりとは思いつつ、確かめて何かを悟らせるような真似はしない。

「結果発表、一緒にみるか？」

「断る」

「つれねえなあ」

船上での邂逅など知る由もないBクラスの面々は最後の点呼のため洞窟前に集まっていた。

「あれ、空条君いなくない？」

環境の変化こそあれ、心穏やかに過ごした面々の表情は明るい。

そんな中で、今回の試験の立役者たる承太郎が見当たらない事で軽井沢が心配の声をあげた。

ほんとうだと、ざわざわした雰囲気広がる中平田が全員に呼びかけた。

「みんな、点呼が終わったら少し話を聞いてほしい」

平田は最終点呼の跡、敵クラスのリーダーは全て白紙で提出し、事前に承太郎に託されていた作戦内容を開示した。

スポット占有ポイントを確実に得るために承太郎がリタイアしたことを伝えた。

初めて聞く情報に驚きを隠せない一同だが、確実な勝利のために必要だという点において納得しない者は居なかった。

なによりも承太郎の案という点で盲目的な生徒すらいる。

具体的な数字や新リーダーは開示していないがそれはどこに耳があるかわからないからと試験終了後に話すことを確かめ、Bクラスは撤退の準備を始めた。

そして来たる試験終了の時。

灼熱のビーチに再び集合した生徒たちは正午になっても現れない教師を今か今かと待ちながら互いの苦労を労っていた。

『ただいま試験結果の集計をしております。しばらくお待ちください。すでに試験は終了しているため、各自飲み物やお手洗いを希望される場合は休憩所をご利用下さい』

そんなアナウンスが流れると生徒たちは一斉に甘美な飲み物を求め休憩所に集まった。

「てか、マジでDクラス全員リタイアしてんのな」

池はジュースを飲みながらビーチを見渡す。

確かにDクラスの生徒は1人もいない。

「なんかしらないけどライバル減るんだし、いいんじゃない？ な、綾小路」

山内は軽口叩きながら綾小路の首に腕を回す。

「ところでよ、綾小路。俺は男としてお前に言っておかねばならないことがある……」

首に回された腕の軌道が締め掛かってくることを予見しながらも綾小路はその流れに抗わなかった。

「何で俺が狙ってる佐倉ちゃんとお前がいい感じになってんだよ！」
ヘッドロックをかました山内が怒鳴る。

「痛いぞ……第一オレは行動班が同じことが多かっただけで特に何もしていないが……」

「うっせ、お前綾小路、あのおっぱいは俺のだからな!?!?指一本触れるんじゃないぞ」

「春樹、お前がモテねえのそゆところじゃねえか？」

須藤の的確すぎる指摘に締めが緩み、綾小路はするりと抜け出す。

居た堪れなくなった山内は標的を次に移した。

「か、寛治は篠原となんかいい感じだったよな」

「は？ べ、別にアイツとは何もねえし。俺の狙いは桔梗ちゃん一筋

だからなっ！」

「私がかしたかな？」

「き、桔梗ちゃん!?!?な、何も無いよ？ あ、コレ美味しかったから桔

梗ちゃんの分も取ってくるよ！」

全く取り繕えてはいない池だったが天が味方したのかキインという音が鳴り、拡声器を手にした真嶋先生が姿を見せた。

慌てて列を形成しようとする一年生だったが、それを真嶋先生が手で制止させた。

「そのままリラックスして構わない。既に試験は終了している。今は夏休みの一部のようなものだ、つかの間ではあるが自由にしている構わない」

そうは言われても、当然生徒たちには緊張が走り、雑談は瞬時に消

え失せる。

「この一週間、我々教員はじっくりと君たちの特別試験への取り組みを見させてもらった。真正面から試験に挑んだ者。工夫し試験に挑んだ者様々だったが、総じて素晴らしい試験結果だったと思っっている。ご苦労だった」

真嶋先生からの、迷いのない褒め言葉を受け生徒たちから安堵が漏れる。

「ではこれより、端的にはあるが特別試験の結果を発表したいと思う。なお結果に関する質問は一切受け付けていない。自分たちで結果を受け止め、分析し次へと活かしてもらいたい」

真嶋先生が次の言葉を発しようとした瞬間、森の木々を掻き分け1人の男が現れた。

「どうして石崎がここに!?」

現れたDクラスの生徒を目にして、他クラスに動揺が広がるが、それを気にすることなく真嶋先生は続けた。

「では、これより特別試験の順位を発表する。最下位は——Cクラス90ポイント」

堅実に取り組んだはずの一之瀬率いるCクラスの結果に当のCクラスが一番啞然としていた。

まさに、状況の理解が及ばないといった様子だ。

シヨックを受けた面々をよそに、真嶋先生は淡々と続ける。

「続いて3位、Dクラスの126ポイント。2位はAクラス、170ポイント」

「は!? Dクラスが126ポイント!?」

「リタイアしてたんじゃないの!?」

誰も想定していなかった順位、ポイントにビーチがどよめいた。

2位という結果を残したAクラスも、想定していたポイントではないらしく、渋い面をしている。

「そしてBクラスは……」

真嶋先生は結果を目にし、息を呑んだ。

「……355ポイントで1位となった。以上で結果発表を終わる」

「どういう事だよ葛城！」

一部、事情を知る平田などの生徒を除き、Bクラスの面々もあまりの結果に困惑する中、逆サイドでは怒声が張り上げられていた。試験結果の責任を追及する生徒たちが葛城を取り囲んでいた。

「うおおおおおお！ やったぜ!!？」

須藤の雄叫びを皮切りに歓喜の叫びを上げる、Bクラス。

ひとしきり叫び終わると、嬉しい困惑の中Bクラスは平田の元に集った。

「と、とりあえず船に戻ってから説明させてもらおうよ」

試験は終了となり、解散となる。出発は2時間後のようで、それまでは島に残るも、豪華客船で過ごすも自由とのことだった。

しかし、島に残る者は1人もおらず皆、平田について乗船していく。一同がデッキに着くとドリリンク片手に高円寺が迎え入れた。

「やあ諸君。1週間の無人島生活はどうだったかな？」

「てめえ、高円寺！ お前のせいで30ポイント失ったんだからな！ わかってんのか！」

「フハハ、池ボーイ、あまり強い言葉は使わない方が良い。どうやらまだ承太郎はクラスメイツに十分な説明をしていなかったようだねえ。今回の結果は私の功績が殆どを占めているということをお忘れもらっては困るのだよ」

「な、何言ってるんだよ」

「君たちが20ポイントの節約がどうか話している間に私が抑えたスポットの数は実に16。それをキープしきつていれば300以上のポイントを獲得することが出来たわけだ。他に何か私の輝かしい活躍について聞きたい事はあるかね？」

「ま、まじで……?？」

三馬鹿をはじめとして高円寺の話が信じられないといった様子で顔を見合わせる。

そこに少し遅れて承太郎が合流し、全員が自然と集まった。

「概ね高円寺の言う通りだ。平田から聞いていると思うが、そのポイントを守るために俺もリタイヤさせて貰ったぜ」

作戦全容を全体共有していなかったことを詫びつつ、あらましを説明したBクラスは改めて結果を喜び解散した。

「それにしても承太郎。私の想定より随分と獲得ポイントが低いのは一体どういう展開だったのかな？」

「健康状態に配慮したまでだ。誰もがお前の様に環境適応能力が高いわけじゃあねえ事ぐらいは理解しているだろう」

「まあ良いさ、私は契約を履行した。重要なのはその一点のみだよ。フハハ、卒業後を楽しみにさせて貰うとしよう。ハハハハハ、ハーッハハハハハ」

人差し指と中指を揃えて弾くと高円寺は高笑いと共に去っていった。

「そんなことよりみんな！ 打ち上げしようぜ、打ち上げ！」

結果発表で疲れが吹き飛んだ池が音頭をとるが、他の面々は流石に1週間の疲れは積もりに積もり今すぐにでもベッドに倒れたいというのが本音だ。

例え2ヶ月近く旅行し続けても体調一つ崩さない男たちも若干2名いるがそれはまた別の話。

「いいね。でも、今日は一旦体を休めて、また明日以降に是非やろう」「サンセー」

「お風呂いーこお風呂ー」

平田の案に賛成した生徒たちは自室や大浴場へと散って行った。承太郎も例に漏れることなく自室へと足を運ぶ。

長い廊下の曲がり角に近づくとぱちぱちと乾いた拍手が聞こえて来る。

「特別試験一位、素晴らしい結果ですね。おめでとうございます」曲がり角から姿を表したのはAクラスの坂柳有栖と神室真澄だ。

「ダブルスコアに近い大差、私が指揮をとっていたとしても話を聞く限りでは結果は変わらなかったかも知れません」

「用件はそれだけか？」

「ふふ、そんなに凄まじい人でください。体格の大きい方にその様な姿勢を取られては怖いではないですか」

余裕の笑みのまま坂柳は続ける。

「よろしければこの後試験のことについてお話を伺えればと思いをかけさせていただきました。どうですか？ チェスでも指しながら」
承太郎は少し考えた素振りを見せたが承諾すると、坂柳たちが店へと先導した。

落ち着いた雰囲気の完全個室に通されるとそれぞれドリンクを注文する。

「この船にはチェスをはじめ、様々なボードゲームやカードのレンタルを行なっているそうです」

神室が手にしていたケースからチェス盤を取り出すと駒を配置していく。

「空条さんはチェスはどの程度おやりになられるのですか？」

「素人だが気にする必要はねえぜ」

「そうでしたか、では先行をどうぞ」

予定調和、坂柳の中で先行を譲ることは決まっていた様で神室は会話が行われる前から承太郎の側に白を配置していた。

超一流の人間の対局において、チェスは先行が有利であるという統計が出されている。

坂柳は煽られた承太郎の反応をこまめに観察し、楽しんでいた。現段階では無反応だが、試験の結果から改めて承太郎の存在を強く認識した坂柳にとっては、その反応の全てに興味があった。

「しかし、随分と耳が早いな。たしか試験には不参加だったんじゃないかねえのか？」

「試験終了後直ぐに、真澄さんが詳細を報告して下さいましたので」

承太郎がポーンをひとつ前進させると、坂柳はふたつ進ませる。

心地よい音を奏でながら承太郎はひたすらにポーンを働かせ、坂柳は様々な駒を動員していく。

「高速旋回する船の意図を理解した上で、クラス内をまとめ最短ルートで洞窟を占拠した手腕は認めざるを得ません。よろしければ、至るまでの経緯など教えてくださいませんか？」

結果はともかくとして、経緯に誤解を孕んでいるがわざわざ訂正し

てやることはない。

「敵のてめえにそれを語って何のメリットがある？ 例えるなら、マジシャンが次の公演に来る客にタネを明かすようなものじゃあねえか」

「然りです。では、占有スポットの数と指名した他クラスのリーダー、ポイントの使用方法について互いに開示するというのはどうでしょうか」

「ダメだね。Bクラスは俺の所属クラスではあるが、俺のクラスじゃあねえ」

「ふふふ、可笑しな事を仰いますね。では、今朝方リタイヤされ、乗船後龍園くんと戯れていらしたのはクラスメイトに説明されてのことなのでしょうか」

今現在のBクラスが——他クラスもそうであるが——ワンマン体制に近い事を知らない坂柳ではない。

承太郎はドリンクを少し口に運び、前のめりにテーブルに肘をつけて坂柳を指差した。

「いいだろう。だがこちらからもひとつ条件を出すぜ。Aクラスの購入していた備品の概算と結果のポイントにズレがあった。そこんとこの説明をしてもらう」

神室は鉄仮面のまま表情ひとつ動かさず見守っていたが、ここにきて口を挟む。

「ちよつとそれ——真澄さんは黙っていてください」

睨みつけられた神室は黙り込んで定位置に戻った。

「真澄さんが反応してしまっただけは何かあると疑われてしまうではありませんか。やはり、退席していただいた方がよかったですようか」

冷淡な声色は冗談ではなく、強く、深く釘を刺している事に他ならない。

「取り込んでいるところ悪いが、応じるのか応じないのか、はっきりしてもらおうじゃあねえか」

「仕方ありません。のみましよう」

チエスを指しながら承太郎は語った。スポットの占有数、リーダー

無指名であること、ポイントの使い道。

余計なことはなにひとつ言わずに、端的に事実だけを述べた。

「スポット占有16か所ですか……学校側もいささか理不尽とも言える配置をしていた様ですね」

洞窟を見つけられる様に手筈を整えているにしてもあからさまな気もしないでもない。

「しかし、なるほど。Bクラスが攻めに転じなかった理由は理解しました」

承太郎や龍園のリタイアを認知している坂柳も当然、リーダーのすげ替えや自分ならどうしたかと短時間で脳内シミュレートしている。

戦術から承太郎のマインドを探っている坂柳は堅実というジャツチを下しそうになるが、本人にも形容し難い何かが引つ掛かり判決は下さない。

「Aクラスの方は先に結論から申しますと、Dクラスから毎月のプライベートポイントの支払いの見返りに特別試験での購入品を譲渡されていた様です」
「ほう」

Dクラスの早期リタイアに合点がいく。と同時にDクラスの最終スコアが気掛かりになる。

クラス単位でのリタイアはポイントを使い切った事を意味する。

その中で100以上のポイントと端数を残すには、ふたクラスのリーダー当てとスポット占有が必要になる。

ネタが割ればそれだけの話だが、実現させるのはかなりの難易度だ。

ほぼリスク無くリーダー指名をできる強みとは裏腹に、契約を反故された時の莫大なりリスクがつきまとう。

実際、契約が履行され続けるとすれば今回の勝者はBクラスなのかDクラスなのか考えるまでもない。

「龍園くんもなかなかユニークな方の様で」

坂柳はその他神室から得た情報を吐露していった。

ひとしきり情報交換を終えた頃、詰みの一手が指される。

「どうやら今回は私の勝ちの様です。チェックですね」

「少し楽しくなってきたところだ。もう一局どうだ？」

「失礼ですが、空条さんはチェスの経験は如何程に？」

「さっき話したと思うが、ど素人だぜ。対局は今のが初めてだ」

初めてで勝負に挑んでいたという事実には神室は思わず顔を顰めた。

「なるほど、なるほど。空条さん、こう言うっては何ですが私はそれなりにチェスに覚えがあります。初心者は何度挑もうとも結果は覆りはないと考えるのですが」

含みはありつつも柔和な姿勢を見せ続けていた坂柳の声に棘がつき始めた。

「さっきの試合で駒の動かし方は覚えた。問題ないぜ」

瞬間、神室の肩がびくりと跳ねた。坂柳が机に拳を叩きつけたのだ。

「……覚えた？ 今、駒の動かし方を覚えたと言いましたか？ 私はつまらない冗談は嫌いなのですよ」

思い返せば確かに承太郎はポーン以外のコマは坂柳が動かしてやらしか動かしていなかった。

確かに初心者の指し方ではあったが、それだけであれば問題なかった。

しかし、目の前の男が自分の領域内に土足で上がり込み踏み荒らした事に坂柳は怒りを隠すことができなかった。

「逃げるのか？ プライドがあると、挑戦を受けやしねえのか？」

「はじめてですよ……この私をここまでコケにした人は……」

わなわなと震える坂柳だったがひとつ息を吐き、冷静さを取り戻す。

「いいでしょう。受けて差し上げます。ですが私にも矜持というものがあります。ポーンを1つ落とし、先行2手を譲ります。そして、一手当たりの持ち時間を私は10秒、空条さんは2分のハンディキャツプマッチとします。異論は受け付けません」

「将棋で言うところの飛車角落ちってやつか。だが、負けても喚くんじやあねえぜ」

「当然です。空条さん、貴方には敗北の後誠心誠意謝罪していただきます」

「いいだろう。負ければな」

神室は自分ですら見たことのない恐ろしく冷ややかな目で承太郎を睨みつけている坂柳から、タイムキーパーを任されてしまう。

先手2手、承太郎がまず2手指してから坂柳の反撃が始まる。

承太郎は当然オープニングと呼ばれる様なチェスの常識は知らない。

にも関わらず、超人的な思考力を働かせて変則的な展開を作っている、坂柳は5秒もかからずに全てを指し返していく。

高度なハイスピードバトルに神室は訳もわからず息を呑みながらタイムマーを止めては付けてを繰り返す。

坂柳は承太郎の別人の様な指し方に内心驚きつつも強気な返しを繰り返す。

一般的にサクリファイスと呼ばれる駒を犠牲にしての罫を巡らせるが承太郎も盤面全体を把握し思考しているため簡単には乗ってこない。

そして中盤、坂柳の即座指し返しが鳴りを潜め、5秒以上使う様になり始める。

チェスにはある程度のパターンが存在している。これはコンピュータがチェスに置いて加速的に成長していった要因でもあるが、坂柳の脳内には承太郎を遥かに凌ぐデータ量が存在する。

その中から最適解を指し続ける坂柳だが、想像以上のフォークや釘付けといった将棋にも通じる戦略を打ち出してくる承太郎を前に段々と時間が迫る。

冷静さと盤面的優位を欠いた坂柳はあろうことか苦戦し始めていた。

そしてその事が本人の焦りを煽る。少しずつ堆積していったそれは誤手となって顕現する。

「しまっ——「チェックメイト」……ルークのディスクバー……」

王の逃げ道を塞がれた坂柳は歯を食いしばり承太郎を睨んだ。

そんな事は眼中にない承太郎は席を立つと帰路に就くが直ぐに立ち止まる。

「坂柳、そういえばつまらない冗談が嫌いとか言っていたな。俺にも嫌いなものがあるぜ、吐き気のする悪っつやっだ」

承太郎が振り返ると目尻に涙を溜めた坂柳が依然として睨みつけていた。??「悪とはためー自身のためだけに弱者を利用し貶め、ふみつけるやつのことだ。ましてや仲間であるクラスメイトを……てめえがやったのはそれだ」

坂柳は黙り込んでいた。

神室はあまりの迫力に怯えている。

「Aクラスのリーダーが誰であるかなんざどうだっつていい事だぜ。だがな、つまらねえ真似は二度とするんじゃないぜ」

↑To Be Continued